

平成30年度

文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

「幼児教育長期研修派遣教員」の資質・能力に関する調査研究

～幼稚園教諭及び小学校教諭の指導力等の変容の過程を中心に～



平成31年3月
山口県教育委員会

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として、山口県が実施した平成30年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。

山口県教育庁義務教育課

〒753-8501 山口市滝町1番1号

電話 083-933-4600

平成31年3月

～ 目 次 ～

はじめに

第1章 研究の目的・方法	1
---------------------------	---

第2章 研究の内容	9
------------------------	---

1. アンケート調査

(1) 「幼児教育長期研修派遣教員」を対象とした調査

- ① 調査の概要（調査の目的・調査協力者・調査時期・調査内容）
- ② 調査項目
- ③ 調査結果

(2) 「幼児教育長期研修派遣教員」派遣先園長及び在籍校校長を対象とした調査

- ① 調査の概要（調査の目的・調査協力者・調査時期・調査内容）
- ② 調査項目
- ③ 調査結果

2. 研究協議会の開催による情報収集

3. 考察

第3章 研究の成果と課題	35
---------------------------	----

1. 研究の成果

2. 課題と展望

おわりに

参考資料

- ◆幼児教育長期研修について
- ◆先進地域視察による調査
- ◆アンケート調査用紙
- ◆アンケート結果の詳細
- ◆幼児教育長期研修派遣教員及び派遣先園長，在籍校校長による自由記述（抜粋）
- ◆実践事例
 - (1) 平成30年度幼児教育長期研修派遣教員による幼稚園での実践
 - (2) 平成29年度幼児教育長期研修派遣教員による小学校での実践

はじめに

平成29年3月に、新幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領が告示され、幼稚園教育要領については、今年度から全面実施となった。

今回の改訂では、子供たちがこれからの時代を生き抜き、未来の創り手となるために必要な資質・能力を、学校と社会が共有し、共に育んでいくことが求められている。そのために、幼児教育から高等学校までの見通しをもって育成すべき資質・能力を、「生きて働く『知識・技能』の習得」、「未知の状況でも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」、「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の三つの柱に整理し、それぞれの段階での学びが生かされるよう、学びの連続性を確保することが重要とされている。その中で、改訂された幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、この姿を幼稚園の教師と小学校の教師が共有しながら、連携を図ることで、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続が図られることが期待されている。

山口県においては、幼児期から児童期までの発達や学びの連続性を踏まえた、きめ細やかな指導体制を構築するために、幼稚園と家庭、地域、小学校等との連携を進め、中でも、平成16年度から継続している山口県独自の「幼児教育長期研修」（小学校教員を1年間幼稚園又は認定こども園に派遣）を実施することで、幼児と児童、教職員同士の交流促進や接続期のカリキュラム作成等を県内各地で行い、本県の幼保・小一貫指導の推進に資する人材を育成しているところである。

そこで、本年度は、研究テーマを「幼児教育長期派遣教員の資質・能力に関する調査研究～幼稚園教諭及び小学校教諭の指導力等の変容の過程を中心に～」と設定し、本研修の15年間の成果や課題とともに、幼小連携・幼小接続の更なる推進に向けた取組の在り方について検証することとした。

本調査研究の成果が、「幼児教育長期研修」の充実・普及につながるとともに、幼稚園と小学校の接続に関わる人的・物的資源の活用の在り方を考えるきっかけとなり、子供の発達や学びを生かした教育の推進の一助になることを期待している。

第1章 研究の目的・方法

第1章 研究の目的・方法

<研究テーマ>

「幼児教育長期派遣教員」の資質・能力に関する調査研究
～幼稚園教諭及び小学校教諭の指導力等の変容の過程を中心に～

(1) 研究の目的

平成29年3月に、新幼稚園教育要領，小学校学習指導要領，中学校学習指導要領が告示され，幼稚園教育要領については，今年度から全面実施となった。

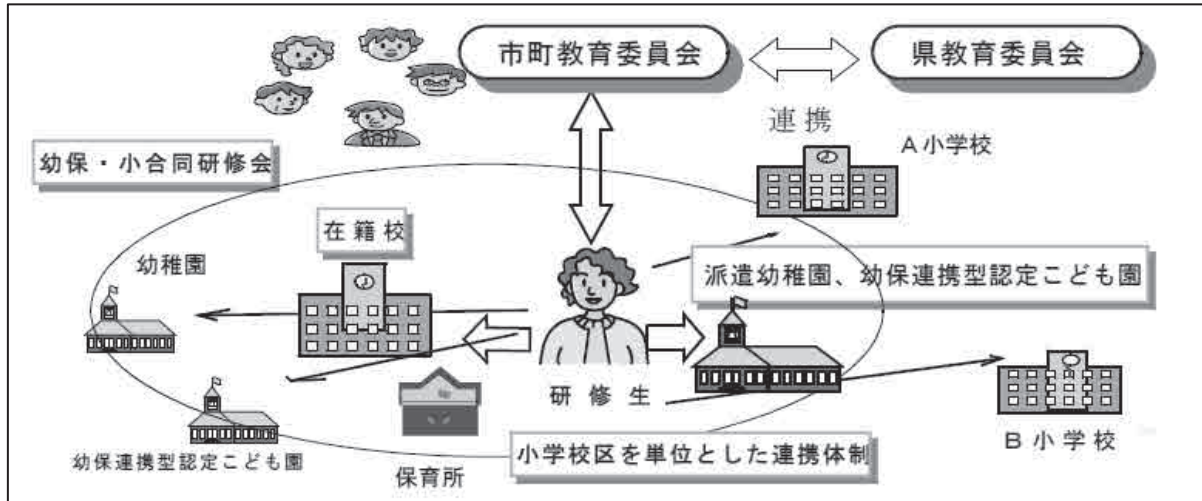
今回の改訂では，子供たちがこれからの時代を生き抜き，未来の創り手となるために必要な資質・能力を，学校と社会が共有し，共に育んでいくことが求められている。そのために，幼児期の教育から高等学校教育までを通じて育成すべき資質・能力の三つの柱「生きて働く『知識・技能』の習得」「未知の状況でも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」を明確にしている。その中で，幼稚園教育要領の改訂の大きな特徴は，幼稚園教育において育みたい資質・能力や，5領域のねらい及び内容に基づく活動全体を通してそれが育まれている幼児の具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10項目で示されたことである。この姿を幼稚園の教師と小学校の教師が共有しながら，連携を図ることで，幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続が図られることが期待できる。

こうした中，山口県においては，これまで，「未来を拓くたくましい『やまぐちっ子』の育成」に向け，学びの連続性を踏まえた指導の充実を図り，きめ細やかな指導体制を構築するために，幼稚園，認定こども園，保育所，小学校，中学校，高等学校の連携を推進してきた。

主な取組としては，「幼児教育長期研修」の実施，「小学校区を単位とした幼保・小連携体制づくり」の推進，「つながる子どもの育ち大会」の開催等があり，こうした取組の継続により，幼児と児童や教職員同士の交流等が県内各地で行われ，幼保・小連携の機運が醸成されている。

中でも，平成16年度から実施している「幼児教育長期研修」は，山口県独自の取組である。「幼児教育長期研修」とは，小学校の教員を幼稚園又は幼保連携型認定こども園に派遣し，幼児期の指導及び幼児期の育ちを踏まえた小学校低学年での指導の在り方について研修し，本県における幼保・小一貫指導の推進に資する人材を育成するものである。昨年度までに61人の小学校教員が本研修を経験している。研修の一環として，「接続期のカリキュラム実践事例集」や「就学前の保護者向けリーフレット」の作成，地域と連携した幼児教育の在り方に関する研究等を行ってきた。昨年度は，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた幼稚園・小学校の各教育課程に対する理解の共有やカリキュラム作成の効果的な在り方について調査研究を行った。今年度は，その成果の普及とともに，接続カリキュラムのPDCAサイクルの確立を推進しているところである。

<イメージ図>



<成果物>

幼稚園教育要領の全面実施の年である今年度は、山口県が「幼児教育長期研修」の実施を開始してから15年目を迎える。そこで、これを契機に「『幼児教育長期研修派遣教員』の資質・能力に関する調査研究～幼稚園教諭及び小学校教諭の指導力等の変容の過程を中心に～」を研究テーマとして調査研究を行うことで、「幼児教育長期研修」の成果と課題について分析し、本県における幼小接続の在り方を客観的に捉え直すとともに、全国各地において、幼児期の教育内容等の深化・充実を図る一助となることを目指す。

(2) 研究の方法

平成16年度から実施している「幼児教育長期研修」が、派遣教員自身の資質・能力の向上及び、派遣幼稚園の教諭や在籍小学校の教諭の指導力等の変容において、どのような役割を果たしているかを、以下の方法で明らかにする。

① 調査研究実行委員会の設置と運営

- ・大学教員，幼稚園長，小学校長，幼稚園教諭，小学校教諭，行政関係者等で構成する調査研究実行委員会を設置する。
- ・調査研究実行委員会においては、「幼児教育長期研修派遣教員」（以下：派遣教員）の取組を基に、派遣教員の資質・能力の形成や向上，幼稚園教諭及び小学校教諭に求められる指導力等について協議，検討する。

- ・検討に当たっては、大学教員による専門的な指導・助言及び講義の場を設ける。
- ・調査結果等を基に、幼稚園教諭と小学校教諭の指導力等の変容の過程について検証し、研究結果（成果）の取りまとめを行う。

② 先進地域視察による調査研究

先進地域（幼稚園と小学校の人事交流を推進している、幼小接続に向けた取組が推進され体制が整っている、文部科学省委託事業等による調査研究を実施し成果を普及している等）を視察し、幼稚園教諭と小学校教諭の相互理解や指導力等の変容を促進する取組について調査する。

③ アンケート調査及び研究協議会の開催による情報収集

<調査の内容>

- ・「幼児教育長期研修」を経験した小学校教諭及び派遣園の園長又は教諭、在籍校の校長にアンケート調査を実施し、派遣前と派遣後では、⑦幼稚園教諭と小学校教諭の幼小連携や幼小接続に対する意識や理解、指導力等がどのように変容したか、④幼稚園や小学校にどのような影響があったか等について調査する。また、「幼児教育長期研修」経験者を参加対象とする研究協議会において情報を収集する。

<調査の分析>

- ・調査研究実行委員会（年5回開催）において、アンケート調査及び研究協議会における聞き取り内容等の分析等を行う。調査分析については、山口大学との連携によって行う。

	調査対象	実施時期	備考
アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> ・研究協力園及び研究協力校 ・平成16～29年度「派遣教員」60人程度 ・上記教員の派遣先幼稚園及び在籍校のうち、調査協力が可能な園及び学校の所属長及び教員40人程度 	9月～ 10月	調査項目の決定、質問紙の作成及び調査結果の分析については、山口大学の協力のもと、調査研究実行委員会において行う。
研究協議会の開催による情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ・研究協力園及び研究協力校 ・平成16～29年度「派遣教員」のうち、現在の役職（指導主事、管理職、教諭）及び派遣年度等を考慮して選出した者10人程度 	10月～ 11月	

④ 事例分析の実施と検証

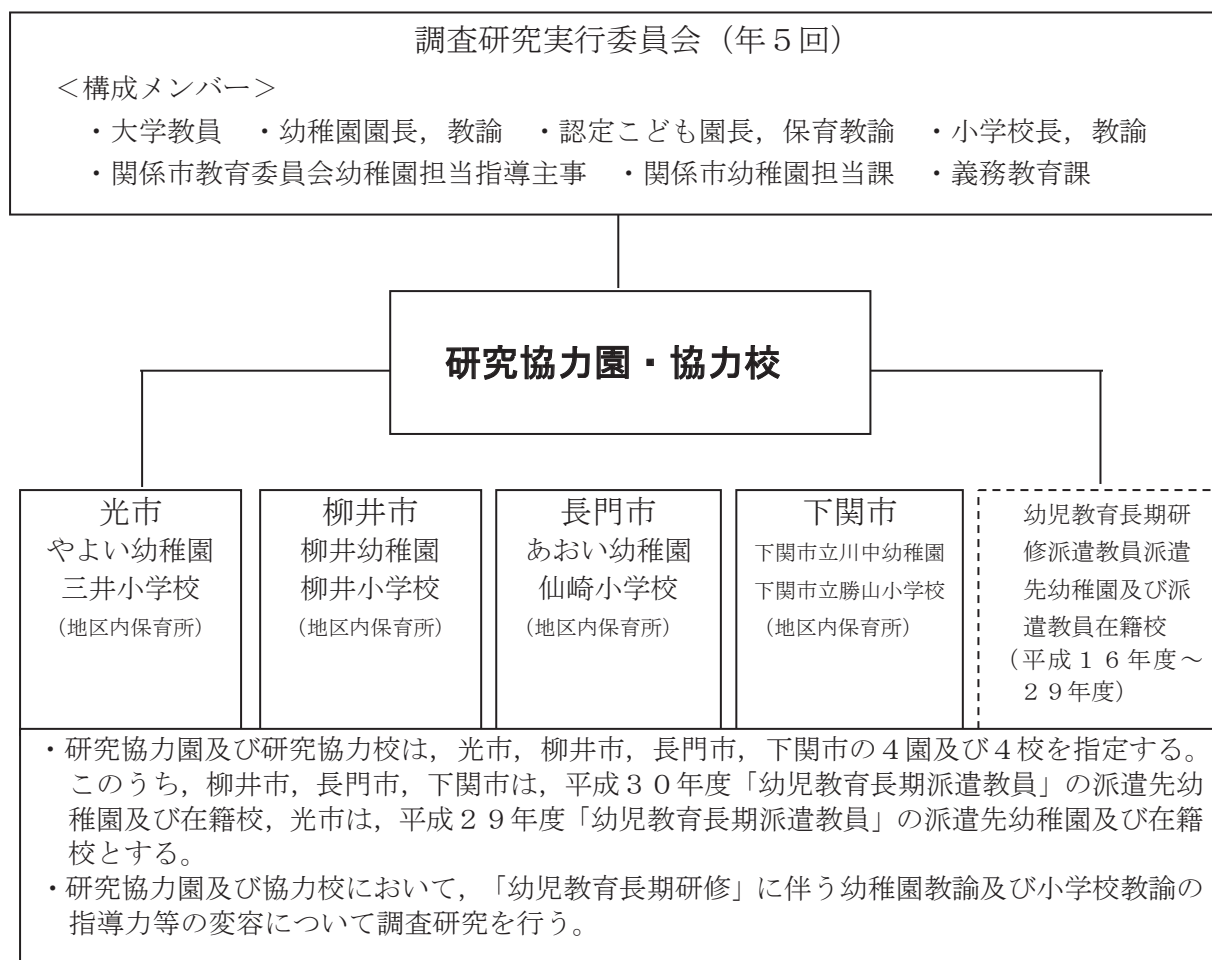
- 平成30年度「派遣教員」の派遣先幼稚園及び在籍校である県内3園，3校（柳井市，長門市，下関市），及び平成29年度「派遣教員」の派遣先幼稚園及び在籍校である県内1園，1校（光市）を研究協力園，研究協力校に指定する。
- 研究協力園及び研究協力校を対象とし，幼児理解や幼児との関わり方について事例分析を行うことで，「派遣教員」の研修前と研修後の意識や指導力等の変容について調査・分析する。

	調査対象	実施時期	備考
事例分析	研究協力園及び研究協力校	7月～1月	山口大学の協力のもと実施

⑤ 参考資料の作成

幼稚園教諭と小学校教諭の相互理解や指導力等の向上のために，本調査結果を，いずれを対象とした研修会等でも共通に活用できる資料(パンフレット)にまとめ，県内の就学前施設，公立小学校及び全国の関係機関に配布する。併せて，山口県教育委員会義務教育課のウェブサイトに掲載し，情報提供を通して，研究成果の普及を図る。

(3) 実施体制



(4) 研究計画

時 期	内 容	主となる実行委員
契約締結後 7月24日	調査研究実行委員会 ① ・研究推進体制・計画について、協議・検討 ・アンケート調査及び研究協議会の開催による情報収集の調査内容（項目、方法等）についての検討 ・事例分析についての中間報告	・平成29, 30年度「幼児教育長期研修派遣教員」に係る関係者 ・山口大学 ・関係市教育委員会 ・義務教育課
8月28日	調査研究実行委員会 ② ・アンケート調査及び研究協議会の開催による情報収集の項目及び実施方法の決定 ・事例検討	・山口大学 ・関係市教育委員会 ・義務教育課
9月～11月	アンケート調査及び研究協議会の開催による情報収集の実施 ＜調査対象＞ ・研究協力園及び研究協力校 ・幼児教育長期研修派遣教員（平成16年～30年度） ・必要に応じて、昨年度までの幼児教育長期研修派遣教員派遣先幼稚園及び派遣教員在籍校	・平成16～30年度「幼児教育長期研修派遣教員」 ・関係市教育委員会 ・義務教育課
9月～12月	先進地域視察による調査・研究 ＜人事交流推進地域＞ ・京都市 ・熊本市 ・広島市 ・香川県	・平成30年度「幼児教育長期研修派遣教員」 ・関係市教育委員会 ・義務教育課
11月	調査研究実行委員会 ③ ・調査結果の分析及び考察 ・事例検討	・平成28～30年度「幼児教育長期研修派遣教員」 ・山口大学 ・関係市教育委員会 ・義務教育課
12月	調査研究実行委員会 ④ ・調査結果の分析及び考察 ・事例検討 ・報告書作成	・平成28～30年度「幼児教育長期研修派遣教員」 ・山口大学 ・関係市教育委員会 ・義務教育課
1月	調査研究実行委員会 ⑤ ・報告書作成 ・調査研究結果の報告	・平成28～30年度「幼児教育長期研修派遣教員」 ・山口大学 ・関係市教育委員会 ・義務教育課
2月	・研究成果のまとめ ・市町幼保・小連携担当指導主事等連絡協議会の開催 ・ウェブサイト掲載による情報提供	・義務教育課 ・市町教育委員会

第2章 研究の内容

1. アンケート調査

(1) 「幼児教育長期研修派遣教員」を対象とした調査

- ① 調査の概要
- ② 調査項目
- ③ 調査結果

(2) 「幼児教育長期研修派遣教員」派遣先園長及び在籍校校長を対象とした調査

- ① 調査の概要
- ② 調査項目
- ③ 調査結果

2. 研究協議会の開催による情報収集

3. 考察

第2章 研究の内容

1 アンケート調査

(1) 「幼児教育長期研修派遣教員」を対象とした調査

■アンケート調査

①調査の概要

○調査対象者

平成16年度から30年度までに「幼児教育長期派遣研修」を経験した小学校教諭64人のうち現在在職中の62人を対象に調査を実施。

○調査時期

平成30年10月

○調査内容

「幼児教育長期研修派遣教員」の派遣前と派遣後では、⑦幼稚園教諭と小学校教諭の幼小連携や幼小接続に対する意識や理解、指導力等がどのように変容したか、⑧幼稚園や小学校にどのような影響があったか等について調査。

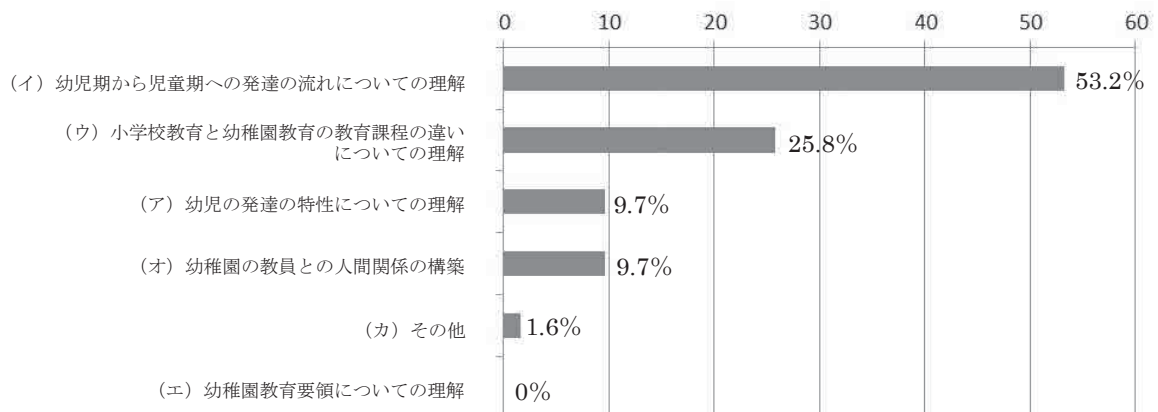
②調査項目

平成29, 30年度の「幼児教育長期研修派遣教員」への予備調査及び「幼児教育長期研修派遣教員」のこれまでの報告書を基に調査項目を作成。調査項目は以下のとおり。

- (1) 長期研修を終えて成果を感じていること
- (2) (1) で回答した成果につながった経験
- (3) 長期研修後、学級経営で意識するようになったこと
- (4) 長期研修後、授業づくりで意識するようになったこと
- (5) スタートカリキュラムの編成・実施について
- (6) 幼稚園や小学校において進んだ取組について
- (7) 幼小連携をより一層推進するために必要なこと
- (8) 小学校入学時の児童の指導に効果的だった点
- (9) 「児童の声かけ」の変化について
- (10) 小学校教諭等としての改善に役立ったこと

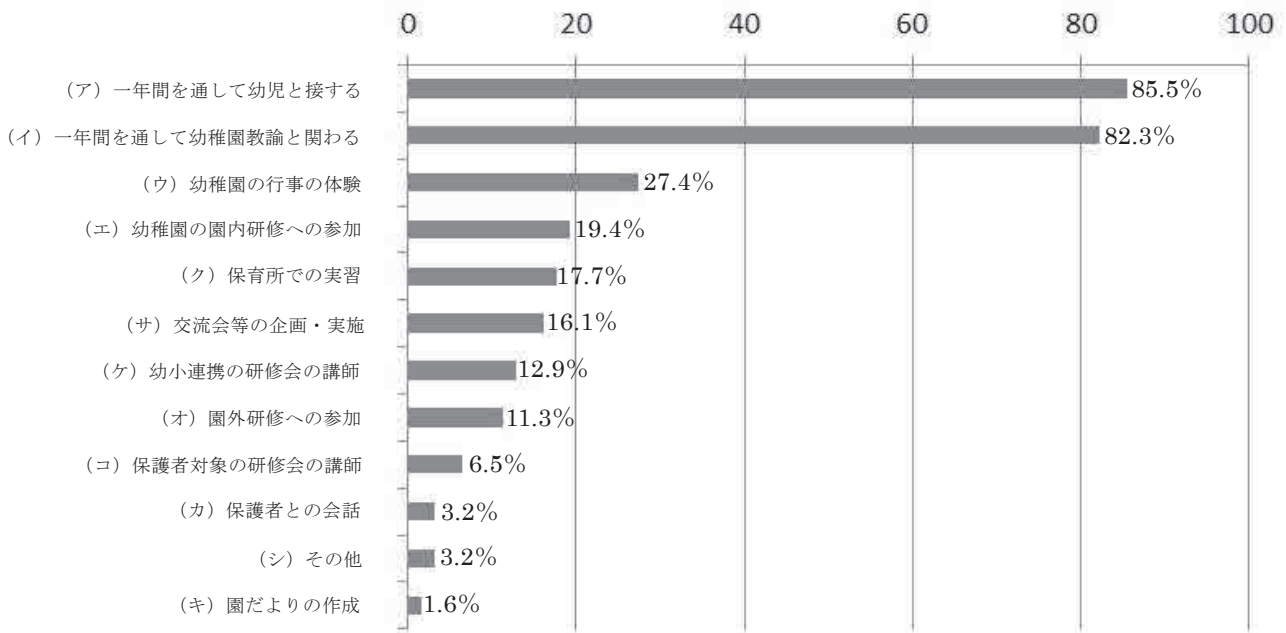
③調査結果 【結果の詳細と自由記述の主なものについては、参考資料P.56～P.78に掲載】

- (1) 長期研修を終えて、あなたはどのようなことに成果を感じていますか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。



長期研修の成果のうち、「幼児期から児童期への発達の流れについての理解」が53.2%、「小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解」が25.8%、「幼児の発達の特性についての理解」が9.7%、「幼稚園の教員との人間関係の構築」が9.7%となっている。

(2) 長期研修において、(1) で回答した成果につながったと考えられる経験は何ですか。最大3つまで選んでください。

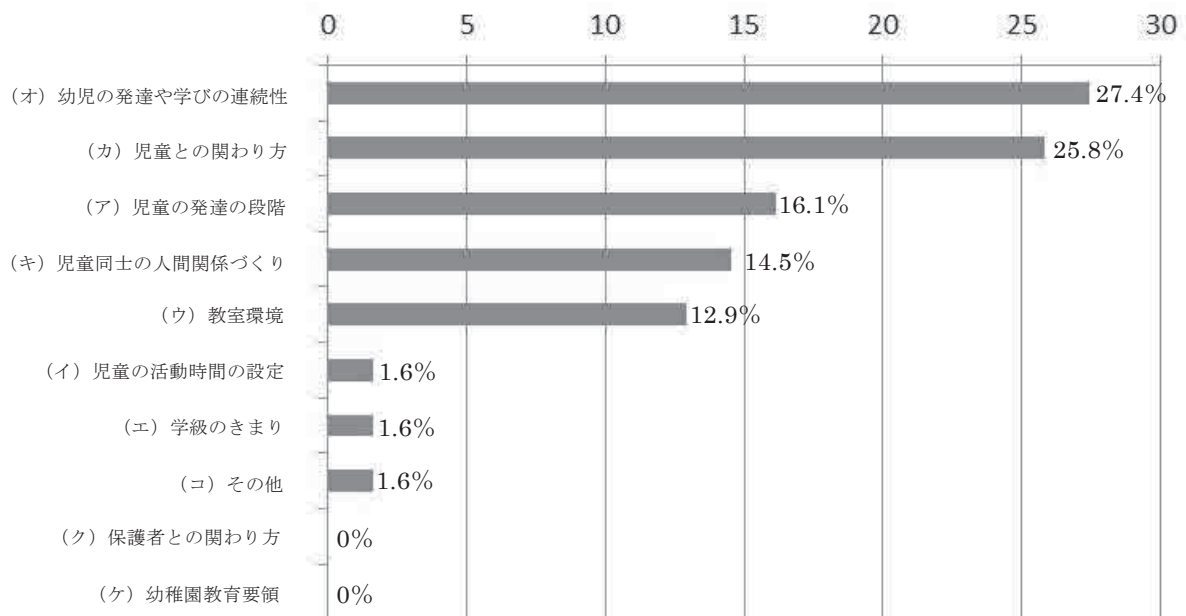


(1) で回答した成果につながったと考えられる経験については、「一年間を通して幼児と接する」が 85.5%、「一年間を通して幼稚園教諭と関わる」が 82.3%となっている。

その中で、(1) で最も多かった(イ)「幼児期から児童期への発達の流れについての理解」を選んだ派遣教員(53.2%)のうち、(2) で(ア)「一年間を通して幼児と接する」を選んだ派遣教員は 93.9%、(イ)「一年間を通して幼稚園教諭と関わる」を選んだ派遣教員は 81.8%であった。また、(1) で(ウ)「小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解」を選んだ派遣教員(25.8%)のうち、(2) で(ア)「一年間を通して幼児と接する」を選んだ派遣教員は 93.8%、(イ)「一年間を通して幼稚園教諭と関わる」を選んだ派遣教員は 87.5%であった。いずれも、成果があった経験として、「一年間の研修期間、日々幼児や幼稚園教諭と接すること」を挙げている。

また、(1) で(ア)「幼児の発達の特性についての理解」を選んだ派遣教員(9.7%)では、「一年間を通して幼児と接する」「一年間を通して幼稚園教諭と関わる」以外にも、50%が「幼稚園行事の体験」を、33.3%が「保護者対象の研修会の講師」を選んでいる。(1) で(オ)「幼稚園の教員との人間関係の構築」を選んだ派遣教員(9.7%)では、「一年間を通して幼稚園教諭と関わる」を全員が選択するとともに、「一年間を通して幼児と接する」「園外研修への参加」「保育所での実習」「交流会等の企画・実施」を成果があった経験として挙げた派遣教員がそれぞれ 33.3%いた。

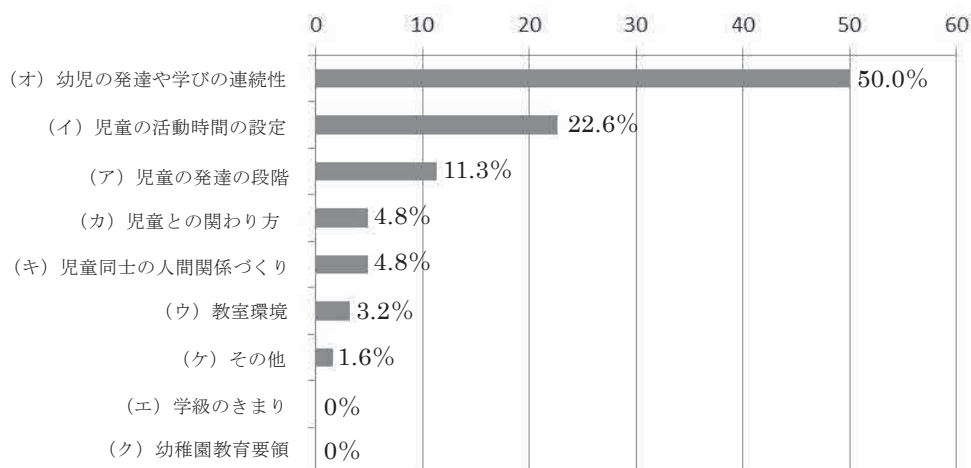
(3) 長期研修を終えて、あなたは「学級経営」にあたってどのようなことを意識するようになりましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。



長期研修後、小学校での学級経営に当たって意識するようになったことは、「幼児の発達や学びの連続性」が27.4%、「児童との関わり方」が25.8%、「児童の発達の段階」が16.1%、「児童同士の人間関係づくり」が14.5%、「教室環境」が12.9%となっている。

(ク)「保護者との関わり方」、(ケ)「幼稚園教育要領」は0%であった。

(4) 長期研修を終えて、あなたは「授業づくり」にあたってどのようなことを意識するようになりましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。



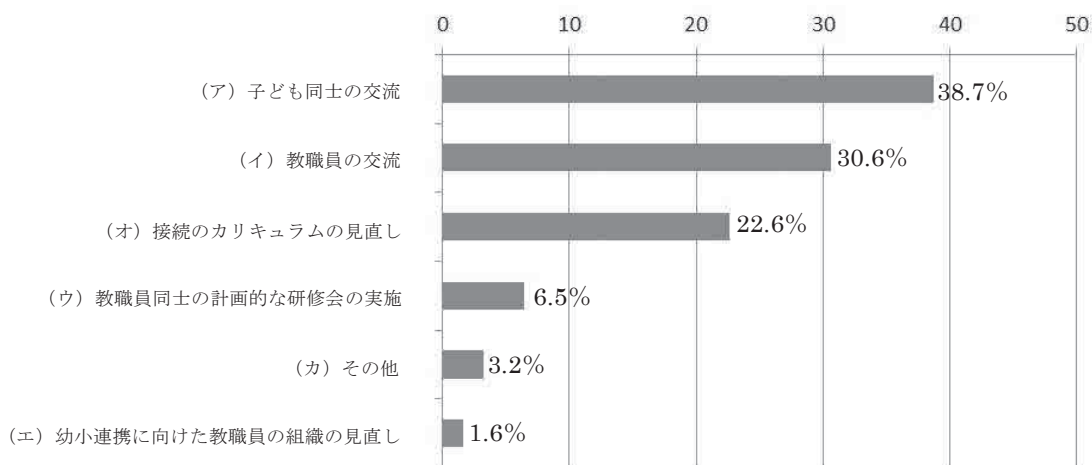
長期研修後、小学校での授業づくりに当たって意識するようになったことは、「幼児の発達や学びの連続性」が50.0%、「児童の活動時間の設定」が22.6%、「児童の発達の段階」が11.3%となっている。

(エ)「学級のきまり」、(ク)「幼稚園教育要領」は0%であった。

(5) 長期研修によって、小学校において、スタートカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。(自由記述)

小学校の行事や時間割に子供の動きを当てはめていくのではなく、そこに子供の実態を見ながら内容・時間ともに柔軟に編成・実施した。(抜粋)

(6) 長期研修によって、園や小学校においてどのような取組がすすみましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

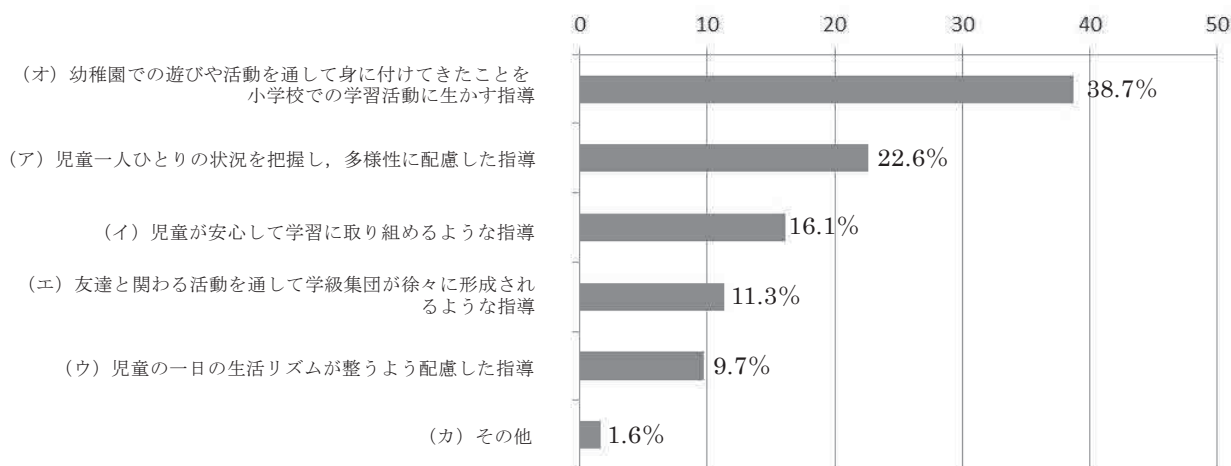


長期研修によって、園や小学校において進んだ取組は、「子ども同士の交流」が38.7%、「教職員の交流」が30.6%、「接続のカリキュラムの見直し」が22.6%、「教職員同士の計画的な研修会の実施」が6.5%、「幼小連携に向けた教職員の組織の見直し」が1.6%となっている。

(7) 幼小連携をより一層推進するためには何が必要ですか。(自由記述)

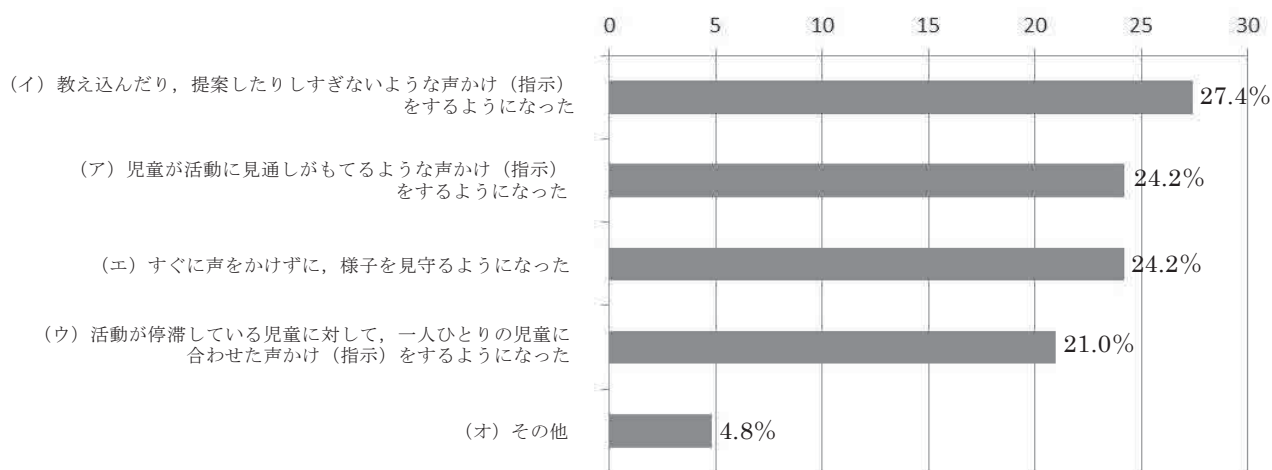
目指す子供の姿を共有して、それに向けてそれぞれの段階で計画を立て、指導する。園も小学校も同じ思いで子供を育てている。(抜粋)

(8) 長期研修は、小学校入学時の児童の指導にどのような点で効果的でしたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。



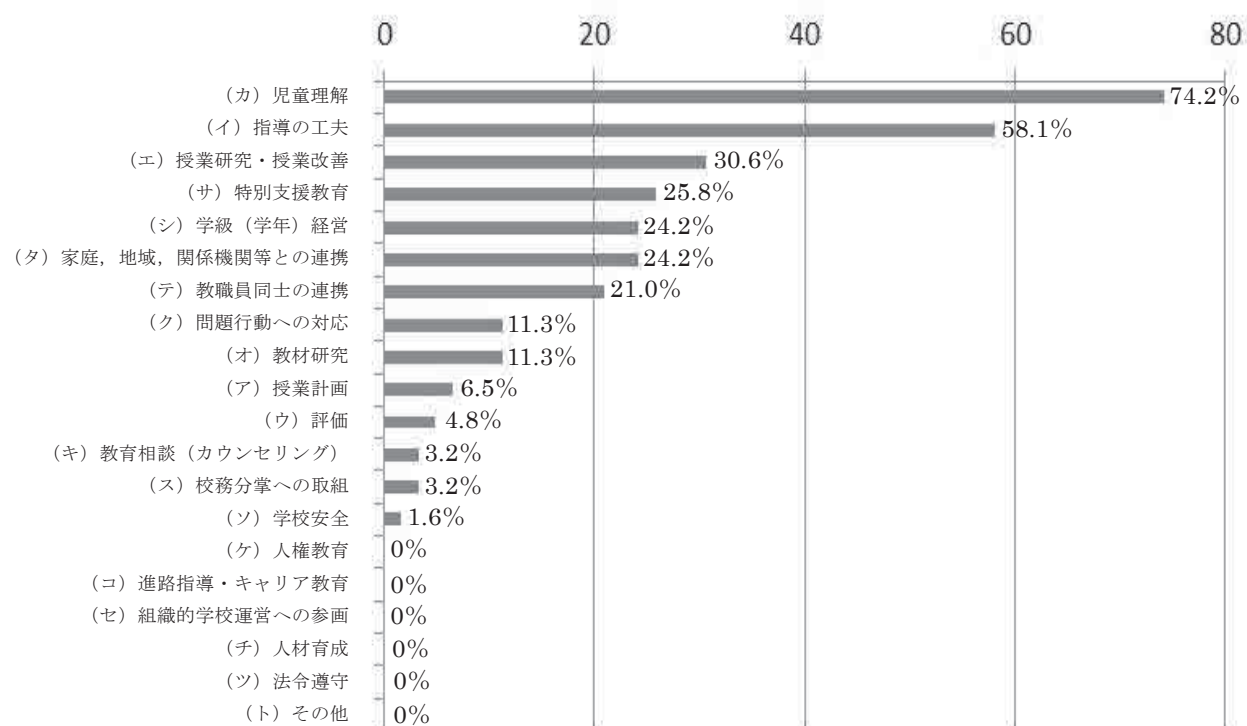
長期研修が、小学校入学時の児童の指導において効果的だったことは、「幼稚園での遊びや活動を通して身に付けてきたことを、小学校での学習活動に生かす指導」が38.7%、「児童一人ひとりの状況を把握し、多様性に配慮した指導」が22.6%、「児童が安心して学習に取り組めるような指導」16.1%、「友達と関わる活動を通して、学級集団が徐々に形成されるような指導」が11.3%、「児童の一日の生活リズムが整うよう配慮した指導」が9.7%となっている。

(9) 「長期研修の後、児童への声かけが変わった」という声を聞きます。何が一番変わりましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。



長期研修後の児童への声かけの変化は、「教え込んだり、提案したりしすぎないような声かけ(指示)をするようになった」が27.4%、「児童が活動に見通しがもてるような声かけ(指示)をするようになった」が24.2%、「すぐに声をかけずに、様子を見守るようになった」が24.2%、「活動が停滞している児童に対して、一人ひとりの児童に合わせた声かけをするようになった」が21.0%となっている。

(10) 長期研修の経験は、小学校教諭等としてどのような点の改善に役立ちましたか。
特に当てはまる項目を3つ選んでください。



長期研修の経験が、小学校教諭としてのどのような改善に役立ったかについては、「児童理解」が74.2%、「指導の工夫」が58.1%、「授業研究・授業改善」が30.6%となっている。その他にも、「特別支援教育」が25.8%、「学級(学年)経営」と「家庭, 地域, 関係機関等との連携」が24.2%、「教職員同士の連携」が21.0%であった。

(ケ)「人権教育」,(コ)「進路指導・キャリア教育」,(セ)「組織的學校運営への参画」,(チ)「人材育成」,(ツ)「法令遵守」,(ト)「その他」の項目は、いずれも0%であった。

なお、(ア)から(ト)の選択肢は「山口県教員育成指標【教諭】(平成30年3月)に示している「求められる資質能力」の項目を参考に本調査のために作成した。

(2) 「幼児教育長期研修派遣教員」派遣先園長及び在籍校校長を対象とした調査

「幼児教育長期研修派遣教員」派遣先園長

■ アンケート調査

① 調査の概要

○ 調査対象者

平成26～30年度の「幼児教育長期研修」派遣園18園（公立9園，私立9園）のうち16園（公立7園，私立9園）の園長を対象に調査を実施。※公立幼稚園のうち2園は閉園

○ 調査時期

平成30年10～11月

○ 調査内容

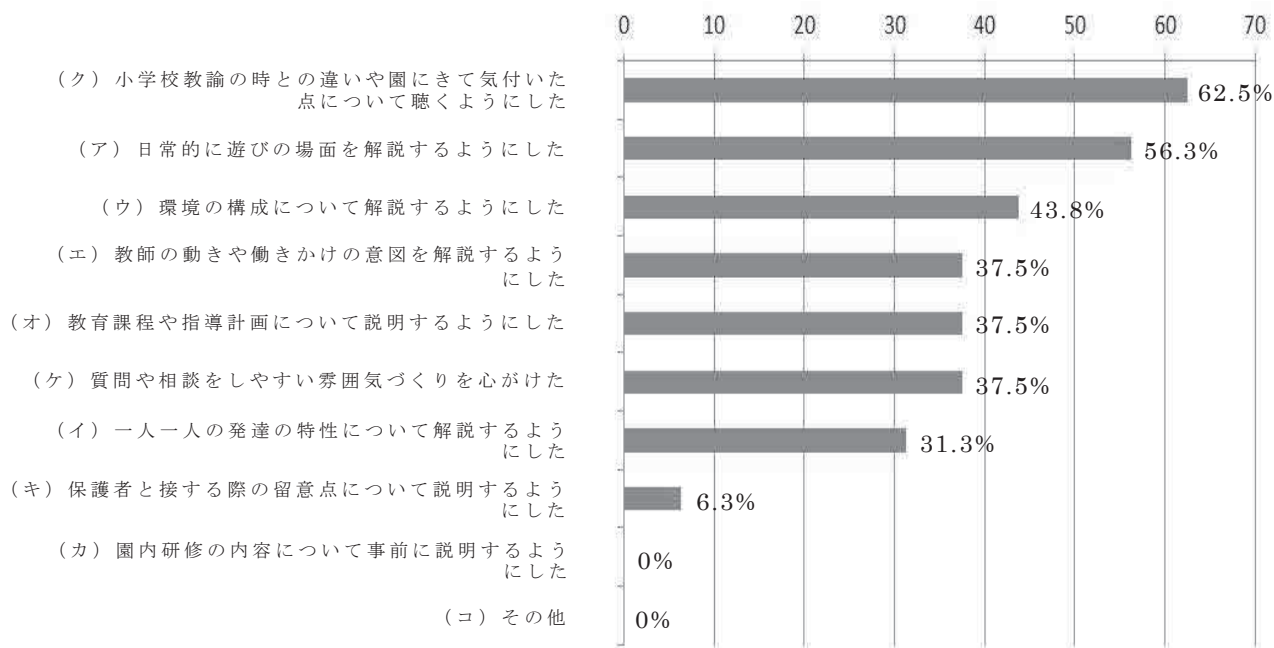
「幼児教育長期研修派遣教員」の派遣前と派遣後では、㊦幼稚園教諭と小学校教諭の幼小連携や幼小接続に対する意識や理解，指導力等がどのように変容したか，㊧幼稚園や小学校にどのような影響があったか等について調査。

② 調査項目

- (1) 幼児教育長期研修派遣教員の派遣中に配慮した点
- (2) 幼児教育長期研修派遣教員の受け入れにより，幼稚園教諭にとって成果を感じたこと
- (3) 幼児教育長期研修派遣教員の受け入れにより，カリキュラム・マネジメントに生かすことができたこと
- (4) 幼児教育長期研修によって，園において幼小連携・接続に関して進んだ取組
- (5) 幼小連携・接続をより一層推進するために必要なこと
- (6) 幼児教育長期研修によって，接続のカリキュラムの編成・実施において変わったこと

③ 調査結果【結果の詳細と自由記述の主なものについては、参考資料 P. 56～P. 78 に掲載】

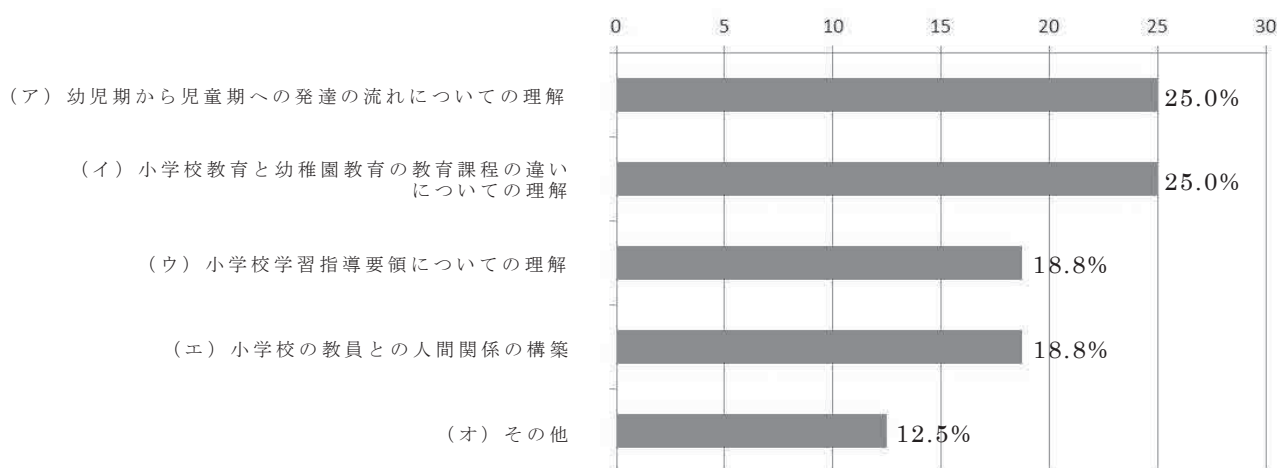
(1) 長期研修派遣教員の派遣期間中に、どのような点に配慮しましたか。
最大3つまで選んでください。



長期研修派遣教員の派遣期間中に配慮したことについては、「小学校教諭の時との違いや園にきて気付いた点について聴くようにした」が 62.5%、「日常的に遊びの場面を解説するようにした」が 56.3%、「環境の構成について解説するようにした」が 43.8%という回答であった。

(カ)「園内研修の内容について事前に説明するようにした」、(コ)「その他」は 0%であった。

(2) 長期研修派遣教員を受け入れたことにより、園の先生方にとってどのようなことに成果を感じましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

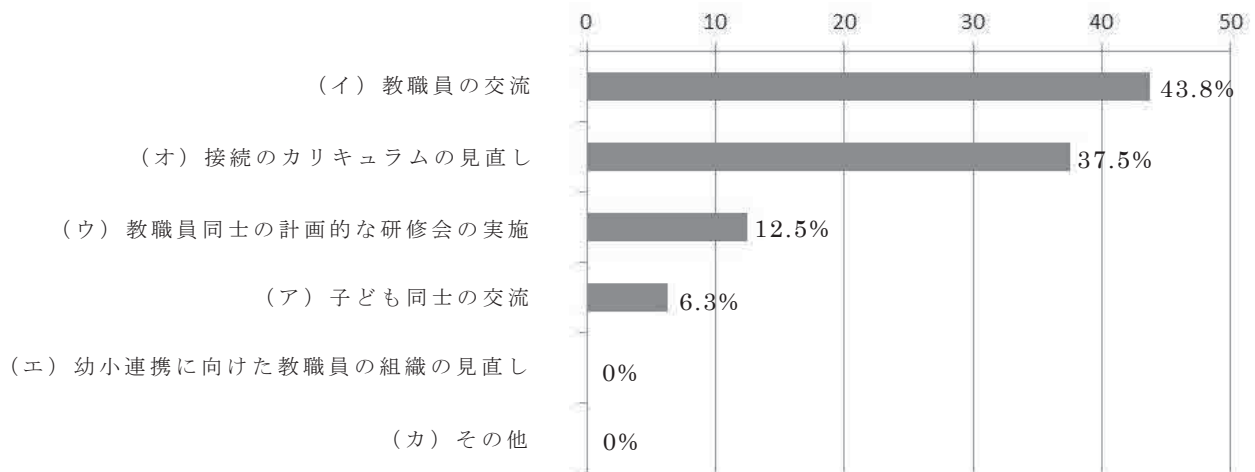


長期研修派遣教員を受け入れたことによる、園の先生方にとっての成果については、「幼児期から児童期への発達の流れについての理解」が 25.0%、「小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解」が 25.0%という回答であった。

(3) 長期研修派遣教員の受け入れは、どのような点でカリキュラム・マネジメントに生かすことができましたか。(自由記述)

アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの整合性を取るなど接続を意識したカリキュラムを編成できたことで、園の職員が自信をもって教育にあたるようになった。教育活動の見直し・改善を行うことで、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続に必要な資質・能力を身に付けることができた。(抜粋)

(4) 長期研修によって、園において幼小連携・接続に関するどのような取組がすすみましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。



長期研修によって、園において幼小連携・接続に関して進んだ取組については、「教職員の交流」が43.8%、「接続のカリキュラムの見直し」が37.5%という回答であった。

(エ)「幼小連携に向けた教職員の組織の見直し」、(カ)「その他」の項目は0%であった。

(5) 幼小連携・接続をより一層推進するためには何が必要ですか。(自由記述)

- ・ 接続に関する学校と園の話合いの時間の確保が大切である。
- ・ 小学校の生活を見る機会が増えるとよい。
- ・ 園側が受け身にならず、意図を互いに伝えながら一緒に活動するとよい。
- ・ 交流や連携において、教職員全体が共通理解することが大切である。マンネリ化しないために、反省・見直しをすることも大切である。
- ・ 校長と園長が連携の意義について理解することが必要である。(抜粋)

(6) 長期研修によって、接続のカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。(自由記述)

幼児教育と小学校教育の違いを理解した上で、接続を意識したアプローチ・スタートカリキュラムを編成した。長研教員から教わったことを園の教育目標に盛り込み、継続して実践に取り組んでいる。(抜粋)

「幼児教育長期研修派遣教員」在籍校校長

■ アンケート調査

① 調査の概要

○ 調査対象者

平成26～30年度の「幼児教育長期研修派遣教員」18人が現在在籍している小学校の校長を対象に調査を実施。

○ 調査内容

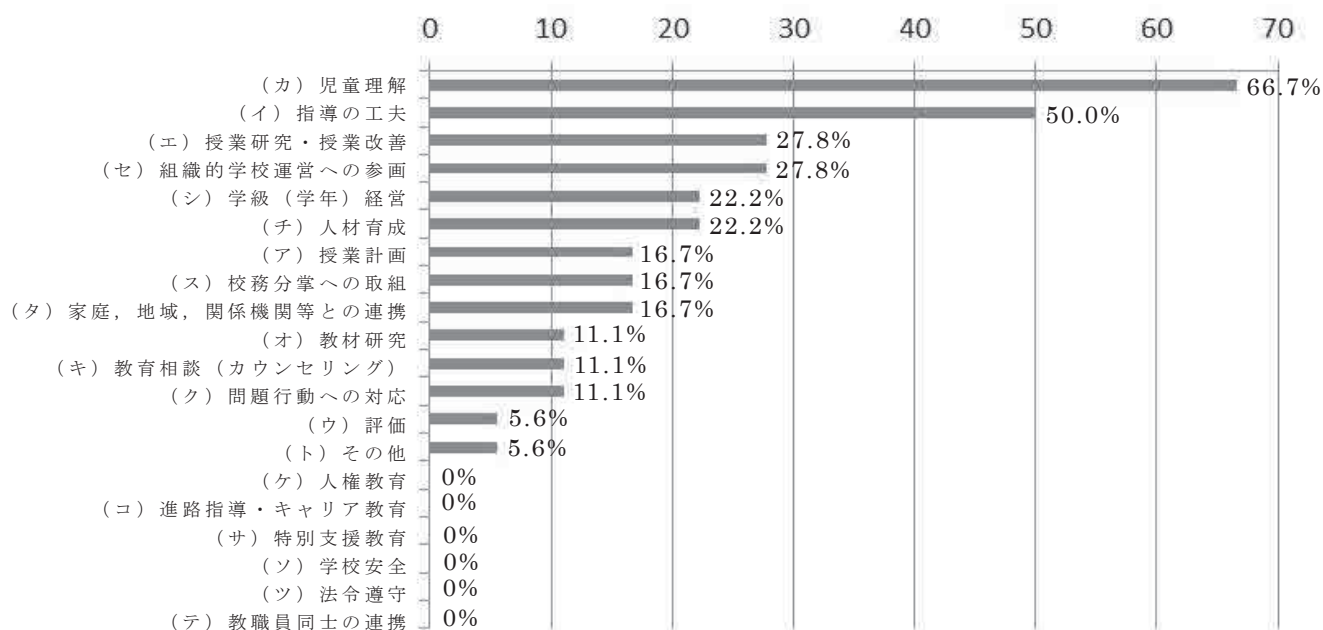
「幼児教育長期研修派遣教員」の派遣前と派遣後では、㊦幼稚園教諭と小学校教諭の幼小連携や幼小接続に対する意識や理解，指導力等がどのように変容したか，㊧幼稚園や小学校にどのような影響があったか等について調査。

② 調査項目

- (1) 幼児教育長期研修の経験が，派遣教員の成長（改善）に役立った点
- (2) (1) で選択した項目についての理由やエピソード等
- (3) 幼児教育長期研修派遣教員が経験を小学校で活用するために配慮したこと
- (4) 幼児教育長期研修によって，小学校において幼小連携・接続に関して進んだ取組
- (5) 幼小連携・接続をより一層推進するために必要なこと
- (6) 幼児教育長期研修によって，小学校において，スタートカリキュラムの編成・実施において変わったこと

③調査結果【結果の詳細と自由記述の主なものについては、参考資料 P. 56～P. 78 に掲載】

(1) 長期研修の経験は、長期研修派遣教員のどのような点の成長（改善）に役立ちましたか。特に当てはまる項目を3つ選んでください。



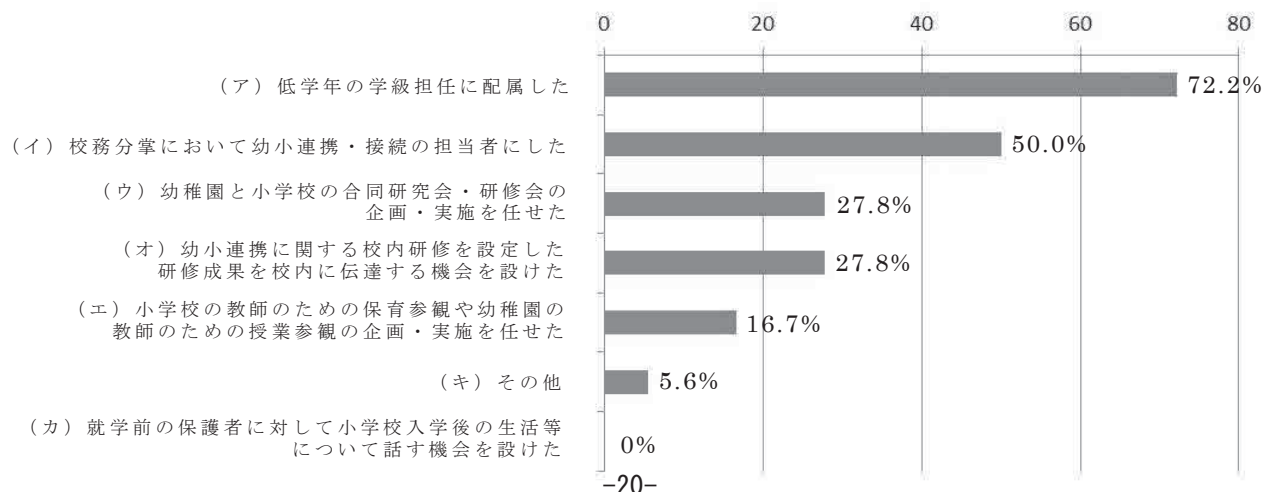
長期研修の経験による長期研修派遣教員の成長（改善）については、「児童理解」が66.7%、「指導の工夫」が50.0%という回答であった。上位3項目については、派遣教員自身の回答と同様の傾向であった。

(ケ)「人権教育」、(コ)「進路指導・キャリア教育」、(サ)「特別支援教育」、(ソ)「学校安全」、(ツ)「法令遵守」、(テ)「教職員同士の連携」の項目については0%であった。

(2) (1) で選択した項目について、その理由やエピソード等を書いてください。

幼稚園の学びをもとにした指導ができており、子供の成長に応じた声かけを行いながら、ゆっくりと時間をかけて子供を見取っている。小学校の視点だけでなく、幼稚園の視点でも見ることができるようになり、心にゆとりのある指導につながっている。(抜粋)

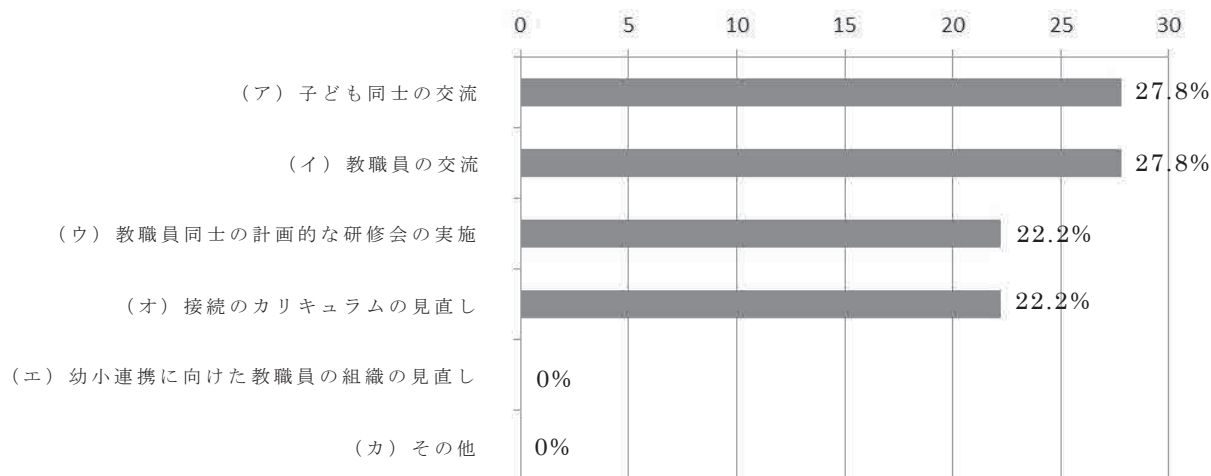
(3) 長期研修派遣教員がその経験を小学校で活用できるよう、どのような配慮をしましたか。特に当てはまる項目を2つ選んでください。



長期研修派遣教員が、研修の経験を小学校で活用できるように配慮したことについては、「低学年の学級担任に配属した」が72.2%、「校務分掌において幼小連携・接続の担当者にした」が50.0%という回答であった。

(カ)「就学前の保護者に対して小学校入学後の生活等について話す機会を設けた」の項目については0%であった。

(4) 長期研修によって、小学校において幼小連携・接続に関するどのような取組がすすみましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。



長期研修によって、小学校において幼小連携・接続に関して進んだ取組については、「子ども同士の交流」が27.8%、「教職員の交流」が27.8%、「教職員同士の計画的な研修会の実施」が22.2%、「接続のカリキュラムの見直し」が22.2%という回答であった。

(エ)「幼小連携に向けた教職員の組織の見直し」、(カ)「その他」は0%であった。

(5) 幼小連携・接続をより一層推進するためには何が必要ですか。(自由記述)

幼小連携のパイプ役となる人材を育成して、幼小連携の必要性を全教職員が理解した上で管理職同士・教職員同士・子供同士の交流を一層充実することが必要。(抜粋)

(6) 長期研修によって、小学校において、スタートカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。(自由記述)

スタートカリキュラムの目的、内容が整い、計画的に実施できるようになった。幼稚園の学びをもとに、小学校でやるべきことを精選し、効果的な指導ができるようになった。年間を通じて、目指す子供の姿を明らかにした取組ができるようになった。幼小のギャップを埋め、滑らかな接続ができるようになった。(抜粋)

2 研究協議会の開催による情報収集

① 研究協議会の概要

研修期間の経験や、研修後の取組等について情報を収集し、「幼児教育長期研修」が派遣教員自身の資質・能力の向上及び派遣幼稚園や在籍小学校に与える影響について明らかにすることを目的に、現在様々な立場で活躍している「幼児教育長期研修」経験者による研究協議会を開催した。

○日時 平成30年10月29日（月）

○会場 県政資料館 第1会議室

○参加者

	職名	派遣年度	グループ
1	小学校校長	16年度	A
2	小学校教頭	17年度	A
3	小学校教頭	20年度	A
4	教育委員会 指導主事	22年度	A
5	小学校教頭	23年度	A

6	小学校教諭	28年度	B
7	小学校教諭	29年度	B
8	小学校教諭	29年度	B
9	小学校教諭	30年度	B
10	小学校教諭	28年度	C
11	小学校教諭	29年度	C
12	小学校教諭	30年度	C
13	小学校教諭	30年度	C

- 内容
- ・所管説明
 - ・平成30年度長期研修派遣教員 先進地視察報告
 - ・グループ協議

② グループ協議による情報収集

○グループ協議について

グループは現在の役職別とし、「幼児教育長期研修」について、各自の「成果」「課題」「課題解決に向けたアイデアや方策」を中心に協議した。協議の方法は、各自の考えを付箋に記入し、互いに発表しながら大判用紙にまとめていった。協議内容は以下のとおりである。

【Aグループ】管理職（指導主事含）

1, 管理職として長期研修の成果をどのように生かしているか。

【環境構成の工夫】

- ・入学後の仲間づくりの方法
- ・入学後の子供たちの対話がしやすい環境の工夫
- ・季節感あふれる掲示物の工夫

- ・子供たちが無駄なく移動しやすい導線の工夫

【子供への対応】

- ・声かけを工夫する。
(〇〇しましょう。〇〇しなさい。→こうしてみてもうかな。)
教師主導ではなく、子供に発言させ、価値付けを行う。
- ・子供に寄り添い、子供ができるようになるまで待つ教師の姿勢
- ・子供に対するゆとりある対応が必要である。
- ・幼稚園の年長は園では頼られる存在であるが、小学校では必要以上に何でもしてあげてしまう傾向がある。何でもしてあげるのではなく、困っていることに手を差し伸べる姿勢が必要である。

【幼保・小連携】

- ・幼稚園を知るために、小学校教員が園訪問し、顔を合わせて話をする。
- ・夏季休業中に小学校教員が幼稚園を訪問し、保育参観をし、レポートを管理職に提出する。

【カリキュラムづくり】

- ・幼稚園から小学校までを見通した「リンクリンクカリキュラム」や「スタートカリキュラム+アプローチカリキュラム」等を継続的に実施する。

【情報交換】

- ・小学校教員の意図をもった園訪問が必要である。
- ・園訪問を継続し、小学校と幼稚園の教員が話しやすい雰囲気をつくる。

【保護者との関わり】

- ・送迎時や連絡帳による保護者との情報交換が重要である。
- ・連絡帳への記入方法を工夫する。
- ・安心して小学校へ入学するための仮入学や就学时健康診断の在り方

【授業改善】

- ・「きちんと座って教師の指示を聞く」授業から、「子供が前のめりになって取り組む」授業への転換
- ・集中力を持続させ、子供に興味関心を持たせる話し方の工夫を行う。

【学びのつながり】

- ・幼稚園では、学んだことを園の生活の様々な場面でどう生かしていくかをよく考えられており、学びが次につながる工夫がなされている。
- ・幼稚園教諭は、先生同士で情報交換をよくしており、園全体で子供を育てているという意識が高い。
- ・小学校入学前に幼稚園ではどのようなことを学んでおけばよいかについての共通理解をすることが必要である。
- ・小学校と幼稚園が、それぞれの子供たちの育ててほしい姿や指導方針について考え方を共有することが大事である。

2, 管理職として, 長期研修経験者を学校(地域)で, どのように生かすか(生かしたいか)。

- ・校務分掌で, 幼保連携担当に位置付ける。
- ・幼保にできた人脈を活用し, 幼保・小をつなぐパイプ役とする。
- ・スタートカリキュラムや全体計画を中心となって作成する。

3, 管理職として, 幼小連携を推進する上での課題は何か。また, 課題の改善案としてどのようなことが考えられるか。

課題

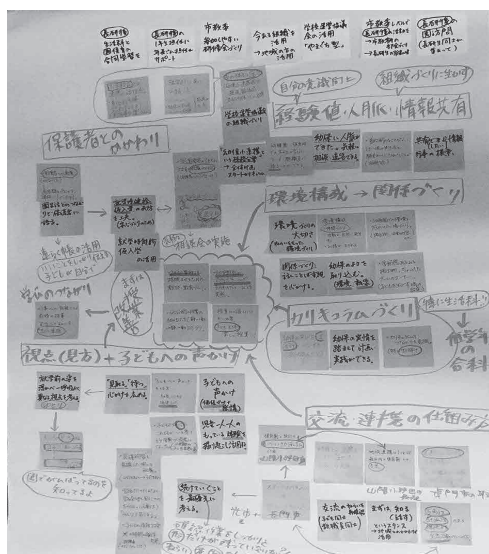
- ・長研生には, 大変よい経験となっているが, 学んだことが学校に生かされていない。
- ・幼小連携に関する研修があまり進まない。

改善案

- ・長研を経験した教員が, これからも情報交換を行い, 小学校でどのように学んだことを生かしているかについて情報を共有していく。
- ・学校運営協議会を効果的に利用する。
- ・管理職の理解の下に, 幼小連携の研修会を実施する。
- ・コミュニティ・スクールの機能を生かし, 幼小連携を推進する。

【Aグループ】の協議資料より ＜キーワード＞

- ◇保護者との関わり
- ◇視点(見方) + 子供への声かけ
- ◇経験値, 人脈, 情報共有
- ◇環境構成 → 関係づくり
- ◇カリキュラムづくり
- ◇交流, 連携の仕組み方



【B, Cグループ】教諭

1, 長期研修の成果をどのように生かしているか。

(低学年・中学年・高学年 それぞれへの生かし方)

- ・職員研修を通して学校全体に広める。短時間でもよいので繰り返し行うことが大切である。→研修主任との連携, 年間計画への位置付け
- ・園児対象の授業参観を仕組みるとよい。
- ・幼稚園や保育所に入学後の子供の姿を伝える。
- ・園の先生方にいつでも学校へ来てもらえるように, 小学校側から園へ声をかけることが大切である。
- ・長期研修を通して, 子供を待てるようになった。小学校でも子供の思いをしっかりと聞くようになった。

- ・小学校に知っている先生がいることは、子供、保護者にとって安心感につながる。
- ・教室の環境構成を工夫した→自由に遊べる場づくり
- ・子供の経験を生かし、園での遊びと小学校での学びをつなげる。
- ・振り返りを大切にする。成長の見取り→子供の自己肯定感を高める。
- ・子供に任せることで、個への支援を充実させる。
 - 低学年の丁寧な指導は、高学年においても大切である。
 - 異年齢交流等でリーダー性を育む。
- ・教員同士が顔見知りになること、情報交換をすることで連携が進んだ。
 - 学校行事等の園へのお知らせ、既存のものを活用する。
 - パイプ役としての長期研修生の役割は重要
- ・高学年の子供と園児との交流も効果的である。

2. 幼小連携を推進する上での課題は何か。

課題

- ・小学校教員に幼小連携の必要性が意識されていない。
- ・時間の確保が困難である。
- ・幼小連携に関わったことのない教員を巻き込むこと。
- ・私立幼稚園との連携を図る必要がある。
- ・スタートカリキュラムが周知されていない。
- ・園による経験の差への対応
- ・保護者との連携（園での手厚さ、入学後のギャップ）

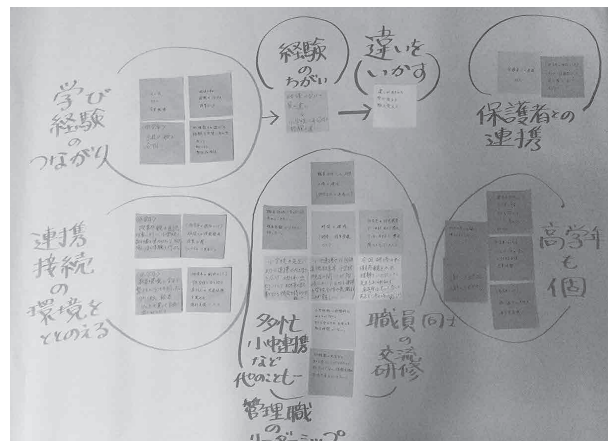
改善案

- ・管理職による声かけ→「まずはやってみよう」
- ・夏季休業中などに、一日でもよいので、小学校教員が園を訪問する。
 - 見ることでの刺激→学校全体での体制づくり
- ・園による経験の差に対応するには、目指す子供の姿などについての小学校側からの発信が必要である。
- ・園の取組を知る→園も学校も学び合える問いかけをする（違いを生かす）
- ・幼小連携の必要性
 - 幼児教育の視点を持つことが、担任の切実な課題（生徒指導上の問題、学力向上等）の解決につながることを伝える。

【Bグループ】の協議資料より

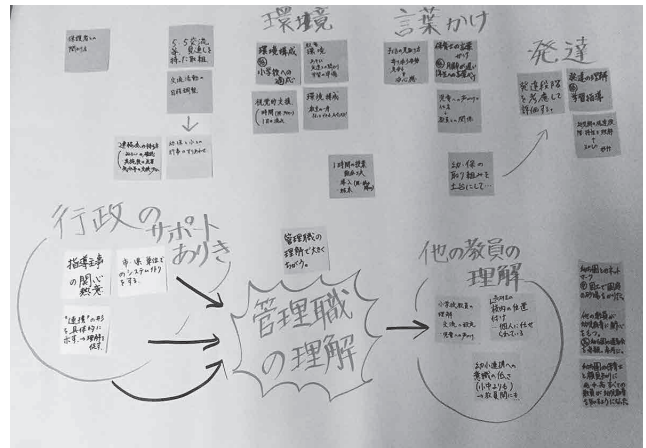
<キーワード>

- ◇学び・経験のつながり
- ◇連携・接続の環境を整える
- ◇経験の違いを生かす
- ◇高学年も「個」
- ◇管理職のリーダーシップ
- ◇職員同士の交流・研修
- ◇保護者との連携



【Cグループ】の協議資料より
＜キーワード＞

- ◇環境構成
- ◇言葉かけ
- ◇発達の段階の理解
- ◇管理職の理解
- ◇他の教員の理解
- ◇行政のサポート



○グループ協議内容の共有

グループでの協議内容について共有した。

教諭，管理職，行政それぞれの立場で，長期研修の経験をどのように生かすかを改めて考える機会となった。

協議の様子から，長期研修から数年経過した後に，学んだことを想起し，各自が実践している取組等を情報交換することは，長期研修の成果を継続，発展させるために必要な機会であると本協議会の意義を再認識した。今後，定期的な開催を検討したい。



3 考察

「幼児教育長期研修」が、派遣教員自身の資質・能力の形成や向上及び、派遣幼稚園の教諭や在籍小学校の教諭の指導力等の変容において、どのような役割を果たしているかについて、「幼児教育長期研修派遣教員」、「派遣先園長及び在籍校校長」を対象とした調査研究及び研究協議会の結果から考察する。

(結果の詳細は、P. 56～P. 78 を参照)

＜幼児教育長期研修派遣教員のアンケート結果より＞

① 教員自身の幼小連携や幼小接続に対する意識や理解、指導力等の変容について

○「幼児教育長期研修」の成果と変容につながった経験

「幼児教育長期研修」の成果のうち、「幼児期から児童期への発達の流れについての理解」が 53.2%、「小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解」が 25.8%という結果であった。また、成果につながったと考えられる経験については、「一年間を通して幼児と接する」が 85.5%、「一年間を通して幼稚園教諭と関わる」が 82.3%であった。

具体的には、園の「遊びを通した総合的な指導」や「環境構成の工夫」、幼稚園教諭の子供を見る「長期的な視点」の意義等を理解するとともに、「特別支援教育」の視点や「保護者との関わり方」等についても成果を感じていることが分かった。

多くの派遣教員が、一年間の研修期間、日々幼児や幼稚園教諭と接すること、幼稚園の行事の体験、幼稚園の園内研修への参加等を通して、幼児期から児童期への子供の発達の流れや小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解を深め、円滑な接続を実現するために必要な資質・能力を身に付けている。

○「幼児教育長期研修」後の学級経営及び授業づくりの変容

「幼児教育長期研修」後、小学校での学級経営に当たって意識するようになったことは、「幼児の発達や学びの連続性」が 27.4%、「児童との関わり方」が 25.8%、「児童の発達の段階」が 16.1%という結果であった。また、小学校での授業づくりの際に意識するようになったことは、「幼児の発達や学びの連続性」が 50.0%、「児童の活動時間の設定」が 22.6%という結果であった。学級経営、授業づくりのどちらについても、「幼児の発達や学びの連続性」を意識するようになった割合が高い。

これは、一年間の研修を通して、幼児期から児童期に掛けての「子供の実態」を把握したことや「園での育ちや学び」についての理解を深めたことが、「子供理解の視点の変容」、「環境構成の重要性への理解」、「活動時間、学習内容の工夫」、「一人一人の実態に応じた支援」、「子供の主体性と教師の意図のバランス」、「子供の安心感」、「関わり合いの充実」、「保護者との関係づくり」等につながり、それらを生かした学級経営や授業づくりをするようになったと考えられる。

特に学級経営においては、25.8%の派遣教員が「児童との関わり方」を意識するようになっており、子供に対して「受容的・共感的姿勢」、「待つ・見守る姿勢」、「任せる・生かす姿勢」で接するようになり、「声かけ・言葉かけ」にも変化をもたらしている。

さらに、授業づくりについては、22.6%の派遣教員が「児童の活動時間の設定」を意識するようになっており、研修後は、「モジュール学習」、「合科的な学習」を多く取り入れている。

○「児童への声かけ・言葉かけ」の変化

児童への声かけ・言葉かけの変化については、「教え込んだり、提案したりしすぎないような声かけ（指示）をするようになった」が27.4%、「児童が活動に見通しがもてるような声かけ（指示）をするようになった」が24.2%、「すぐに声をかけずに、様子を見守るようになった」が24.2%、「活動が停滞している児童に対して、一人一人の児童に合わせた声かけをするようになった」が21.0%となっている。

つまり、「子供の自分でできたという気持ち」や「やる気」、「主体性」、「子供同士の関わり合い」、「子供の思考の流れ」を大切にし、「子供の主体性と教師の意図とのバランス」を考えながら、「視覚化」や「短い指示」等、指示の出し方を工夫するようになっている。

○小学校教諭全般としての変容

「幼児教育長期研修」の経験が、小学校教諭としてどのような改善に役立ったかについては、「児童理解」が74.2%、「指導の工夫」が58.1%、「授業研究・授業改善」が30.6%となっている。その他にも、「特別支援教育」が25.8%、「学級（学年）経営」と「家庭、地域、関係機関等との連携」が24.2%、「教職員同士の連携」が21.0%となっている。

最も改善に役立ったという「児童理解」については、発達の段階を意識し、子供の実態を家庭環境等の背景を含めて理解するようになり、様々な行動に対しても慌てず見守るなど、子供の言動の背景や個々の特性に目を向け、個別の対応を重視するようになっている。また、幼児期から児童期の発達を連続して捉え、入学後に困っている様子がみられる子供については、適切な対応の仕方を幼稚園の教員から学ぶなど、発達の段階や子供の実態に応じた指導を意識するようになっている。

また、「指導の工夫」については、授業の導入に幼稚園で読んだことのある絵本や遊びを積極的に取り入れ、子供たちの興味・関心を高めたり、学びをつなげたりすることを心掛けるようになっている。特に入学当初は、45分の授業時間にとらわれず、児童が集中して取り組める時間配分に配慮するなど、柔軟に子供の実態に応じながら、学びに向かう土台づくりを行っている。

さらに、幼稚園教諭が穏やかに子供に語り掛け、子供の声やつぶやきを丁寧に取り

り上げ、周りに広げていく姿から、安心して発言できる雰囲気づくりの教師の在り方について学び、実際の授業での語り方にも変化をもたらしている。

② 幼稚園や小学校への影響について

○園や小学校において進んだ取組

「幼児教育長期研修」によって、園や小学校において進んだ取組については、「子ども同士の交流」が 38.7%、「教職員の交流」が 30.6%、「接続のカリキュラムの見直し」が 22.6%となっている。

「教職員同士の計画的な研修会の実施」や「幼小連携に向けた教職員の組織の見直し」については、地域や学校において差があり、これらについて一層推進していくことが今後の課題ともいえる。

○スタートカリキュラムの編成・実施への影響

派遣教員の研修成果を生かし、それぞれの学校において、子供の実態や地域の実情に合わせて、既存のスタートカリキュラムの見直し、改善が図られている。

派遣教員が変化を感じているところは、子供の実態に応じた内容や時間配分を考慮すること、幼稚園での体験を生かすようにしたことなどである。また、幼稚園や保育所で指導されていることを改めて取り入れるのではなく、小学校で必要なことを付け加えていくように見直しを行っている。

これらのことにより、在籍校長は、スタートカリキュラムがより実効性の高いものになり、子供の実態に応じた流れで生活が始められることで子供の安心感につながっていると感じている。さらには、子供の成長を後退させるのではなく生かす指導を全教職員が意識するようになったと成果を感じている。

派遣園では、派遣教員との1年間のコミュニケーションの積み重ねにより、幼児期の教育と小学校教育の違いや学校生活に必要な力等の理解につながり、それらを考慮した新たな接続期のカリキュラム作成が進められている。また、より就学を意識した活動が計画的に実施されるようになり、保護者の安心にもつながっている。

○幼小連携を一層推進するために必要なこと

幼小連携を一層推進するために必要なこととしては、派遣教員、在籍校長、派遣園長に共通して、教職員同士の人間関係づくりを挙げている。子供の交流を実施する前に、まずは教職員同士が情報交換を密に行える関係になることが大切であり、そのつながりが子供たちの育ちや学びを具体的に生かすことにつながると考えている。

そのために欠かせないこととして、いずれも「管理職の連携」を指摘している。特に派遣教員からは、校務分掌に小中連携の担当が位置付けられているにも関わらず、幼小連携はあまり位置付けられていないこともあり、研修や交流の実施が難し

いという意見もある。子供の姿で語り合うことの重要性等もあがっているが、それらを組織的・継続的に実施するためにも、まずは管理職の意識を高め、管理職同士の円滑な連携が必要である。

＜派遣先園長・在籍校校長のアンケートより＞

① 教員自身の幼小連携や幼小接続に対する意識や理解、指導力等の変容について

○「幼児教育長期研修派遣教員」の成長（改善）

在籍校長への調査では、「幼児教育長期研修」の経験による派遣教員の成長（改善）については、「児童理解」が66.7%、「指導の工夫」が50.0%という回答であり、これは、派遣教員自身が捉えている「小学校教諭等としての改善点」の上位2項目（「児童理解」：74.2%、「指導の工夫」：58.1%）と同じ傾向である。

「児童理解」については、派遣教員が子供を知っていることや子供の実態に応じた声掛けをしていることが子供の安心感につながっていると捉えている。また、「指導の工夫」については、「幼児教育長期研修」を通して、派遣教員の視点が広がり、ゆとりをもって子供の指導にあたっていることや、子供の幼稚園での経験や発達の段階に合わせた指導を行っているかと捉えている。

その他、在籍校長は、「幼児教育長期研修」が派遣教員の「授業研究・授業改善」、「組織的・学校運営への参画」、「学級（学年）経営」、「人材育成」等、様々な面での成長に役立っていると捉えており、「幼児教育長期研修」が、小学校教員の資質・能力の向上において、大きな成果を挙げていることが分かった。

なお、「特別支援教育」の視点については、25.8%の派遣教員が小学校教諭としての改善に役立ったと回答しているが、在籍校長の回答は0%となっている。また、「人材育成」の視点については、派遣教員の回答は0%であるが、在籍校長の回答は16.7%となっている。

「幼児教育長期研修」の成果について、派遣教員は、小学校教員としての自分自身の資質・能力の向上に成果を感じているが、在籍校長は、派遣教員自身の資質・能力のみならず、学校全体の幼小連携の推進や教職員の意識の醸成に良い影響をもたらしていると考えている。

② 幼稚園や小学校への影響について

＜派遣幼稚園への影響＞

○幼稚園教諭への影響

「幼児教育長期研修派遣教員」を受け入れたことは、幼稚園教諭にとっても幼児期から児童期への発達の流れや小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違い、小学校学習指導要領についての理解につながっている。また、小学校の教員との信頼関係の構築は、継続的な交流等に生かされるだけでなく、派遣教員と子供の具体的な姿

で情報共有することができ、小学校での様子を知ることによって、保育の見直しにも役に立っている。

さらに、幼稚園におけるカリキュラム・マネジメントにおいて、接続を意識したカリキュラムの編成や教育活動の見直し・改善等に効果的な影響を与えていることが分かった。

○幼小連携・接続の推進

幼小連携・接続に関して進んだ取組については、「教職員の交流」が43.8%、「接続カリキュラムの見直し」が37.5%という回答であった。

特に、教職員の交流が深まることで、互いの心理的な敷居が低くなり、気軽に行き来することができるようになったと成果を感じている。施設は隣接していても、幼稚園と小学校の間に壁を感じていたが、派遣教員がパイプ役となって日常的につないだことで、より子供の理解が深まったという意見もある。これは、計画的・継続的な子供の交流に生かされている。

<在籍小学校への影響>

○組織的・学校運営への参画，学級（学年）経営，人材育成

研修終了後に在籍校校長が派遣教員に配慮したことは、「低学年の学級担任に配属した」が72.2%、「校務分掌において幼小連携・接続の担当者にした」が50.0%、「幼稚園と小学校の合同研究会・研修会の企画・実施を任せた」が27.8%、「幼小連携に関する校内研修を設定した，研修成果を校内に伝達する機会を設けた」が27.8%、「小学校の教師のための保育参観や幼稚園の教師のための授業参観の企画・実施を任せた」が16.7%となっている。

これらの配慮の結果、全教職員の幼小連携・接続に関する理解の促進や若手教員の人材育成につながっている。また、児童理解の上に立った学級（学年）経営が行われ、子供を通して保護者の安心感にもつながっていると捉えている。

○幼小連携・接続の推進

幼小連携・接続に関して進んだ取組については、「子供同士の交流」が27.8%、「教職員の交流」が27.8%、「教職員同士の計画的な研修会の実施」が22.2%、「接続カリキュラムの見直し」が22.2%という回答であった。

教職員の交流については、長期休業中等を利用して、派遣教員が中心となって保育体験や幼稚園参観などを企画して進めるようになり、幼児期の子供の様子や発達のつながりに目を向ける教員が増えているという報告もある。互いに知り合うことの重要性を派遣園ともに感じているところである。

＜研究協議会より＞

研究協議会を開催したことによって、「幼児教育長期研修」の成果と課題について、管理職，教諭，行政のそれぞれの立場から，エピソードとともに実際の声を聞くことができた。

派遣教員自身に関することとしては、「環境構成の工夫」，「子供への対応」，「授業改善」，「保護者との関わり」等が共通の成果として語られていた。

また，幼稚園や小学校への影響としては，子供同士の交流活動や教職員同士の情報交換などが積極的に行われ，「幼保・小連携」の推進につながったことが分かった。さらには，「学びのつながり」を意識した「接続のカリキュラム」を編成して実施することで，子供が安心して学校生活をスタートすることができ，保護者の安心感にもつながっていることが分かった。

しかしながら，「幼児教育長期研修」の成果を自分自身だけの成果にとどめず，周囲の教職員を巻き込み，どのように生かしていくかということについては，多くの派遣教員がジレンマを感じている。その原因として，幼小連携の必要性について小学校教員の意識が低いこと，学校の連携体制が整っていないこと，研修の時間を確保することが難しいこと等が挙げられた。

これらを改善していくために，管理職の理解及びリーダーシップの下に，幼小連携の研修会の開催，小学校教員の保育体験の促進，コミュニティ・スクールの活用等が必要であると共通理解した。

今回が初めての開催であったが，それぞれの立場の研修成果の普及の仕方や各自の実践等を共有することができ，今後の取組の充実につながる良い機会となっていた。また，各地域の派遣教員のネットワークづくりの場にもなり，交流の拡大にもつながっている様子であった。

「幼児教育長期研修」の担当者としては，本研究協議会の意義とともに長期研修後のフォローが十分でなかったことを認識する機会となった。今後，市町教育委員会と連携して，派遣教員の活用による研修の推進等，計画的な支援を継続する必要があるであろう。

第3章 研究の成果と課題

1. 研究の成果
2. 課題と展望

1 研究の成果

山口県が平成16年から実施してきた「幼児教育長期研修」は今年度で15年目を迎え、64人の小学校教諭が研修を行ってきた。そのうち、4人が管理職(校長1人, 教頭3人)である。現在は, 県内19市町のうち15市町に経験者が在籍し, 各学校において研修主任や幼小連携担当等の役割を担い, 幼小連携の取組等を推進している。

この度, 本調査研究により, 研修開始以来初めて「幼児教育長期研修派遣教員」の資質・能力の変容についてアンケート調査を中心に客観的に検証し, 「幼児教育研修」の意義を明らかにすることができた。以下にその結果を述べる。

幼児教育長期研修の意義

①「一年間」の研修

派遣教員のアンケート調査から, 最も成果につながった経験は, 「一年間を通して幼児と接する」, 「一年間を通して幼稚園教諭と関わる」であることが分かった。単発の教職員同士の交流では深く理解できない子供の発達の様子やそれを支える幼稚園教諭の姿を学ぶためには, 一定期間の時間が必要である。また, 幼児や保護者, 教職員と信頼関係を構築する上でも, 日々関わりながらコミュニケーションを積み重ねることが重要である。

調査結果から, 一年間という研修期間を維持していることは意義あることと改めて認識した。



派遣教員「幼稚園での指導の様子」

②人材育成～子供の育ちや学びを確実につなぐ人財の育成～

「幼児教育長期派遣教員」は, 一年間を通して幼児や幼稚園教諭等と関わるとともに, 幼稚園の行事や園内外の研修に参加することで, 幼児期から児童期への発達の流れや小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違い等について理解を深めている。その過程で, 幼稚園教諭との信頼関係を構築し, 幼稚園等と小学校の日常的な連携を生み出している。正に貴重な「人財」として両者をつなぎ, 子供の育ちや学びの連続性を生かした教育の実現に貢献している。「幼児教育長期研修」の第一の目的である「幼保・小一貫指導の推進に資する人材の育成」において, 大きな成果を挙げている。

具体的には, 幼児と児童, 教職員同士の交流が進んでいる。その結果, 幼稚園の教員からは, 「幼児教育長期派遣教員のおかげで, 幼稚園と小学校の垣根が低くなった」, 「自分たちが行っていることが, どのように小学校につながっているのかを理解することができた」, 「保護者からの小学校に関する質問にも自信をもって答えることができるようになった」などの声を各地で

聞いている。

幼稚園と小学校の教職員同士が顔見知りになり、目の前の子供の育ちに対する思いや願いを共有しながら、互惠性のある連携を続けていくことが、何より子供の成長につながると考えられる。

③教員としての資質の向上

「幼児教育長期派遣教員」は、環境を通して行う幼稚園教育の特質を理解したことで、研修後はその成果を、小学校教員としての学級経営や授業づくりに生かしている。児童一人一人の特性に応じた指導、児童の主体性と教師の意図のバランスへの配慮、遊びの要素を取り入れた授業づくりなど、幼児期の教育を通じて身に付けたことを生かしながら1年生の指導に当たっている。長期研修の経験が、「山口県教員育成指標【教諭】」に示している「求められる資質能力」の向上において、多岐に渡って成果を挙げていることが分かる。

これは、児童の学校生活に対する「安心」につながり、児童一人一人が自己を発揮しながら学習に向かう土台になると考えられる。

④組織全体の資質の向上

「幼児教育長期派遣教員」は、研修後に在籍校に戻り、研修主任や幼保小連携担当者として、全校体制での研修や連携を推進している。そのことにより、派遣教員自身の資質向上にとどまらず、他の教職員の幼小連携・幼小接続に対する意識を高めている。

特に、スタートカリキュラムについては、幼稚園での育ちや学びを生かして見直しを行い、学校全体での取組を推進している。

⑤地域の幼保・小連携の推進

「幼児教育長期派遣教員」は、小学校や幼稚園のみならず、地域の幼保・小合同研修会や県主催の研究大会等において、事例発表者や講師を務め、研修の成果を普及している。併せて、接続期のカリキュラムを作成し、各学校での取組の参考資料として提供するなど、地域全体の幼保・小連携の推進に貢献している。



幼稚園教諭の研修会での指導助言の様子

⑥保護者の就学に対する不安解消

「幼児教育長期派遣教員」は、幼稚園等で就学前の保護者を対象に、小学校の様子を伝えたり、連携通信等を発行したりすることによって、保護者の就学に対する不安解消に貢献している。小学校就学前に小学校教諭から直接話を聞くことができるのは貴重な機会であり、入学後に「知っている先生」がいることは児童だけでなく保護者にとっても大きな安心につながっている。

幼小連携・接続の更なる推進のために

アンケート調査や研究協議会の情報交換の中で、小学校では小中連携に比べて幼小連携は軽んじられている雰囲気があり、組織的な取組が進んでいないという意見があった。この原因として、小学校教諭に「幼児期の育ちや学びが小学校以降の生活や学習の基盤となっていること」や「イメージしている以上に入学時の児童に『できること』が多いこと」などの理解が浸透しておらず、小学校がゼロからのスタートであると捉え、幼小連携・接続の必要性が実感されていないことが考えられる。

この状況を改善し、幼小連携・接続を推進するために、本調査研究の調査結果を基に、以下の2点を提案する。

① 理職の理解促進

幼小連携・接続の推進に必要なこととして、派遣教員、派遣園長、在籍校長いずれからも挙がっていた「管理職の理解」、「管理職の連携」がまずは重要である。実際に幼小連携・接続に対する管理職の理解の度合いによって、教職員の意識やその地域の取組には差がみられる。

新学習指導要領小学校総則第1章第2の4の(1)には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」と明記されている。学習指導要領の改訂を好機と捉え、その周知とともに、子供の育ちや学びを生かすための幼小連携・接続の必要性を伝える必要がある。

本県としても、市町教育委員会と連携し、管理職対象の研修会等の開催や学校訪問等の際の幼小連携・接続に関する取組の情報交換等を計画的・継続的に行っていきたいと考えている。

② 幼小連携・接続推進のための体制づくり

「幼児教育長期研修の意義」で述べたとおり、幼小連携・接続を進めるためには、幼稚園と小学校をつなぐ人材が必要である。校長と園長の連携は必須であり、その上で小学校と幼稚園の教職員をつなぐ適材適所の人材配置が求められる。

そのためには、まずは①の「管理職の理解」「管理職の連携」に基づいて、全教職員が幼小連携・接続の必要性を共有し、小学校や幼稚園の校務分掌に幼小連携・接続担当を位置付け、研修主任等と連携しながら、計画的に研修や交流等を企画・実施することができる体制づくりが必要である。体制が整っていることが、持続可能な幼小連携・接続の取組につながると考えられる。

今後、本県においても、派遣教員が在籍していない地域や学校に対して、上記の「管理職の理解、連携」、「幼小連携・接続推進のための体制づくり」が進められるように積極的に情報提供や支援を行っていきたいと考えている。

2 課題と展望

今後の本県の課題及び展望は以下のとおりである。

○ 「幼児教育長期研修」の更なる成果還元

「幼児教育長期研修派遣教員」の取組により，県内各地域で幼小連携・幼小接続の推進が図られてきた。しかしながら，幼児教育長期研修経験者の中には，幼小連携・幼小接続の必要性について小学校教員に啓発していくことや，学校での幼小連携の体制を確立していくことに困難さを感じ，自分自身の研修の成果を十分に生かすことができていないのではないかと感じている者も少なくない。その原因として，前述したとおり，校長・園長等管理職の意識が影響するということがアンケート調査の自由記述にみられるだけでなく，協議会等でも話題になった。

今後は，市町教育委員会と連携し，幼児教育長期研修の成果と併せて，幼小連携・接続の必要性について伝えるため，まずは管理職対象の研修会等を積極的に活用する必要がある。

○ 「幼児教育長期研修」の全県への普及

成果がある一方で，年齢構成の偏りなどにより小学校教員を幼稚園等に派遣することが難しい市町や，その後の人事異動等により，研修経験者が一人も在籍しない市町もある。研修経験者がいる学校や市町だけでなく，県内全ての市町について幼小連携・幼小接続の推進が一層図られるよう，本調査研究で得られた成果を基に，幼児教育長期研修派遣教員の活用の在り方を再考するとともに，幼児教育長期研修経験者の実践から学ぶ場を設けるなど，派遣教員の活躍の場を拡大していきたいと考えている。

○ 「やまぐち型地域連携教育」の活用

山口県では，2015年(平成27年度)から，コミュニティ・スクールが核となり，山口県独自の地域協育ネットの仕組みを生かして，社会総掛かりで子供たちの学びや育ちを支援する「やまぐち型地域連携教育」を推進している。これにより，小・中学校においては，地域の方による学校運営や学校支援の充実につながる特色ある取組や，学校による地域の方を対象とした地域貢献の取組が広がるとともに，地域のネットワークを生かした活動が県内各地で行われているところである。

この仕組みを強みとして活用し，地域の様々な小学校就学前施設と小学校が組織を越えて，「地域で子供を育てる」という思いでつながり，目指す子供の姿を語り合い，育ちや学びをつなげる山口県ならではの取組を推進する必要があると考えている。

おわりに

山口県教育委員会では、幼児期の教育と小学校教育の接続のために、小学校区を単位とした幼保・小接続体制づくりを推進しており、その取組の一つとして、小学校の教員を一年間幼稚園又は幼保連携型認定こども園へと派遣する幼児教育長期研修を実施しているところである。

幼児教育長期研修派遣教員は、幼稚園現場で幼児とふれあい、幼稚園教諭とともに保育を行うことで、多くのことを学ぶことができ、幼保・小連携の推進において重要な役割を果たしている。

しかしながら、これまで幼児教育長期研修が一定の成果を挙げていると認識しながらも、小学校から幼稚園に派遣した教員の資質・能力の向上については、客観的な調査を行ってきいてはいなかったため、成果を実感するまでには至っていなかった。そこで今回、本事業を活用し、幼児期の教育内容等の深化・充実を図ることを目的に、「幼児教育長期研修派遣教員」の資質・能力に関する調査研究を行うこととした。

本調査研究を行ったことで、幼児期の教育に携わった小学校教員の資質・能力が確実に高まったことが見えてきた。この成果は大きく、今後、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を更に進める本県の取組に生かして参りたい。

また、本調査研究の歩みとともに、山口県独自の強みを生かし、今後も市町教育委員会と連携を図りながら、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を目指し、体制を整えていくことで、山口県はもちろん全国各地の幼児期の教育の深化・充実に貢献していきたいと考えている。

最後になるが、本調査研究に当たり、快く訪問を受けてくださった広島県教育委員会、香川県教育委員会、京都市教育委員会、熊本市教育委員会の皆様方に心から感謝申し上げます。

参考資料

- ◆ 幼児教育長期研修について
- ◆ 先進地域視察による調査
- ◆ アンケート調査用紙
- ◆ アンケート結果の詳細
- ◆ 幼児教育長期研修派遣教員及び派遣先園長，在籍校校長による自由記述（抜粋）
- ◆ 実践事例
 - 平成 30 年度幼児教育長期研修派遣教員による幼稚園での実践
 - 平成 29 年度幼児教育長期研修派遣教員による小学校での実践

幼児教育長期研修について

1 趣旨

小学校教員を幼稚園又は幼保連携型認定こども園に派遣し、幼児期の指導及び幼児期の育ちを踏まえた小学校低学年での指導の在り方について研修し、本県における幼保・小一貫指導の推進に資する人材を育成する。

2 概要

○ 県内の小学校教員を幼稚園等に1年間派遣し研修を実施

【内容】

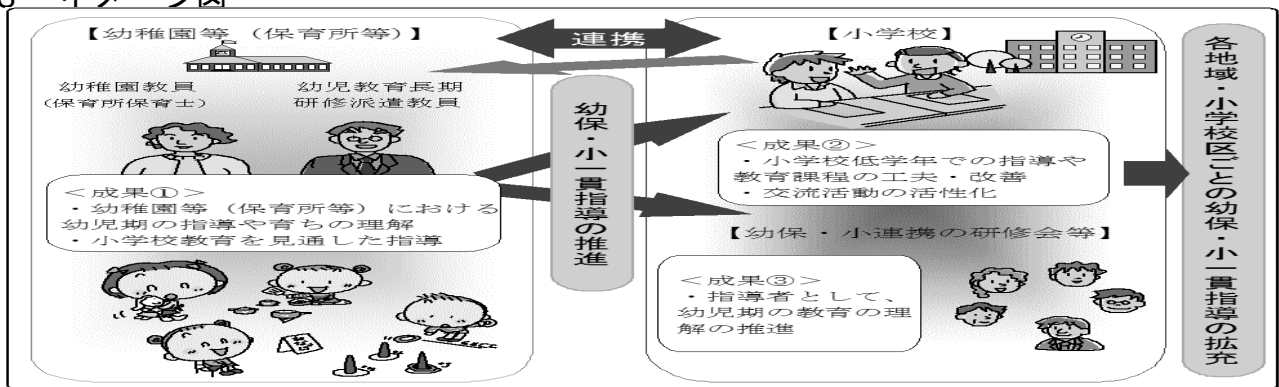
- ・幼稚園等で補助教員として勤務
- ・幼保・小一貫指導に係る各自のテーマによる研修
- ・一定期間の保育所等での研修（例：7月21日から8月31日までの任意の期間）
- ・現任校と幼稚園等の連携を推進
- ・小学校区を単位とした幼保・小連携体制づくりを推進 等

○ 幼保・小一貫指導について各地域での先導的役割を果たす教員を育成

【成果の普及例】

- ・各種研修会等への参加や地域の園研修、校内研修での事例発表、指導助言
- ・各地域の幼保・小連絡協議会での体験発表
- ・接続期を見通した教育課程の地域内小学校、幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育所等への普及 等

3 イメージ図



【研修内容】

- ※ **派遣機関での研修（年間 145日程度）**
 - ・補助教員として勤務し、幼保・小一貫指導に係る各自のテーマによる研修
- ※ **派遣機関外での研修（年間 40日程度）**
 - ・現任校における交流活動や合同研修会の計画・実施等
 - ・管理職研修会や市教委主催の幼保・小合同研修会での事例発表や助言等
 - ・他の幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育所、小学校等での参観や園・校内研修での事例発表等
- ※ **県指定の研修（年間 20日程度）**
 - ・指定保育所等での研修
 - ・県教委主催の幼稚園教育課程研究協議会や中間期研修会での研修

4 成果の普及

- 各種研修会における事例発表等により、子どもの育ちや学びの連続性を踏まえた指導の必要性を啓発する。
- 小学校区を単位とした幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育所等との交流や合同研修会等を実施し、研修の成果の還元を進める。
- 幼保・小合同研修会での公開授業や小学校教員の保育体験研修等の企画運営に当たり、研修成果の還元を進める。

5 派遣状況

■ 平成16～30年度 計64名派遣



先進地域視察による調査

幼稚園と小学校の人事交流を推進している先進地域を視察し、幼稚園と小学校における人事交流に関する施策や人事交流経験者の現在の状況等について調査した。

(1) 訪問先等

訪問日	訪問先	訪問先／参加研修	訪問・参加者
H30. 10. 16	広島県	東広島市立御菌宇幼稚園 広島大学附属幼稚園	県主査・県指導主事 幼児教育長期研修派遣教員
H30. 10. 16～17	熊本市	熊本市教育委員会事務局学校教育部 熊本市立向山幼稚園 熊本市立碩台幼稚園 熊本市立楠幼稚園	県主査・県指導主事 幼児教育長期研修派遣教員
H30. 10. 18～19	京都市	京都市立中京もえぎ幼稚園 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館	県主査・県指導主事 幼児教育長期研修派遣教員
H30. 12. 27	香川県	丸亀市綾歌総合文化会館 (アイレックス) 平成30年度香川県の教育づくり発表会	県指導主事 下関市指導主事 下関市教育・保育専門監

(2) 先進地視察での出会いを生かして

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館でお話を伺った京都市立上賀茂幼稚園の教頭先生を講師として招聘し、本県の「市町幼保・小連携担当指導主事連絡協議会」において、人事交流の経験を生かした幼保・小接続に関する実践について御講義いただいた。



平成30年度市町幼保・小連携担当
指導主事等連絡協議会
日時 平成31年2月18日(月)
会場 山口県庁 教育委員会室

【講義の様子】

アンケート調査用紙

幼児教育長期派遣研修に係る調査（事前調査）

学校名	小学校	お名前	
-----	-----	-----	--

(1) あなたは、幼児教育長期派遣研修でどのようなことを経験しましたか。

①驚いた経験は何ですか。

<それはなぜですか>

②小学校との違いを感じた経験は何ですか。

<それはなぜですか>

③今、役に立っている経験は何ですか。

<それはなぜですか>



(2) 幼児教育長期派遣研修での経験を通して、あなた自身にどのような変容がありましたか。



(3) 幼児教育長期派遣研修は、研修後のあなた自身や周りの先生方（在籍校・派遣園）にどのような影響を与えましたか。



御協力ありがとうございました。今後ともどうぞよろしく申し上げます。

「幼児教育長期研修」に関するアンケート

現在

所属	市立	学校（担当 年）	職	教員経験年数	お名前
----	----	----------	---	--------	-----

長期研修時（平成_____年度）

所属	市立	学校	職	(当時の) 教員経験年数	派遣先
----	----	----	---	-----------------	-----

幼児教育長期研修についてのアンケートです。現在のあなた自身についてお答えください。

回答については、回答用紙に入力ください。

(1) 長期研修を終えて、あなたはどのようなことに成果を感じていますか。

次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 幼児の発達の特徴についての理解
- (イ) 幼児期から児童期への発達の流れについての理解
- (ウ) 小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解
- (エ) 幼稚園教育要領についての理解
- (オ) 幼稚園の教員との人間関係の構築
- (カ) その他 ()

(2) 長期研修において、(1) で回答した成果につながったと考えられる経験は何ですか。

最大3つまで選んでください。

- (ア) 一年間を通して幼児と接する
- (イ) 一年間を通して幼稚園教諭と関わる
- (ウ) 幼稚園の行事の体験
- (エ) 幼稚園の園内研修への参加
- (オ) 園外研修への参加
- (カ) 保護者との会話
- (キ) 園だよりの作成
- (ク) 保育所での実習
- (ケ) 幼小連携の研修会の講師
- (コ) 保護者対象の研修会の講師
- (サ) 交流会等の企画・実施
- (シ) その他 ()

(1) と (2) について、その理由やエピソード等を書いてください。

(3) 長期研修を終えて、あなたは学級経営にあたってどのようなことを意識するようになりましたか。

次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 児童の発達の段階
- (イ) 児童の活動時間の設定
- (ウ) 教室環境
- (エ) 学級のきまり
- (オ) 幼児の発達や学びの連続性
- (カ) 児童との関わり方
- (キ) 児童同士の間関係づくり
- (ク) 保護者との関わり方
- (ケ) 幼稚園教育要領
- (コ) その他 ()

(4) 長期研修を終えて、あなたは「授業づくり」にあたってどのようなことを意識するようになりましたか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 児童の発達段階 (イ) 児童の活動時間の設定 (ウ) 教室環境
(エ) 学級のきまり (オ) 幼児の発達や学びの連続性
(カ) 児童との関わり方 (キ) 児童同士の人間関係づくり
(ク) 幼稚園教育要領
(ケ) その他 ()

(3) と (4) について、その理由やエピソード等を書いてください。

(5) 長期研修によって、小学校において、スタートカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。
(自由記述)

(6) 長期研修によって、園や小学校においてどのような取組がすすみましたか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 子ども同士の交流
(イ) 教職員の交流
(ウ) 教職員同士の計画的な研修会の実施
(エ) 幼小連携に向けた教職員の組織の見直し
(オ) 接続のカリキュラムの見直し
(カ) その他 ()

(7) 幼小連携をより一層推進するためには何が必要ですか。(自由記述)

(8) 長期研修は、小学校入学時の児童の指導にどのような点で効果的でしたか。

次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 児童一人ひとりの状況を把握し、多様性に配慮した指導
- (イ) 児童が安心して学習に取り組めるような指導
- (ウ) 児童の一日の生活リズムが整うよう配慮した指導
- (エ) 友達と関わる活動を通して、学級集団が徐々に形成されるような指導
- (オ) 幼稚園での遊びや活動を通して身に付けてきたことを、小学校での学習活動に生かす指導
- (カ) その他 ()

その理由やエピソード等を書いてください。

(9) 「長期研修の後、児童への声かけが変わった」という声を聞きます。何が一番変わりましたか。

次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 児童が活動に見通しがもてるような声かけ(指示)をするようになった。
- (イ) 教え込んだり、提案したりしすぎないような声かけ(指示)をするようになった。
- (ウ) 活動が停滞している児童に対して、一人ひとりの児童に合わせた声かけ(指示)をするようになった。
- (エ) すぐに声をかけずに、様子を見守るようになった。
- (オ) その他 ()

その理由やエピソード等を書いてください。

(10) 長期研修の経験は、小学校教諭等としてどのような点の改善に役立ちましたか。

特に当てはまる項目を3つ選んでください。

- | | | |
|-------------------|-----------------|---------------------|
| (ア) 授業計画 | (イ) 指導の工夫 | (ウ) 評価 |
| (エ) 授業研究・授業改善 | (オ) 教材研究 | (カ) 児童理解 |
| (キ) 教育相談(カウンセリング) | | (ク) 問題行動への対応 |
| (ケ) 人権教育 | (コ) 進路指導・キャリア教育 | |
| (サ) 特別支援教育 | (シ) 学級(学年)経営 | (ス) 校務分掌への取組 |
| (セ) 組織的学校運営への参画 | (ソ) 学校安全 | (タ) 家庭、地域、関係機関等との連携 |
| (チ) 人材育成 | (ツ) 法令遵守 | (テ) 教職員同士の連携 |
| (ト) その他 () | | |

(11) (10)で選択した項目について、その理由やエピソード等を書いてください。

アンケートに御協力いただき、ありがとうございました。

「幼児教育長期研修」に関するアンケート

派遣先園長用

所 属	園
--------	---

お名前	
-----	--

長期研修生のお名前	
-----------	--

幼児教育長期研修についてのアンケートです。
回答については、回答用紙に入力ください。

(1) 長期研修派遣教諭の派遣期間中に、どのような点に配慮しましたか。
最大3つまで選んでください。

- (ア) 日常的に遊びの場면을解説するようにした
- (イ) 一人一人の発達の特徴について解説するようにした
- (ウ) 環境の構成について解説するようにした
- (エ) 教師の動きや働きかけの意図を解説するようにした
- (オ) 教育課程や指導計画について説明するようにした
- (カ) 園内研修の内容について事前に説明するようにした
- (キ) 保護者と接する際の留意点について説明するようにした
- (ク) 小学校教諭の時との違いや園にきて気付いた点について聴くようにした
- (ケ) 質問や相談をしやすい雰囲気づくりを心がけた
- (コ) その他 ()

--	--	--

(2) 長期研修派遣教諭を受け入れたことにより、園の先生方にとってどのようなことに成果を感じましたか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 幼児期から児童期への発達の流れについての理解
- (イ) 小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解
- (ウ) 小学校学習指導要領についての理解 (スタートカリキュラムについての理解を含む)
- (エ) 小学校の教員との人間関係の構築
- (オ) その他

--

(3) 長期研修派遣教諭の受け入れは、どのような点でカリキュラム・マネジメントに生かすことができましたか。

(4) 長期研修によって、園において幼小連携・接続に関するどのような取組がすすみましたか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

(ア) 子ども同士の交流

(イ) 教職員の交流

(ウ) 教職員同士の計画的な研修会の実施

(エ) 幼小連携に向けた教職員の組織の見直し

(オ) 接続のカリキュラムの見直し

(カ) その他 (

)

(5) 幼小連携・接続をより一層推進するためには何が必要ですか。(自由記述)

(6) 長期研修によって、接続のカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。(自由記述)

アンケートに御協力いただき、ありがとうございました。

「幼児教育長期研修」に関するアンケート

所属	市立	学校
----	----	----

お名前	
-----	--

長期研修生のお名前	
-----------	--

幼児教育長期研修についてのアンケートです。

回答については、回答用紙に入力ください。

- (1) 長期研修の経験は、長期研修派遣教諭のどのような点の成長（改善）に役立ちましたか。
特に当てはまる項目を3つ選んでください。

- | | | |
|-------------------|-----------------|---------------------|
| (ア) 授業計画 | (イ) 指導の工夫 | (ウ) 評価 |
| (エ) 授業研究・授業改善 | (オ) 教材研究 | (カ) 児童理解 |
| (キ) 教育相談（カウンセリング） | | (ク) 問題行動への対応 |
| (ケ) 人権教育 | (コ) 進路指導・キャリア教育 | |
| (サ) 特別支援教育 | (シ) 学級（学年）経営 | (ス) 校務分掌への取組 |
| (セ) 組織的・学校運営への参画 | (ソ) 学校安全 | (タ) 家庭、地域、関係機関等との連携 |
| (チ) 人材育成 | (ツ) 法令遵守 | (テ) 教職員同士の連携 |
| (ト) その他（ | | ） |

--	--	--

- (2) (1) で選択した項目について、その理由やエピソード等を書いてください。

--

- (3) 長期研修派遣教諭がその経験を小学校で活用できるよう、どのような配慮をしましたか。
特に当てはまる項目を2つ選んでください。

- | |
|---|
| (ア) 低学年の学級担任に配属した |
| (イ) 校務分掌において幼小連携・接続の担当者にした |
| (ウ) 幼稚園と小学校の合同研究会・研修会の企画・実施を任せた |
| (エ) 小学校の教師のための保育参観や幼稚園の教師のための授業参観の企画・実施を任せた |
| (オ) 幼小連携に関する校内研修を設定した、研修成果を校内に伝達する機会を設けた |
| (カ) 就学前の保護者に対して小学校入学後の生活等について話す機会を設けた |
| (キ) その他（ |

--	--

(4) 長期研修によって、小学校において幼小連携・接続に関するどのような取組がすすみましたか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

(ア) 子ども同士の交流

(イ) 教職員の交流

(ウ) 教職員同士の計画的な研修会の実施

(エ) 幼小連携に向けた教職員の組織の見直し

(オ) 接続のカリキュラムの見直し

(カ) その他 (

)

(5) 幼小連携・接続をより一層推進するためには何が必要ですか。(自由記述)

(6) 長期研修によって、小学校において、スタートカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。
(自由記述)

アンケートに御協力いただき、ありがとうございました。

「幼児教育長期研修」に関するアンケート結果 派遣教員

- (1) 長期研修を終えて、あなたはどのようなことに成果を感じていますか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 幼児の発達の特徴についての理解 【 9. 7%】
- (イ) 幼児期から児童期への発達の流れについての理解 【53. 2%】
- (ウ) 小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解 【25. 8%】
- (エ) 幼稚園教育要領についての理解 【 0. 0%】
- (オ) 幼稚園の教員との人間関係の構築 【 9. 7%】
- (カ) その他 【 1. 6%】

- (2) 長期研修において、(1) で回答した成果につながったと考えられる経験は何ですか。最大3つまで選んでください

		全体	(1)で (ア)と回答	(1)で (イ)と回答	(1)で (ウ)と回答	(1)で (オ)と回答
(ア)	一年間を通して幼児と接する	85.5%	66.7%	93.9%	93.8%	33.3%
(イ)	一年間を通して幼稚園教諭と関わる	82.3%	50.0%	81.8%	87.5%	100%
(ウ)	幼稚園の行事の体験	27.4%	50.0%	27.3%	25.0%	16.7%
(エ)	幼稚園の園内研修への参加	19.4%	16.7%	12.1%	31.3%	16.7%
(オ)	園外研修への参加	11.3%	16.7%	9.1%	6.3%	33.3%
(カ)	保護者との会話	3.2%	16.7%	0%	6.3%	0%
(キ)	園だよりの作成	1.6%	0%	3.0%	0%	0%
(ク)	保育所での実習	17.7%	0%	18.2%	18.8%	33.3%
(ケ)	幼小連携の研修会の講師	12.9%	0%	12.1%	18.8%	16.7%
(コ)	保護者対象の研修会の講師	6.5%	33.3%	3.0%	6.3%	0%
(サ)	交流会等の企画・実施	16.1%	0%	21.2%	6.3%	33.3%
(シ)	その他	3.2%	0%	0%	0%	0%

- (3) 長期研修を終えて、あなたは学級経営にあたってどのようなことを意識するようになりましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 児童の発達の段階 【16. 1%】
- (イ) 児童の活動時間の設定 【 1. 6%】
- (ウ) 教室環境 【12. 9%】
- (エ) 学級のきまり 【 1. 6%】
- (オ) 幼児の発達や学びの連続性 【27. 4%】
- (カ) 児童との関わり方 【25. 8%】
- (キ) 児童同士の人間関係づくり 【14. 5%】
- (ク) 保護者との関わり方 【 0. 0%】
- (ケ) 幼稚園教育要領 【 0. 0%】
- (コ) その他 【 1. 6%】

- (4) 長期研修を終えて、あなたは授業づくりにあたってどのようなことを意識するようになりましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- (ア) 児童の発達の段階 【11. 3%】
- (イ) 児童の活動時間の設定 【22. 6%】
- (ウ) 教室環境 【 3. 2%】
- (エ) 学級のきまり 【 0. 0%】
- (オ) 幼児の発達や学びの連続性 【50. 0%】
- (カ) 児童との関わり方 【 4. 8%】
- (キ) 児童同士の人間関係づくり 【 4. 8%】
- (ク) 幼稚園教育要領 【 0. 0%】
- (ケ) その他 【 1. 6%】

(6) 長期研修によって、園や小学校においてどのような取組がすすみましたか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- | | |
|------------------------|-----------|
| (ア) 子ども同士の交流 | 【 38. 7%】 |
| (イ) 教職員の交流 | 【 30. 6%】 |
| (ウ) 教職員同士の計画的な研修会の実施 | 【 6. 5%】 |
| (エ) 幼小連携に向けた教職員の組織の見直し | 【 1. 6%】 |
| (オ) 接続のカリキュラムの見直し | 【 22. 6%】 |
| (カ) その他 | 【 3. 2%】 |

(8) 長期研修は、小学校入学時の児童の指導にどのような点で効果的でしたか。
次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- | | |
|--|-----------|
| (ア) 児童一人ひとりの状況を把握し、多様性に配慮した指導 | 【 22. 6%】 |
| (イ) 児童が安心して学習に取り組めるような指導 | 【 16. 1%】 |
| (ウ) 児童の一日の生活リズムが整うよう配慮した指導 | 【 9. 7%】 |
| (エ) 友達と関わる活動を通して、学級集団が徐々に形成されるような指導 | 【 11. 3%】 |
| (オ) 幼稚園での遊びや活動を通して身に付けてきたことを、小学校での学習活動に生かす指導 | 【 38. 7%】 |
| (カ) その他 | 【 1. 6%】 |

(9) 「長期研修の後、児童への声かけが変わった」という声を聞きます。何が一番変わりましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- | | |
|--|-----------|
| (ア) 児童が活動に見通しがもてるような声かけ（指示）をするようになった。 | 【 24. 2%】 |
| (イ) 教え込んだり、提案したりしすぎないような声かけ（指示）をするようになった。 | 【 27. 4%】 |
| (ウ) 活動が停滞している児童に対して、一人ひとりの児童に合わせた声かけをするようになった。 | 【 21. 0%】 |
| (エ) すぐに声をかけずに、様子を見守るようになった。 | 【 24. 2%】 |
| (オ) その他 | 【 4. 8%】 |

(10) 長期研修の経験は、小学校教諭等としてどのような点の改善に役立ちましたか。
特に当てはまる項目を3つ選んでください。

- | | |
|---------------------|-----------|
| (ア) 授業計画 | 【 6. 5%】 |
| (イ) 指導の工夫 | 【 58. 1%】 |
| (ウ) 評価 | 【 4. 8%】 |
| (エ) 授業研究・授業改善 | 【 30. 6%】 |
| (オ) 教材研究 | 【 11. 3%】 |
| (カ) 児童理解 | 【 74. 2%】 |
| (キ) 教育相談（カウンセリング） | 【 3. 2%】 |
| (ク) 問題行動への対応 | 【 11. 3%】 |
| (ケ) 人権教育 | 【 0. 0%】 |
| (コ) 進路指導・キャリア教育 | 【 0. 0%】 |
| (サ) 特別支援教育 | 【 25. 8%】 |
| (シ) 学級（学年）経営 | 【 24. 2%】 |
| (ス) 校務分掌への取組 | 【 3. 2%】 |
| (セ) 組織的学校運営への参画 | 【 0. 0%】 |
| (ソ) 学校安全 | 【 1. 6%】 |
| (タ) 家庭、地域、関係機関等との連携 | 【 24. 2%】 |
| (チ) 人材育成 | 【 0. 0%】 |
| (ツ) 法令遵守 | 【 0. 0%】 |
| (テ) 教職員同士の連携 | 【 21. 0%】 |
| (ト) その他 | 【 0. 0%】 |

「幼児教育長期研修」に関するアンケート結果 派遣先園長

(1) 長期研修派遣教諭の派遣期間中に、どのような点に配慮しましたか。
最大3つまで選んでください。

- | | |
|--------------------------------------|---------|
| (ア) 日常的に遊びの場を解説するようにした | 【56.3%】 |
| (イ) 一人一人の発達の特性について解説するようにした | 【31.3%】 |
| (ウ) 環境の構成について解説するようにした | 【43.8%】 |
| (エ) 教師の動きや働きかけの意図を解説するようにした | 【37.5%】 |
| (オ) 教育課程や指導計画について説明するようにした | 【37.5%】 |
| (カ) 園内研修の内容について事前に説明するようにした | 【0%】 |
| (キ) 保護者と接する際の留意点について説明するようにした | 【6.3%】 |
| (ク) 小学校教諭の時との違いや園にきて気付いた点について聴くようにした | 【62.5%】 |
| (ケ) 質問や相談をしやすい雰囲気づくりを心がけた | 【37.5%】 |
| (コ) その他 | 【0%】 |

(2) 長期研修派遣教諭を受け入れたことにより、園の先生方にとってどのようなことに成果を感じましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- | | |
|--|---------|
| (ア) 幼児期から児童期への発達の流れについての理解 | 【25.0%】 |
| (イ) 小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解 | 【25.0%】 |
| (ウ) 小学校学習指導要領についての理解(スタートカリキュラムについての理解を含む) | 【18.8%】 |
| (エ) 小学校の教員との人間関係の構築 | 【18.8%】 |
| (オ) その他 | 【12.5%】 |

(4) 長期研修によって、園において幼小連携・接続に関するどのような取組がすすみましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

- | | |
|------------------------|---------|
| (ア) 子ども同士の交流 | 【6.3%】 |
| (イ) 教職員の交流 | 【43.8%】 |
| (ウ) 教職員同士の計画的な研修会の実施 | 【12.5%】 |
| (エ) 幼小連携に向けた教職員の組織の見直し | 【0%】 |
| (オ) 接続のカリキュラムの見直し | 【37.5%】 |
| (カ) その他 | 【0%】 |

「幼児教育長期研修」に関するアンケート結果 在籍校校長

(1) 長期研修の経験は、長期研修派遣教諭のどのような点の成長（改善）に役立ちましたか。特に当てはまる項目を3つ選んでください。

(ア) 授業計画	【 16.7%】
(イ) 指導の工夫	【 50.0%】
(ウ) 評価	【 5.6%】
(エ) 授業研究・授業改善	【 27.8%】
(オ) 教材研究	【 11.1%】
(カ) 児童理解	【 66.7%】
(キ) 教育相談（カウンセリング）	【 11.1%】
(ク) 問題行動への対応	【 11.1%】
(ケ) 人権教育	【 0%】
(コ) 進路指導・キャリア教育	【 0%】
(サ) 特別支援教育	【 0%】
(シ) 学級（学年）経営	【 22.2%】
(ス) 校務分掌への取組	【 16.7%】
(セ) 組織的学校運営への参画	【 27.8%】
(ソ) 学校安全	【 0%】
(タ) 家庭、地域、関係機関等との連携	【 16.7%】
(チ) 人材育成	【 22.2%】
(ツ) 法令遵守	【 0%】
(テ) 教職員同士の連携	【 0%】
(ト) その他	【 5.6%】

(3) 長期研修派遣教諭がその経験を小学校で活用できるよう、どのような配慮をしましたか。特に当てはまる項目を2つ選んでください。

(ア) 低学年の学級担任に配属した	【 72.2%】
(イ) 校務分掌において幼小連携・接続の担当者にした	【 50.0%】
(ウ) 幼稚園と小学校の合同研究会・研修会の企画・実施を任せた	【 27.8%】
(エ) 小学校の教師のための保育参観や幼稚園の教師のための授業参観の企画・実施を任せた	【 16.7%】
(オ) 幼小連携に関する校内研修を設定した、研修成果を校内に伝達する機会を設けた	【 27.8%】
(カ) 就学前の保護者に対して小学校入学後の生活等について話す機会を設けた	【 0%】
(キ) その他	【 5.6%】

(4) 長期研修によって、小学校において幼小連携・接続に関するどのような取組がすすみましたか。次のうち特に当てはまるものを1つ選んでください。

(ア) 子ども同士の交流	【 27.8%】
(イ) 教職員の交流	【 27.8%】
(ウ) 教職員同士の計画的な研修会の実施	【 22.2%】
(エ) 幼小連携に向けた教職員の組織の見直し	【 0%】
(オ) 接続のカリキュラムの見直し	【 22.2%】
(カ) その他	【 0%】

「幼児教育長期研修」に関するアンケート自由記述 派遣教員

(1) (イ)「幼児期から児童期への発達の流れについての理解」につながった主な経験やエピソード等

項目	経験・エピソード等
一年間を通して 幼児と接する (保育所実習含)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生活や遊びを通して総合的に発達していく様子を間近で見ることができた。言葉一つとっても、伝達手段としての外言と思考の手段としての内言を使い分けている様子が日々の生活や遊びの中で見られた。遊びの中で自己制御の発達と社会的ルールの獲得の過程も見られた。 ○ 小学1年生は「できない」ことを前提に上級生から支援を受けることが多い。しかし、園での年長児は、給食当番や掃除などいろいろな活動ができています。したがって、小学校での支援は必要最小限でよいと思うことがあった。
一年間を通して 幼稚園教諭と関わる (保育所実習含)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 0歳から5歳までの子供たちの日々の様々なトラブルとその前後、そして幼稚園教諭の関わり方をじっくり追うことができた。その関わり方の根拠やその後の見通し等について直に尋ねることを重ねることができた。 ○ 指導方法について幼稚園教諭の一人一人の発達の特性に応じた指導を側で見させていただくことで、自分の教師主導型の指導方法を反省するきっかけになった。
幼稚園の行事の 体験	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園では小学校以上に季節の行事を大切に行っている。準備にも時間をかけていて、その中で園児たちの思いやものの見方、人との関わり方等、様々な成長を見ることができた。
幼稚園の園内研 修への参加	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研修において数名をピックアップして行動観察をした。幼児の行動は心理的な発達の状態を表しているということが、観察記録の継続により分かった。このような育ちが繋がって小学校に入学してくるのだということを実感することができた。また、幼稚園の先生方が常に子供たちの成長の先にある小学校へのスムーズな適応を意識しておられることを知り、連携の必要性を痛感した。
交流会等の 企画・実施	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼児期から児童期への発達の流れを理解できたので、入学時の学級経営や学習指導に効果的であった。交流会でも年長児の学びの姿から企画・実施することができた。
幼小連携の研修 会の講師	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研修会で話す内容を自分なりにまとめていく中で、長期研修で学んだことを振り返り、整理していくことができた。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基にした子供の姿のみとりについての研修を通して、幼児期から児童期への発達の流れについて再確認、再認識ができ、自分自身の学びが深まった。
保護者との会話	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保護者との会話で、就学前の不安を感じ取ることができた。仮入学のときに保護者の不安をなくすことがいかに大切か分かった。

(1) (ウ)「小学校教育と幼稚園教育の教育課程の違いについての理解」につながった主な経験やエピソード等

項目	経験・エピソード等
一年間を通して 幼児と接する (保育所実習含)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼児期が遊びを通した総合的な学びであることを実感した。これがまさに小学校教育との違いだと感じた。 ○ 長期研修時、年長だった園児が、1年生に入学した際、小学校の担任となりスタートカリキュラムを実践することができた。現在は、6年生でその時の児童を担任し個々の成長を実感している。
一年間を通して 幼稚園教諭と関わる (保育所実習含)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日々の教育の中で、園の教育方針や教育方法を目の当たりにすることによって、園と学校との違いを感じ理解するようになった。 ○ 個から集団の生活に移行していく過程における活動の工夫や集団の中の個々の成長に合わせた個別の支援に感心した。

	<p>遊びを通した総合的な学び</p> <p>○ 園は平仮名の書き方や椅子にきちんと座ることそのものを教えるのではなく、遊びを通して、字を書くのに必要な腕や指先の力、正しい姿勢を保つために必要な背筋や腹筋をつけることなどを考えて、様々な活動を仕組んでいることを知った。</p> <p>環境構成</p> <p>○ 泡作りでは、うまく泡ができない、道具が使えないことがあっても教師が教えるのではなく、子供同士で教え合ったり、試行錯誤したりできる時間と環境がある。「失敗しないように」ではなく失敗の中から学べるような環境づくりが大切だと気付いた。</p> <p>長期的な視点</p> <p>○ 時間の流れの違いやカリキュラムの細かさなどから、子供を見る視点が変わる。幼児を見るときは、比較的ゆとりをもち、長期的視野で育ちを見ることができた。児童を見るときは、ねらいを達成させるために短期的視野で見ることが多い。長期的視野を合わせもち、成長を見取ることが大切だと感じた。</p> <p>指導計画</p> <p>○ 小学校は主に「ねらいを達成するための手立て」を、幼稚園は主に「個に対応するための手立て」を重視して、計画を立てていくように思った。幼稚園では「昨日の〇〇くんのあそびに△△さんが興味をもっていた。ここに〇〇を置いておくと、遊びが広がるかな」と環境設定をしたり、「昨日の〇〇くんの遊びを全体に広げたい。△△を入れてみようかな」と活動計画を立てたりしており、一人一人の遊びのつながりを考えた保育計画が印象的だった。</p> <p>学びのつながり</p> <p>○ 園の先生方が仕組む活動や子供たちの遊び（かるたや双六）の中に、小学校の学習内容（平仮名や数概念につながる要素など）が多く含まれており、学びのつながりについて考えることができた。</p> <p>○ 一年間を通して幼児の発達の様子や年次ごとの発達の段階に応じた活動を見ることができ、幼稚園の活動のねらいや、それがどのように小学校の学習につながっているかを考えることができた、幼保・小のつながりについて考えることができた。</p>
<p>幼稚園の行事の体験</p>	<p>○ 幼稚園では小学校以上に季節の行事を大切に行っている。それに向けての準備にも時間をかけていて、その中で園児たちの思いやものの見方、人との関わり方等様々な成長を見ることができた。</p>
<p>幼稚園の園内研修への参加 (園外研修会)</p>	<p>目標設定</p> <p>○ 幼稚園では、日々の子供たちの様子や遊びの中で育てたい力、そのための環境づくりについて毎日研修が行われていた。学びの接続を意識し、小学校の授業改善について考えるよい機会となった。</p> <p>研修の視点</p> <p>○ 小学校では「教師の発問に対して児童はどのように反応しているか、児童の反応をどのようにつなげているか(問い返し)」、「ねらいや児童の実態に適した教材がどのように提示されているか(課題提示、しかけ)」を視点に授業の検討をしているが、幼稚園では「幼児が遊びの中でどのような気付きをしているか」、「保育者が幼児一人一人にどのような声かけをしているか」を視点に保育の検討をしていた。互いの視点について相互理解を進める上で、教員交流は大切である。</p> <p>情報交換</p> <p>○ 幼児の活動をする姿を共に見ながら、幼稚園教諭と関わったことで、教育課程の違いについての理解が深まった。また、研修会に参加し、他の長期研修生と情報交換し合ったことも有意義だった。</p>

	<p>特別支援教育の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 園外の研修会では、生活リズムを整えることが学びの土台となることや、特別に支援が必要な子供をどう小学校へつなぐかが課題であることなど貴重な研修を受けることができた。
交流会等の企画・実施	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼保・小の交流会を計画するとき、子供たちの育ちに目をむけて内容や支援の方法について幼保の先生と具体的に話すことができるようになった。 ○ 幼稚園・保育園の先生方と親しい関係を築けたことで、交流活動の提案や新入児についての情報交換がスムーズに進み、改善することができた。
幼小連携の研修会の講師 (保護者対象の研修会の講師、保護者との関わり等を含む)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園の保護者と接する機会や保護者への研修会を通して、「入学前にひらがなが書けない」「小学校の教師は怖くて相談しにくい」など保護者の就学前の不安や思いを聞くことができたことで、保護者の思いを受けとめる大切さを学んだ。 ○ 園便りを通して、幼児期のあそびが小学校での学習へどうつながっていくか保護者に発信する機会をもつことができた。

(3) (オ)「幼児の発達や学びの連続性」を意識するようになった主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
子供理解の視点の変容(個人差)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供たちが入学してきた時点では個人差が大きいですが、それは能力の違いではなく発達の段階の違いであるということが研修を通して理解できた。そのことにより、子供を理解する視点が変わった。
環境構成の重要性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園では9月に入ると子供たちが見つけてきた落ち葉やまつぼっくりなどが「あきみつけこーなー」に置かれていた。それを見て、イチョウの葉やどんぐりなどを嬉しそうに持ってくる子供が増えていた。学びは授業中だけではないことに気付いた。
活動時間、学習内容の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園から小学校に入学する上で、学級経営や授業について子供の意欲や期待感につながるような適度な段差になるよう意識した。 ○ 生活科や体育科と算数科を合わせ、チーム対抗の玉入れや魚釣りゲームの中で足し算引き算の学習をすると、子供たちが数えたり計算したりする必然性が生まれ、意欲的に取り組むことができた。
園での育ちや学びの理解	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園によって就学前の体験がそれぞれ多様であることや、その多様な体験の上に小学校の学習や生活がスタートすることを実感した。園での多様な学びや体験が小学校につながるために子供をしっかり見取りながら関わっていくことの重要性に気付かされた。
子供の実態把握	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園での実態を知っている分、環境が変わった中で子供たちが頑張っているところも見取ることができる。褒めることも増えた。園で学んだことを生かす視点ももてるようになった。
一人一人の実態に応じた支援	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園では、一人一人がスモールステップで確実に一つのことを理解できるように指導されていた。できなくても他の方法をさせるなど興味が持続するような方法を考えていた。小学校は時間に制約はあるが、できるだけ一斉指導ではなく、個々に応じた指導を心がけている。
子供の主体性と教師の意図のバランス	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供に任せることと教師が教えることを意識し、子供同士の協同を重視した授業構成を考えるようになった。 ○ 授業づくりでは、幼児期に遊びを通して学んだことや経験したことを引き出しながら、子供が自分の生活との関わりの中で課題意識を高めていくことができるように工夫している。
子供の安心感	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研修中に、情緒の安定した子供は活動にも意欲的であり、友達とよく関わることを学んだ。学級づくりや学習づくりの土台になる子供たちの情緒の安定を図ることができるよう意識している。
関わり合いの充実	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園では、子供たちをしっかりと関わらせるために、あえて玩具の数を減らしたり、場が騒然となるような状況をつくったりしていた。子供たちに場を与え、委ね、見守るという姿勢を取り入れている。

保護者との関係づくり	○ 遊びを通して培われたたくましい身体や手先の巧緻性は、入学してからの様々な活動をスムーズにすることを研修で実感した。その大切さを保護者にも伝え、小学校生活に積極的に取り入れている。
------------	---

(3) (カ) **学級経営**で「児童との関わり方」を意識するようになった主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
受容的・共感的	○ 学級経営においては、子供の思いを共感的に受け止めることで、教師と子供の信頼関係も構築され、多少なりとも小1プロブレムを回避できるのではないかと思う。
待つ・見守る	○ 幼児が協力して遊びを工夫したり、深めたり、発展させたりする姿を通して、それを見守り、学びを見取り、環境構成をしていく教員の仕事の重要性を学ぶことができた。また、「待つ」ということの大切さを感じ、子どもを力をもっと引き出すための声かけや関わり方についても学ぶことができた。同時に、子供同士をつなぐことによって学びが深化、発展していくことも学ぶことができた。
任せる・生かす	○ 学級経営では、園では何でもできた存在の年長児としての発達や自尊心を意識して指導した。 ○ 子供の気付きや発見、意識の流れが1日の学校生活につながるようになるように配慮した。
声かけ・言葉かけ	○ 幼児教育において自己肯定感を高める声かけをすることで、自分も相手も大切に感じることができるようになることを感じた。 ○ 園では教師が決めたり指示したりするより、子供と話し合い、子供が決めることが多い。例えば、「やりたくない」と言う子供に、「どうしたらやれるようになるのか」、「いつまでなら待てる、いつになったら終わる」など、子供の気持ちを聞き取ったり見通しをもたせたりすることで、子供が進んで「やる」と決めていた。教師の言葉かけ次第で子供の気持ちに変化することを学んだので生かしていきたい。 ○ 砂場で砂山ができた時、私が「すごいね！上手にできたね！」「がんばったね！」と声かけするのに対して、幼稚園の先生方は「すてき！登ってみたいくなるね！」「高い山で、かっこいいね！」と声かけをされていた。また、身の回りの整理整頓ができた子に「きれいにできたね！」と声かけする私に対し、幼稚園の先生方は「片付けると気持ちいいね！はさみも喜んでみたいだね！先生もうれしいな！」と声かけをされていた。幼稚園の教育は環境を通して行うものなので、「環境設定」をととても大切にしている。教師もその「環境」の一部であると考えられていて、子供の気持ちにそった声かけをされることで、次のあそびを誘発していた。子供たちの様子を「～できる」「～できない」で評価し、「できていないな、どうやってさせようかな」と考える私とは、視点が違うと感じた。小学校に戻り、「かっこいいね！気持ちいいね！先生はうれしい（悲しい）な！」はよく使わせていただいている。
環境構成	○ ちょっとした環境の変化が児童との会話につながったり心を和らげたりすることが分かった。児童の変化に気付いて褒めることもでき、毎日のスタートがわくわく感のあるものにできることを知った。

(4) (イ) **授業づくり**で「児童の活動時間の設定」を意識するようになった主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
モジュール学習 合科的な学習	○ 入学当初は、45分の授業時間にとらわれず、15分位で活動を変えていくようにし、一つ一つの活動に児童が集中して取り組めるようにした。 (読みきかせ15分、名前を書く15分、色塗り15分など) ○ 入学当初は合科的な活動や柔軟な時間割を取り入れるなど子供の実態に

	応じて工夫した。
--	----------

(5) 長期研修によって、小学校において、スタートカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。(自由記述)

項目	記述
行事との関連	○ カリキュラムの基本形を作り、行事に合わせて変更できるようにした。 ○ 仮入学の時に学校探検や体験授業を行い、入学への期待感をもたせた。
子供の経験実態の重視	○ 幼稚園や保育園で指導されていることをあらためて1から指導するのではなく、小学校で必要なことを付け足して行く形にした。 ○ 小学校の行事や時間割に子供の動きを当てはめていくのではなく、子供の実態を見ながら内容・時間ともに柔軟に編成・実施した。
モジュール学習 合科的な学習	○ 幼児期の活動や育ちを考慮し、経験や具体的な姿を学習内容と関連させ生活科を中心に合科的に扱った。 ○ 1単位時間を15分に区切り、活動の中に、数に関する手遊びや読み聞かせなどを意識して取り入れた。
学年全体での実施	○ 入学当初は、学年全体での活動の場を設定し、学年全体の指導の統一化を図った。
環境構成の工夫	○ スタートカリキュラムで丁寧に教えていくことと、褒めて自信を持たせるところとを意識して実施できるようになった。 ○ 子供が見通しをもてることと安心感をもてることを基準に、環境設定や計画、実践化を行うように心がけるようになった。
接続カリキュラムの編成、実施	○ 幼稚園教諭と一緒に見直したことで、子供たちの発達と指導の必要性を考慮した新たなアプローチカリキュラムを作成できた。スタートカリキュラムについては、合科的な授業を行ったり、学校生活に慣れることを意識した活動を取り入れたりしている。
全教職員による実施	○ 入学当初の2週間、朝の活動と1校時目に全教職員がTTで関わるようカリキュラムを編成した。学校のきまりや約束事など、一斉に指導することで統一され、事後の指導が楽になった。担任のゆとりにつながることもに児童の行動観察ができ、児童理解にも役立った。
見直し・改善 (PDCA サイクルの確立)	○ カリキュラムを実施した後、見直しをして次年度へつなげるという校内のPDCAサイクルを確立した。 ○ 予想される子供の様子と教師の対応等、具体的に記載した。週末に、一週間を1年担任で振り返り、加除修正を行った。

(7) 幼小連携をより一層推進するためには何が必要ですか。(自由記述)

項目	記述
幼稚園と小学校の情報交換、合同研修会、教職員同士の積極的な人間関係づくり	<p><u>目指す子供像の共有化</u></p> <p>○ 目指す子供の姿を共有化して、それぞれの段階で計画を立て、指導する。園も小学校も同じ思いで子供を育てている。</p> <p><u>情報交換・合同研修会</u></p> <p>○ 園児と一緒に交流学習を行うために、幼保小連携担当を作り、1学期の早いうちに計画を立て、話合いの機会をもつとよい。</p> <p>○ 幼小の共通する課題(例えば、保護者にどう寄り添い、サポートするか等)について、一緒に研修する場があるとよい。</p> <p><u>教職員同士の人間関係づくり</u></p> <p>○ 小学校の方から、園に積極的に話しに行くこと。園の方からは、交流をもちたいと思っても提案しにくいようである。</p> <p>○ 子供同士の交流以前に、教職員の交流が必要。教職員間で情報交換が密にできると、児童の園での様子等を知ることにつながる。</p> <p>○ 夏季休業中などに教職員同士がミニ研修会を開くなどして、互いの名前</p>

	と顔を覚えることから始めて連携を深めるとよい。 互いの教育課程への理解 ○ 子供同士の交流活動を行い、その打合せや反省会の中で子供の様子を話すことで、互いの教育内容などを理解できる場としたい。 ○ 幼児期から児童期への発達の流れや、幼稚園の教育課程について、小学校教員の理解を進めるために、幼保小合同研修会等、計画的に交流する場を設定することが必要。
互いの教育の場を理解するための体験研修	○ 小学校教員が園に行って学んだり、園の先生が小学校に来て学んだりする機会が増えるとよい。また、互いの仕事を体験するのもよい。互いが目指している教育の方向性を理解することが大切。
幼児と児童の交流活動	○ 高学年を中心にいろいろな学年との交流も必要。 ○ 幼稚園も小学校もそれぞれがたくさん行事をかかえている。一つ一つは意義深く、子供の成長にも大いに役立つが、反面ゆとりのなさにもつながっている。連携推進には双方のゆとりが必要。
全教職員の共通理解	○ 幼小連携に対する校内の認知度が低い。学校全体への啓蒙が必要。 ○ 1年担任だけでなく、学校全体での幼保小連携の研修が必要。 ○ 幼稚園、保育園で指導していることを、小学校教諭が理解すること。幼児教育に対する小学校側の関心を高めることが必要。
組織・体制づくり	○ 連携担当が変わっても、なめらかな連携になるよう引き継ぐこと。 ○ 低学年、校務分掌担当だけでなく職員全体の幼児教育への関心、意識を高めていくことが必要である。小中連携で実施されているような教職員の組織の見直しと研修体制を確立すること。
管理職の理解	○ 小中連携よりも幼保小連携は軽視されがちである。管理職の理解のもと、色々な先生が低学年を経験する機会が増えるとよい。

(8) (ア)「児童一人ひとりの状況を把握し、多様性に配慮した指導」に効果的であったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
友達との関わり	○ 生活科や音楽の学習で友達同士の関わりを広げられるように配慮した。
子供の安心感	○ きちんとできておとなしくしている子供でも、話しかけてあげないと、緊張と不安で問題行動が起こることもある。目立つ子だけでなく、一人一人に1日1回以上声かけをするように、帰る前など個々に話しかけて教室から出すようにした。 ○ 子供にも分かりやすい言葉を使って指導すること。
一人一人の育ちに合わせた指導	○ 幼保から小学校への適応が難しい子供の中には、特別な教育的配慮を必要とする場合が多い。幼児期には、その子供の発達の速度に応じてボトムアップ的に支援を積み上げていく。小学生としてのスキルの獲得が難しいと考えられる場合には、就学前に年長の担任等とよく連携をとり、必要となる支援や教育環境の整備に向けて準備を進める等、就学移行支援を行うよう心掛けた。 ○ 前もって園に行き、入学児童の情報交換ができることで、事前の準備をすることができるようになった。
家庭との連携・保護者との信頼関係づくり	○ 個別に話を聞くことや、家庭と連絡を取り合い一緒に成長を見守っていくことの大切さを感じた。 ○ 子供にとって、小学校入学への不安は、大人が想像する以上に大きい。園から一人だけ入学するような子供の場合には保護者の不安も相当なものだと感じた。そうした不安を理解して、子供に寄り添った支援をするために、園の先生と情報交換をするとともに保護者とも連絡を密にとるようにした。
園との情報交換の必要性	○ 実際に子供一人一人を見てみると、幼稚園で心配していることと小学校で困っていることが少し違うことが分かった。

(8) (オ)「幼稚園での遊びや活動を通して身に付けてきたことを、小学校での学習活動に生かす指導」に効果的であったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
遊びの要素を教科の学習へ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年生の算数で学習する「三角形2枚で正方形(ましかく)になる」ことは、園での積み木遊びや片付け、折り紙をする際に行っていたことを想起させると学習の導入がスムーズであった。 ○ 読み聞かせやわらべ歌などを取り入れ、言葉のリズムを楽しんだり、語彙を増やしたりしながら言葉に対する感覚を磨く指導を意識している。
園での経験を教科の学習へ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 縄跳びや鉄棒、水遊び、食に関する事など、どのような経験をしているか具体的に知った上で子供と関わることができた。 ○ 就学前にいろいろな遊びや活動をしている子供は、小学校での学習にも意欲的に取り組んでいる。文字の読み書きなどは挽回できるが、経験を通して身に付けた力(生きる力)はなかなか挽回できない。
主体的な学びの重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校で教師が手を出し過ぎていた部分を、ある程度子供たちに任せてみることで、自主性や学習の発展が見られた。 ○ 園では、遊びの中で考えたり折り合いを付けたりする経験をしている。その経験を生かして新生活に慣れることができるよう声かけを工夫した。
集中力の持続につながる工夫	<ul style="list-style-type: none"> ○ 遊びやわらべ歌を数の概念や言葉の習得に生かした。園の読み聞かせを継続し、じっと聞くことや新しい言葉に触れる機会とした。
身体、五感を使った活動の重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ モジュールでの授業を設定し、身体を使っての活動を45分間の中に取り入れたりするようになった。 ○ 手に取ったり、匂ったりするなど五感を育てることを意識し、見つけたり、話したり、書いたりする活動につなげている。
子供の実態に応じた指導	<ul style="list-style-type: none"> ○ 入学すると下級生になるが幼稚園では最上級生として頼りになる存在だった。できることはしっかりやらせることが必要である。

(9) (ア)「児童が活動に見通しがもてるような声かけ(指示)をするようになった」ことにつながった主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
子供の実態を把握した上での事前準備	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園での子供の姿から、どこでつまづきそうか、どんな説明が必要かなどを予測できるようになった。その結果、子供たちの活動にはどのような準備が必要か、どれくらい求めてよいか考えられるようになった。 ○ 子供が園で遊びを通して学んできた内容が分かるので、今行っている活動の前後を予想し、ゆとりをもって声かけができた。
視覚化	<ul style="list-style-type: none"> ○ 見通しがもてるように、やることを見える化したり、実物を見せてイメージが持てるように配慮したりするようになった。 ○ 分かりやすい言葉、活動の順番を考えて視覚的に見通しがもてるような板書などを意識して授業を計画するようになった。
指示の出し方の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ○ 内容だけでなく、声の大きさ、スピードなども考えるようになった。 ○ 指示は短く、一つずつを心がけるようになった。 ○ 全体への指示では、「自分が言われている」という意識になりにくいので、名前を呼んで指示をするようにした。
子供の意欲と教師の意図	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動の様子を見ながら、子供たちが興味をもつよう小出しに手立てを打つようになった。

(9) (イ)「教え込んだり、提案したりしすぎないような声かけ(指示)をするようになった」ことにつながった主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
子供の「自分でできた」という気持ちを重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園教諭の姿から、子供が自分でできたと実感することが大切だと理解できた。 ○ 子供が「自分でできた!」と思えるようなさりげない声かけや提案をす

	るようになった。
子供の「自分でできた」という気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供をやる気にさせるような言葉かけを学んだ。 ○ 教師の価値観を押しつけすぎず、子供の気持ちにより沿い、意欲を高めるよう心がけるようになった。
子供の主体性を重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「～しましょう」と指示するだけでなく、「どうしたらいいと思う？」というように主体性を身に付けさせるために一人一人が自分なりに考えて行動ができるような呼びかけを意識するようになった。また、そうすることができるように掲示物など教室環境の工夫を心がけた。 ○ 長期研修では、環境構成の重要性を学んだので、小学校でも教え込みや細かい指示はできるだけ避け、子供が試行錯誤しながら前進する機会を作ることができるよう、環境構成も含めて心がけた。
子供同士の関わり合いを重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 見守りや子供同士の関わりの中での学びを大切にできるようになった。 ○ 子供同士のもめごとがあったときには、双方の話をよく聞き、どうすれば解決できるか考えさせる機会を多くとるようになった。
子供の思考の流れを重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師が決めたことをさせるのではなく、児童の言葉をつなげながらどうしたらよいか考えさせるようになった。 ○ 園では、一人一人の思考の流れを見ながら、じっくりと待つ声かけをしていた。今までの自分の指導方法を反省し、様子を見ながら指示をスモールステップで分かりやすく出すようになった。
教師側の心のゆとり	<ul style="list-style-type: none"> ○ がまん強くおおらかに接し、子供をせかすことが少なくなった。 ○ 具体的に分かりやすい言葉で声かけをしたり、気持ちに共感したりするようになった。

(9) (エ) 「すぐに声をかけずに、様子を見守るようになった」ことにつながった主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
子供同士の関わり合いによる解決の場の重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供は自分で解決する力を持っており、友達とぶつかることで多くのことを学んでいる。その機会を大切にしたいと思うようになった。 ○ 自分たちで話し合い、決定したことを実現させる過程で、見守ったり支援をしたり、環境を整えたりすることに敏感になった。待つことで、子供の発想が生かされ、互いに認め合う場面が増えた。
子供の育ちや学び、思考の流れ等に応じた声かけのタイミングを重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園では、一人一人の活動の様子を細やかに見守り、すぐに手を出したり、声をかけたりはしない。そして、その子のために一番よいタイミングで声をかけ支援をする。子供の思考や発達の流れに寄り添えるようになりたいと思うようになった。 ○ できない原因は何かを探り、様子を見ながら前向きな声かけをするようになった。
子供の思いを重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 表面的に表れていることだけで安易に判断せず、その子供の特性や、もっている力、言わんとすることを見取ったり、子供の言葉に耳を傾けたりしてから、必要な言葉かけるようになった。
間接的な関わり方を重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「一人一人の思いをしっかりと見取りたい」、「その子がどんな姿を見せるかが楽しみ」、「教師の手立てより時間や仲間の方が有効」と意識が変わった。声かけの仕方だけでなく、直に声をかけるのではない間接的な関わりを工夫することも増えた。

(10) (イ) 「指導の工夫」に役立ったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
子供の願いや意欲	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園児の小学校に行ける喜びと勉強したいという願いをできるだけ損なわず、長続きさせるための学校生活と学習について工夫をするようになった。 ○ 小学校での初めての活動では、就学前との段差がなくなるように配慮するのではなく、1年生になった喜びや期待感を大事にするよう努めている。

信頼関係	○ 信頼関係を築き、子供が安心した気持ちで学習や生活に向かえるように、一人一人に親しみをもって声をかけたり、関わったりしている。
個に応じた指導	○ 小学校の生活では初めての事柄がたくさんあるので、ハードルが高くなりすぎないように、子供の困り感を予測しながら、活動を仕組み、指導の工夫をするようになった。 ○ 全体指導をしながらも、個別指導のことを頭に入れて、子供一人一人に応じた声かけをするように心がけている。
褒める	○ どんな些細なことでも見逃さずにすぐに褒めることが、子供との距離を縮めることになると身をもって学んだ。
スモールステップ	○ ペア学習やグループ学習の際や、指示を出す時は、黒板の前に皆を集めて、至近距離で話をし、近場の友達とリラックスした雰囲気の中で会話をさせたりするなど、一斉指導に抵抗のある子供にとってハードルを下げるスモールステップ指導を心がけている。
カリキュラムの工夫	○ 年間のカリキュラムを見通したり、経験や成長を考慮して合科的に取り組める内容を工夫したりするようになった。
学びの連続性	○ 長期研修後は、小学校での指導を考える上で、就学前と中学校のそれぞれ3年間を含めた長いスパイラルで考えることを意識するようになった。 ○ 入学時の子供の様子や育ちだけではなく、これまでに園でどのような支援をうけてきたのかがよく分かり、接続期を意識した指導を心がけるようになった。
保護者や園との連携	○ 学校での様子だけでなく、保護者の話や幼稚園・保育園での様子などを参考にしながら多面的に判断し、指導に当たるようになった。
視野の広がり	○ 幼稚園の教育活動を見ることで、小一プロブレムの陰にどんな原因が潜んでいるかよく見えるようになり、問題解決に有効だった。小学校教師の視野の広さが子供の学びを豊かにする。
子供の力を引き出す	○ 子供には、大きな力がある。それを引き出す手立て、生かし伸ばす手立てがたくさんある。そしてそれができる立場に自分があることの責務と幸せを痛感している。
体験の重視	○ 具体的な指導も必要だが、ある程度方向付けをしたら、子供同士の話し合いや解決力を大切にするようになった。子供自身が体験したり、身をもって感じたりしていないことは、次へとつながらないと感じるようになった。 ○ 子供たちは園で絵本をたくさん読んでもらっており、自分で読むことができるようになる喜びがよく分かった。読書の時間や、子供たちの経験を生かした活動の時間を十分にとるようになった。
言葉のやりとり	○ 言葉の獲得が学習の基礎となり、生活を豊かにしていくことを学んだので、言葉集めや言葉クイズを多く取り入れ、日々言葉のやりとりを楽しむようにした。

(10) (エ)「授業研究・授業改善」に役立ったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
子供の興味・関心	○ 授業の導入に絵本や具体物を取り入れ子供たちの興味・関心を高め、理解を深めるようにした。 ○ 国語や道德の授業では、園で読んでもらったことのある本を活用して興味をもてるようにするなど指導の工夫をした。
遊びの要素	○ 幼児の育ちを知ることは、授業づくりに大いに役立った。算数や生活科など、幼稚園での遊びの中にたくさん学びがあったので、それを授業づくりに取り入れることができた。
園での経験とのつながり	○ 就学前にも経験のある学習（生活科、音楽科、図画工作科等）は、その経験を生かして、更に学びのあるものとなるような授業構成を心がけている。

体験の重視	<ul style="list-style-type: none"> ○ 実物やイメージのわきやすいものを使ったり、体験的に学習する機会を多く作ったりして実際の生活から学びを取り上げつなげていくようにしている。 ○ 体験は学びを定着させる上で大切なことであり、時間がかかり大変ではあるが、体験活動を多く取り入れた授業を心がけている。
個別指導	<ul style="list-style-type: none"> ○ 指導や教材研究について園での教育を見てきて、遊び中心の生活や、集団より個を大切にされている様子から、個別指導重視で一人一人に語るように話したり、遊びの中に学びがあるような授業を仕組んだりするようになった。
モジュール学習	<ul style="list-style-type: none"> ○ 45分の授業時間を15分単位で区切り、様々な活動を組み合わせて、できるだけ集中して学習に取り組むことができるようにした。
合科的な学習	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国語科と図工科の合科指導を行った。文字を書く際、「はらい」を「とめ」にする子供がいる。そこで、粘土でひもを作り、そのひもで自分の名前を作らせ、「はらい」の部分はひもの先が細くなるようにさせた。すると、その後の書写においても「はらい」の場合は力を抜いて書くことを意識するようになった。また、粘土ひもで平仮名を作ることで、筆順の誤りにも気付くことができた。
子供とともに楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研修後の1年間は、授業でこんなことをやってみたい、子供たちとこんなことをしてみたいと思うことがたくさんあった。特に、生活科の授業は大きく変化した。そうすることでわたしも、子供たちと一緒に活動を楽しむことができるようになった。
主体的・対話的で深い学び	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園で学んだ「子供の意欲を引き出す環境構成や言葉かけ」は、学校教育で求められている「主体的な学び」につながる。また、幼稚園教諭が穏やかに子供に語りかけ、その声を拾い、周りに広めていく手法は、「対話的な学び」につながる。このような手法を取り入れることで、学級づくりや授業が改善できた。 ○ 長期研修中に聞いた講演の中で、講師の先生が、幼児が遊び込むことの重要性について話され、「子供は遊び込む中で、①自分でやってみる、②友達と協働して楽しみながら知恵を出し合い工夫する、③繰り返し試行錯誤しながら遊びを深化・発展させる、という過程を経験し、多くのことを学んでいく。」と言われた。また、「この過程は我々大人が仕事をしていく過程とも共通しており、子供たちが将来社会の中で仕事をして生きていくことにつながっている。」とも言われた。このことが印象深く心に残っており、研修後は協同的な学びや探究していく学びを意識した授業づくりをしたり、長いスパンで「子供の育ちはつながっている」という視点から、教材研究や環境設定をしたりするようになった。

(10) (カ)「児童理解」に役立ったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
子供の言動の背景	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発達の段階を意識するようになり、子供の実態を背景ごと受け止めて理解するようになった。慌てず観察することも気を付けている。 ○ 問題行動を起こす子は、年齢が低いほど、家庭で満たされていないことが表れることが多いので、その子の背景にあるものをよく理解した上で、個に応じた指導が大切なことがよく分かった。
個々の特性	<ul style="list-style-type: none"> ○ 個々の特性を理解し、一人一人に適した声かけをすることで、子供は自信をもち、大きく伸びる姿を目にした。 ○ 幼児は、心の育ちや言葉の発達、運動能力等について個々による違いが大きい。入学後も児童理解に基づいたきめ細かな配慮や言葉かけにより子供を伸ばしていくことが必要と感じた。
子供の思い	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一人一人の思いをしっかりと聞くこと、どうしたいか、どうしたらよいかを本人に考えさせることなど、子供への接し方を園の先生から学んだ。

発達の段階	○ それぞれの発達の段階で獲得するはずのものをうまく身に付けていないと、次のステップが難しくなる。家庭の教育力低下が大きな課題となっている中、園や学校で教えていくことが増えていることを痛感した。人間関係構築のスキルも不足している。
発達の連続性	○ 幼児から小学生への発達の連続性を見ることができた。また、待つことの大切さを知り、できたことを共に喜べるようになった。 ○ 幼稚園から小学校へ入学することを楽しみにし、その段差を乗り越える子供は、入学が成長のきっかけになるように感じた。しかし、それが乗り越え難い子供には、個別の対応が必要になる。困り感のある子供の成長の様子や適切な対応について、幼小で引き継ぐことが大切だと気付いた。
子供の実態把握	○ 長期研修では、最上級生として動く年長児の活躍に感心した。できる年長児が小学校で必要以上に子供扱いされないように注意している。逆転現象が起こらないように留意したり、一人一人に役割をもたせたりすることを意識している。
評価の視点	○ 発達の段階を考慮する意識が高まった。特に、点数化されるもの、子供が表記したものを評価することは容易ではあるが、それと同じくらい、個々の意欲や言動等を評価したい。 ○ めざすゴールは同じでも子供によって過程が違ったり、言動には理由があり、個人内評価を重視することの大切さを痛感した。
個に応じた支援	○ 「ひたすら一人でプラレールで遊ぶ子」、「折り紙を折ろうとして手の汗で紙をびしょ濡れにしてしまう子」、「同じ子とトラブルを繰り返す子」など、その子その子に応じた手立てをもっと知りたい。
環境構成	○ 入学当初の子供たちの座席の配置を工夫したり、教室の環境を整えたりなど、子供を理解することで効果的な環境づくりに取り組むことができた。
体験活動	○ 入学、新しい行事、新しい単元の学習のたびに、子供たちは緊張する。体験活動をさせることで、友達と自然に会話が生まれ、関わり合いを通して安心感、親しみ等を感じる。その上で子供は、自分の力を発揮したり、勇気を出して挑戦したりすることができる。

(10) (サ)「特別支援教育」に役立ったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
個々の特性に応じた支援	○ 小学校はクラスごとの一斉指導を基本としているが、特別な教育的配慮の必要な子供に対して、可能な限り一人一人の発達の段階、獲得してほしいスキルを適切に把握した上で支援をするようにした。
保護者や関係機関との連携	○ 困っている子供への関わり方について、必要であれば専門家(スクールカウンセラー、ソーシャルワーカー、特別支援コーディネーター等)に相談したり、保護者をつないだりして、保護者・学校・専門家(医療)が互いに情報を共有し、チームで支援にあたるようにした。 ○ 個々の特性に応じた就学指導には就学時健康診断より早期の対応の必要性を実感し、その後、市の指導主事(特別支援教育担当)として専門機関と連携した5歳児相談会を立ち上げた。 ○ 園での特別支援教育への取組や先生方の関わりや子供の学びや成長、保護者との関わり方を知り、小学校につないでいくことが大切と分かった。 ○ 自閉症の子供の補助や研修会への参加を通して、なめらかな接続を考えると、特別に支援の必要な子供をどのようにつなぐかということに課題を感じた。長期展望に立って、園や学校、保護者と関係機関で共通理解を図ることの大切さを感じている。
幼児期からの連続した育ち	○ 通級指導教室を担当するようになり、療育相談会に参加したり、園で気になる子供の様子を参観したりする機会があった時、長期研修での学びを生かし、幼児からの連続した育ちを考えながら意見を言うことができた。

(10) (シ)「学級（学年）経営」に役立ったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
温かい雰囲気づくり	○ 学級経営においては、一人一人を大切にし、温かい雰囲気をつくりだすことで、自然と自己肯定感や仲間意識も育っていく。
学年全体への広がり	○ 同学年の先生の協力を得て、学年全体で授業研究をしたり、交流活動を進めたりすることで、同一步調での学年経営が出来た。 ○ 自分の学級だけでなく学年全体を見ること、そのための同学年の先生方との情報交換が大切だということを改めて実感した。(毎週放課後に定期的実施した児童カンファレンスがよかった。)

(10) (タ)「家庭、地域、関係機関との連携」に役立ったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
保護者とのつながり	○ 幼稚園では、朝のお迎えと帰りの引き渡しで保護者と一日に2回顔を合わせる。保護者と話をすることで、子供の内面についての理解がより深くなった。また、子供の成長に関わる様々な人としてしっかり話をして連携を深めることが子供の理解の助けとなると感じた。
地域のつながり	○ 幼児期から地域の方との関わりが多く、小・中での行事での関わりやキャリア教育等でもつながる部分があることを日々感じている。
幼稚園・保育所とのつながり	○ 研修中や研修後に小学校教諭だけでなく、幼稚園教諭の前でも研修内容や成果について話をさせてもらう機会をいただき、相互理解に役立った。また、幼稚園・保育園の保護者対象の研修会においても、小学校入学までに心がけてほしいことなどを伝えた。 ○ 研修中に出会った幼稚園教諭との人間関係が今も続いている。そのおかげで、交流活動などがスムーズにできている。 ○ 長期研修の間にご縁のできた幼稚園や保育園の先生方と、今でも連絡を取り合っている。そうして受けるエネルギーに支えられて今に至っている。人とのつながることは宝物だと感じている。 ○ 国語科において初めての作文指導で書いた文章を出身園に送るように現在もしている。出身園の先生方からは「成長を感じられた」「書いたり消したりした跡に本人の努力がうかがえた」等と好評である。児童もお世話になった先生方に今の自分を知らせたいという思いが強く、学習意欲が高まっている。 ○ 子供がパニックになったときに、園での先生方や子供たちの関わりを参考にして対応することができた。また、就学前の引き継ぎ会も子供や保護者理解に有効だった。 ○ 学期ごとの幼児児童の交流を行っており、特に3学期には学校に来て授業を見てもらうことで、子供たちの小学校への期待が高まり、不安が減少するという声を聞いた。また、幼稚園、保育園の先生方が園生活との違いを見つけて、子供たちが困らないようにうまく声掛けしたり、あらかじめ練習したりすることで、子供にとって小学校入学時の段差の解消にもつながり、スムーズに学校生活につながることができた。また、特別に支援が必要である子などの情報も詳しく聞くことができるので、その後の指導に大変有効であった。 ○ 小学校に戻ってから、幼保小連絡会を年2回実施した。それまでは、年度末に次年度入学する子供についての情報交換をしていたが、それに加えて、年度始めの連絡会を設定した。そこで交流学年担任と年長組担任の顔合わせと今年度の交流計画作成をし、併せて1年生の授業参観もしてもらった。入学して2ヶ月後、スタートカリキュラムを終えて小学校生活を送っている子供たちの様子を参観してもらうことで、小学校の様子を伝えようと考えた。授業参観は、年度末の連絡会でも実施している。 ○ 研修先の幼稚園、あるいは勤務校の校区内にある幼稚園や保育園との連

	<p>携を深めるように心がけた。小学校の教員に希望者を募り、幼稚園教諭との研修会を開いた。(内容例：手遊び歌、工作、鉛筆の持ち方指導、AFPY等) また同様に保育園での保育参観や保育研修を行った。教職員・保育士が交流を深めることで、子供同士の交流が盛んになった。</p> <p>○ 年度初めに担任同士が顔合わせをすることで連絡窓口ができたのが本当によかった。長期研修中に、幼稚園の先生方が「小学校は、垣根が高い。小学校の運動場を利用したいと思っても、トライアングルの正しい持ち方を小学校に尋ねたいと思っても、誰に言ってよいものか。」と言われたことがあった。お互いの顔が分かったことで、すぐに連絡できる仲になった。</p>
関係機関とのつながり	<p>○ 園の先生のみでなく、保健師など子供の育ちに関わった方々とも積極的に連携をとるようにした。</p> <p>○ 学校の外とつながることに目を向けられるようになり、小学校教諭として大きな転換点となった。</p>

(10) (テ)「教職員同士の連携」に役立ったと考える主な理由やエピソード等

項目	理由・エピソード等
就学前の支援体制づくり	○ 就学時健診での様子や園からの情報をもとに入学前に支援体制を整えることができた。
全職員で子供を見る	○ 園では、全職員で全幼児を見守るということが当たり前のように行われていた。小学校でも学級の扉を解放し、いつでも誰でも入って指導してもらえるように伝え、実践してきた。子供たちはいろいろな先生から声をかけてもらって表情も明るかった。担任が気付かない面のフォローがされ、生徒指導面でも遠慮なく介入してもらえることから、担任も心にゆとりができた。
幼小連携の体制づくり	○ 幼小連携の全体構想やスタートカリキュラムの計画を提案し、子供同士の交流や教職員同士の交流が進められている。
保育体験・合同研修会の実施	<p>○ 小学校に戻ってからは、小学校の先生方にも保育参観をしてもらっている。夏期休業中には、見学日を3日間設定し、校区内の保育園へ保育参観に行っている。参観後は感想を取りまとめて小学校と保育園の先生方に配布している。また、校区内の幼稚園では、2学期に1度、保育参観・協議会に参加している。その際、幼稚園の先生方には保育案も出してもらっている。協議会にも参加することで、より理解が深まっている。これらは、長期研修中に校長先生と園長先生との間で進めてもらっていたので、小学校に戻ってすぐに実施することができた。</p> <p>○ 今年度から、幼稚園の先生に小学校の校内研修に参加してもらっている。夏期休業中に、学力テストの分析やそれを受けての授業改善、また、活用する力を高める授業について考える研修があった。その時に、幼稚園の先生方と一緒に板書型指導案をつくったり模擬授業をしたりした。他にも、実技研修や特別支援や人権教育の研修などは、園の先生方と一緒にできるのではないかと考えている。また、園児の遊びの様子をビデオに撮り、その検証を一緒に行うのも、お互いの子供の見方が分かっておもしろいと思う。</p>
管理職の理解	○ 管理職の理解があると、話がすぐ進む。校長先生方には、ぜひ園長先生方と仲よくしていただきたいと思う。

「幼児教育長期研修」に関するアンケート自由記述 派遣先園長

(3) 長期研修派遣教諭の受け入れは、どのような点でカリキュラム・マネジメントに生かすことができましたか。

項目	記述
接続を意識したカリキュラムの編成	<ul style="list-style-type: none"> ○ アプローチカリキュラムを作成することで、なめらかな接続に効果があった。 ○ アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの整合性を取ることができたことで、職員が自信をもって教育にあたるようになった。
教育活動の見直し・改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 長期研修教員と仕事をする中で、幼稚園側が戸惑っているだけではなく、小学校の先生方も幼稚園の子供たちの発達の流れを理解していないことがあることに気付き、その都度、実際の子どもの様子を見ながら相互理解を深めた。 ○ 小学校が困っている内容が分かり、めざす児童像も見えてきて、それを踏まえた保育活動を行っている。 ○ 保育活動の意味やつながりを再認識して、次年度以降の取組に生かした。 ○ 小学生の姿から、どういう取組をするか、今までにない視点が加わり保育の方向性がより明確になった。園としては小学校に合わせて子供たちを育てるのではなく、幼稚園で育ててきた姿をしっかりとらえて、それを土台として小学校教育に取り組んで欲しい。
教職員の資質向上、研修	<ul style="list-style-type: none"> ○ 特別支援の視点での働きかけが不十分な面があり、個別の対応についてさらに研修をする機会となった。 ○ 実際に授業を参観したり、先生方と話をしたりすることで、具体的に小学校の様子が理解できるようになり、見通しがもてるようになった。幼稚園教育要領の改訂から、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても改めて学ぶことや見直すことができた。
保護者との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保護者とのつながりにおいて、小学校を意識した内容や生活習慣等で必要なことを伝えることで、保護者の信頼につながった。 ○ 長期研修生との連携は、3年たった今でも続いており、保護者向けに小学校就学に係る講話をしてもらうなどマネジメントの一助となっている。

(5) 幼小連携・接続をより一層推進するためには何が必要ですか。

項目	記述
カリキュラムの編成・実施等	<ul style="list-style-type: none"> ○ 接続への意識を高めるカリキュラムの編成。 ○ 連携活動の教育課程への明確な位置付け。 ○ 子供同士の交流や連携会議も定期的実施・開催されているが、これを継続・改善していくことが大事である。
子供同士の交流活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「お客さん」的な交流(小学校の音楽会リハーサル等への招待)だけでなく、小学校生活を知る体験等ができればよい。
教職員の合同研修、情報交換、保育・授業参観等	<ul style="list-style-type: none"> ○ 接続に関する学校と園の話合いの時間の確保。 ○ 幼小合同でのカリキュラムや発達の段階の理解などの研修の実施。 ○ 小学校の生活を見る機会が増えるとよい。 ○ 指導要録に、一人一人の子供がよさを発揮できるように、有効だった手段などを書くようにしている。
教職員同士の人間関係づくり	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園側が受け身にならず、意図を伝えながら一緒に活動。 ○ 教職員の交流が深まることで、互いの敷居が低くなり気軽な行き来ができるようになった。それにより、子供の理解もできた。各学年との交流が計画的に実施できるようになった。

幼小連携・接続に関する研修	<ul style="list-style-type: none"> ○ 交流や連携において、教職員全体が共通理解すること。マナー化しないために、反省、見直しをすること。 ○ 幼小連携の指定園・校を指定すること。 ○ 教員養成時における幼小連携の必要性の理解。
幼小のパイプ役となる人材	<ul style="list-style-type: none"> ○ 長研の先生から教わることは多い。また来てほしい。 ○ 小学校の校長、教員が短い期間で転勤してしまうため、連携が深まりにくい。 ○ 長期研修した教員が早期に転勤になり、せっかくできたパイプがなくなった。 ○ 小学校の先生に、小学校生活を迎えるための心の準備や身に付けておきたい生活習慣、勉強の準備について保護者向けに話してもらいたい。実際、研修中に小学校のことを保護者に話してもらい、保護者も熱心に耳を傾けていた。長期研修が終わった次の年から給食試食会やオープンスクールが始まり、子供たち自身が小学校を身近に感じる機会が増えた。
管理職の意識改革	<ul style="list-style-type: none"> ○ 管理職の心構えと意識改革。 ○ 校長と園長が連携の意義について理解すること。
組織体制の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校が組織として幼小連携を推進すること ○ 継続的に学び合うこと。その体制。
物理的・時間的なゆとり	<ul style="list-style-type: none"> ○ 物理的な距離や移動手段などの手立てが必要。 ○ 時間的な余裕がなかなかないが、参観日や運動会など案内があるものにはできるだけ参加している。

(6) 長期研修によって、接続のカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。

(自由記述)

項目	記述
編成	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今まで、学校の教育課程（教科等の時数制限や内容）について理解することがなかったが、幼稚園・保育所では分からなかったそういう規定があることが分かり、互いの大変さも含めてカリキュラムへの理解が深まった。 ○ 幼児教育と小学校教育の違いを理解することができ、アプローチ・スタートカリキュラムを考える上で役立った。小学校での鉛筆の持ち方や、給食のマナーなどのつながりにも役立った。
実施	<ul style="list-style-type: none"> ○ 長期研修生から教えていただいたことを本園の教育目標（5本柱）に盛り込み実践し、継続して取り組むようにしている。重荷は基本的な生活習慣ですが、鉛筆の正しい持ち方、よい姿勢、素早く着替えをしたり行動をしたり、お弁当を決められた時間内で食べられるようにしたり、次の行動に移す時には時計を使って時計を見るように意識を持たせたりして、小学校生活のスタートに戸惑うことが少しでも軽減されるように配慮している。また、参観日には保護者にも正しい鉛筆の持ち方の指導の仕方を見ていただき、親子で自分の名前を書く練習をすることで、鉛筆の持ち方やひらがなの書き順を幼稚園だけではなく、家庭でも気を付けてみてもらえるようにした。
評価・改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校生活に必要な力が分かり、その育成を意識した取組を進めている。 ○ 年間の指導計画に幼小の交流に関する新たな取組を増やすことができた。 ○ アプローチカリキュラムで、上靴の履き方、給食のルール、ハンカチの使い方の見直しを行った。 ○ アプローチカリキュラムカリキュラムの内容について意見をもらい、改善を図った（手遊びや歌を同じものを取り入れる等の工夫）。園がこれまで蓄積してきたものと学校で必要なものとの兼ね合いを図ることができた。 ○ 就学を意識したものになった。（交流等が行われ、長研も

	<p>受け入れてきたが、2年後には閉園の予定である。地域の少子化の影響)</p> <ul style="list-style-type: none">○ 年長クラスでは、小学校入学を見据えたカリキュラムを意識するようになった。○ 就学を見据えたものになった。それまでは、アプローチ・カリキュラムは作っていたが、接続を意識したのは初めてである。保護者にも伝えている。○ 小学校の行事や校内の様子、交流時の写真等をまとめて、小学校はこんなところですよということを子供にも保護者にも知らせてもらっている。わくわくタイムなど、子供たちが小学校に慣れやすいプログラムの内容を話し合う。また、幼稚園の様子をみて、「こんなことも取り入れられている」「50分くらいはじっとしていることができる」などと話し合い、内容の検討もできると思う。
--	--

「幼児教育長期研修」に関するアンケート自由記述 在籍校校長

(2)(1) で選択した項目について、その理由やエピソード等を書いてください。

項目	理由・エピソード等
児童理解	<ul style="list-style-type: none"> ○ 入学する園児を知っていることによって、新入学児の安心感につながった。 ○ 幼児性の抜けきれない子供への対応がよい。 ○ 子供の成長に応じた声かけができています。
指導の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校の視点だけでなく、別の視点で見ることが、心にゆとりのある指導につながった。 ○ 幼稚園の学びを基にした指導ができています。ゆっくりと時間をかけて子供を見取っている。 ○ 幼稚園での経験を生かした学習環境や授業の工夫ができるようになった。 ○ 発達の段階に応じた具体物や視覚的に訴える工夫をしている。 ○ スタートカリキュラムを見直し、滑らかな接続ができています。
授業研究・授業改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 入学時の1年生の特徴をよく捉え、何が壁になっているのかをよく理解し授業を行っている。(授業の区切り方、音や動きを使った授業など) ○ 研修主任として、研修を企画して実施することで、学校全体の低学年での授業の在り方について改善する機会を与えている。
組織的・学校運営への参画	<ul style="list-style-type: none"> ○ 管理職と相談しながら周りを巻き込んでいる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への教職員の理解が進み、幼保とどう絡んでいくか考えながら全学年が交流している。本年度の県主催「つながる子供の育ち大会」にも全員が関わり、組織で取り組むことができた。 ○ 教職員同士のつながりが強くなり、気軽に相談できるようになった。 ○ 現在、長期研修を行っているため、学校を外から見て意見を言ってくれる。コミュニケーション能力が一層高まっている。 ○ 幼小の接続を踏まえた教育課程を編成し直す必要性がある。
学級(学年)経営	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学年主任として、他学級への声かけができています。 ○ 長期研修生が1年生の担任となったときに、児童理解が進んでいて、それを生かす学級経営ができる。また、それにより、保護者も安心することも考えられる。
人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人材育成に役立っている。今年度は学年主任をしている。低学年の担任をしている若手教員の相談に乗っている。 ○ 長期研修後、1年担任を任命した。今年度は2年担任を任命。低学年教員の意識が高まっている。
家庭、地域、関係機関等との連携	<ul style="list-style-type: none"> ○ 校内、園への声かけにより、連携の意識づくりができた。 ○ 交流の目的を明らかにして実施できている。 ○ 長期研修の経験を生かし、現在でも担当を補佐しながら、幼稚園とのパイプ役として業務を行っている。 ○ 園との情報交換会や交流ができています。保護者とのつながりができ、相談しやすい雰囲気になった。

(5) 幼小連携・接続をより一層推進するためには何が必要ですか。

項目	記述
カリキュラムの見直し・改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程の見直しを行う。年間計画を共有して実施する。 ○ 園児について、「できることはできる」として小学校に引き継ぐこと。
子供同士の交流活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供同士の交流。 ○ 低学年児童だけでなく、中・高学年児童との交流を充実することが大切。例えば、縦割り班での遊びの中に演じを入れる等の活動を行うことが大切。
教職員の合同研修、情報交換、保育・授業参観等	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教職員同士の交流。 ○ 教職員の交流の場の設定。交流の改善，充実を図ること。 ○ 単なる交流だけでなく，実際に子供を見て，子供一人一人の成長や支援，保護者のことなどを情報交換できる関係をつくること。
小学校教員の保育体験	<ul style="list-style-type: none"> ○ 特に低学年を担当する教員の保育実習をすることで，幼児期とのつながりに目を向ける教員が増える。 ○ 小学校教員の幼稚園での体験。養成制度に組み込んで欲しい。 ○ 派遣依頼，夏季休業中には小学校教員を一日研修派遣等の取組を行うこと。本校は，今年度は8名が参加した。 ○ 校内研修に保育体験を位置付けること。
教職員同士の人間関係づくり	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教員が，情報交換のみならず，気軽に行き来すること。 ○ 教職員間の交流。
幼小連携・接続に関する研修，幼児教育についての理解	<ul style="list-style-type: none"> ○ 市町の研修会等で幼・小の両方が参加できる研修会。幼→小の研修。 ○ 幼小連携の必要性を全教職員が理解すること。 ○ 小学校と幼稚園が互いの教育課程を理解すること。幼児教育が目指すものを知った上で交流を仕組むこと。 ○ 教職員へ幼児期の教育への関心を日常から高めておくこと。 ○ 幼小でつながることで，入門期の土台をつくる。結果として，落ち着いた集団づくりにつながる。その意義を浸透させること。幼保の横のつながりも必要。同じ地域の子供を育てるという感覚の共有。
幼小のパイプ役となる人材	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人材が必要。コーディネーターの役割。大規模校では特にいてほしい。
管理職同士の連携	<ul style="list-style-type: none"> ○ 管理職同士のつながり。 ○ 校長が園長と連携し，教職員同士の関わりをマネジメントすること。
組織体制の確立	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校全体での共通理解と，組織の中での位置付け。 ○ 教職員，子供，保護者のつながりをつくること。小中連携のように，幼小兼務ができるとよい。（出前講座，TT等の実施）
物理的・時間的なゆとり	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供の交流や教職員の交流のための物理的な距離と時間。

(6) 長期研修によって、小学校において、スタートカリキュラムの編成・実施はどのように変わりましたか。

項目	記述
編成・実施	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校生活の流し方が変化している。 ○ より実効性のあるものとなった。 ○ 実体験を基にプログラムを実施することができる。 ○ 長研研修派遣教員のおかげで、交流が盛んになった。まずは、子供たちが「小学校を知る」ことが大切。その機会が増えた。 ○ 幼・小の時間軸の違いを意識したカリキュラム，体験を通して学ぶカリキュラムとなっている。計画的に実施でき，園との交流も増えた。 ○ スタートカリキュラムの目的，内容が整い，計画的に実施できるようになった。子供の成長に目を向け，ゆっくりと対応できるようになった。 ○ 幼小のギャップを埋め，滑らかな接続ができるようになった。幼稚園の学びをもとに，小学校でやるべきことを精選し，効果的な指導ができています。年間を通じて，目指す子供の姿を明らかにした取組ができています。 ○ 子供の実態に応じた流れで生活を始めることができるようになった。子供の安心感につながっている。子供の成長を生かす(後退させるのではなく)指導を意識することができるようになった。
評価・改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 見直しを常に行い，改善していく。 ○ カリキュラムの見直しが進んだ。 ○ 子供の実態，地域の実態に応じて教育課程を見直している。幼稚園と合同で接続カリキュラムを作成した。 ○ 事前に来年度入学する園児を見ることによって，その子供たちの状態に合わせてスタートカリキュラムを改善していくようになった。スタートカリキュラムの間に，保護者ボランティアを入れるように改善した。各学級2～4人程度入ってもらい，朝の通学から下校までみてもらうようにした。 ○ 子供の実態に応じたカリキュラムを作成し，毎年見直しを行っている。全教職員が夏休みには幼稚園に行き，研修を行うなどの取組が定着している。

平成30年度幼児教育長期研修派遣

所属校：下関市立勝山小学校

派遣園：下関市立川中幼稚園

○子供への支援について

4月当初

朝の支度が分からず、部屋中をウロウロしている年長男児がいたので、「どうしたの？何か困っているの？」と声をかけた。すると、その子は、困っていることを言葉で伝えることができた。そこで、私は、「『先生にどうしたらいいですか』って聞いてみたら？」と提案した。

【担任の意図】

教師側から声をかけて困っていることを伝えるのではなく、自分から聞きに来てほしい。年度初めの時期であったため、一人一人が何ができて、何が苦手かを把握するためにも、困っているからといってすぐに手助けをするのではなく、しばらく様子を見たい。

9月 運動会（よさこい練習）

運動会では、年長児35人でよさこいを踊る。私は、「見劣ることがないようにどの子にも同じことを求めるのか」、「それぞれの子供に合わせた目標でよいのか」と悩んだ。体の動きがぎこちなくて拍を数えながら動くのが難しい子供や、好きな遊びの時間が少ないことで落ち着かない子供、うまくできなかった時の気持ちを引きずってしまう子供など、集団での活動で支援を必要とする子供がいた。

小学校では、運動会の練習だけでなく、他の教科の学習があったり、中休みや昼休みは必ず確保されていたり、気分転換する機会が多くあったように感じる。一方、幼稚園では、園庭を順に使うので、外で思いっきり走り回ることが難しいこともあり、気分転換ができにくい子供もいるように感じた。

【担任の考え】

一斉指導の場では、同じ目標を伝えるが、個人の達成目標をもって保育にあたっている。一人一人が少し頑張れば達成できるところに目標を設定し、「みんな一緒」までは目指していない。保護者にも降園時に様子を伝える中で、成長や課題を事前に伝えていた。また、運動会練習には集中して取り組むが、好きな遊びの時間もとり、気分を切り替えられるようにしていた。

11月 2学期に転入してきた年長男児

不安傾向が高く、転入時には涙が出るが多かった。友達のアドバイスでは不安が解消されず、泣きながら教師にアドバイスを求めるが多かった。

担任の適切な対応で少しずつ自信をつけていった。

11月になっても、不安感からか、活動の切れ間に私にくっついてくることがあったが、こちらから声をかけるのは好きな遊びの時にし、やることが終わっていない時には敢えて声をかけないようにした。すると、本当に困ったときには「どうすればいいの?」と泣かずに尋ねることができるようになった。「どうしたらいいと思う?」、「他の友達はどうしているかな?」と声をかけるだけで、その子は自分で判断ができるようになった。

(考察)

今まで、「困らないように」と先回りして声をかけたり、手助けしたりしていた。しかし、園の先生や子供たちと関わっていく中で、一人一人の成長を見とり、手を貸す時と見守って様子を見ている時の見極めの重要さに気付いた。一人一人にあった支援を行うことで、子供は、教師の助けがなくても判断したり、自信をもって行動したりすることができる。必要以上に手を出しすぎないように心がけるようになった。

〇ねらいの設定と達成に向けて

小学校

各教科等にその時間のねらいがあり、そのねらいを全員が達成できるような学習活動を考えていた。子供がどこでつまずきそうかを教材研究時に考え、ヒントカードやワークシートなどを用いることで、課題を解決できるような支援を行っていた。

幼稚園

10月 十五夜お月様

黄色の色画用紙に紺で夜を描いていく。塗っていないところが月として残る。

担任に製作の意図を聞いていなかったため、私は、まるく塗り進めている子供に「まるくお月様が光っているみたいね。」と価値付けをした。しかし、そのように塗っている子供は数名で、他の子供は塗り方を意識していないようだった。

【担任の意図】

運動会や芋ほりの絵で「上手に描きたいが描けない」と活動が停滞していた子供への支援として、今回の製作を行った。失敗も成功もない、単純な製作なら楽しんで活動できるのではないかと考えた。季節に合った製作を行うという活動の中に、個に応じた配慮をしていた。



(考察)

小学校では、ねらい達成に向けて、「失敗しないように」、「スムーズに理解・習得できるように」と事前に手立てを考えたり、意図して問題解決学習を仕組んだりしていた。一方、幼稚園では「楽しむこと」に重きが置かれ、失敗を繰り返す中でどうすればうまくできるかを子供自身で考えている。製作時にポイントを伝えはするが、今日できるようになることを目標としてはおらず、1年間の間にできるようになったらよい、という長い目を見たねらいが多い。失敗からの学びの大切さ、余裕をもった時間設定の重要さを学んだ。

○幼小交流について

幼児教育長期研修前は、幼小交流について考えることはほとんどなかった。交流対象の学年担任でなければ、他の学年や学級で交流が行われていることを知らないこともあった。

研修園の交流先が在籍校ではないこともあり、子供同士の交流は互いのカリキュラムに沿ったものに加え、以下のとおり、新たに交流の場を仕組んだ。

10月 小学生の遠足日に学校探検（年長児）、運動場での好きなあそび・お弁当（年中・年長）

11月 学習発表会の児童鑑賞日に参加（全員）

(考察)

幼稚園側にとって小学校に行くことや小学校の行事に参加することは、大きな価値があることが分かった。

学校探検で1年生の教室や特別教室を見たり、トイレを利用したりすることで、子供たちが困る部分を事前に把握することができ、保護者に伝えることもできた。子供たちも就学について考える機会になったようだ。また、小学生の劇を見たことで、自分たちの発表会のイメージを具体的にもつことができ「小学生みたいにやりたい」という刺激になった。

交流というと、子供同士の交流活動ばかりをイメージしていたが、「場」の交流も重要であることを学んだ。課題としては、学校側から園にどのように発信していくかである。今年度は、研修園だけでの実施だったが、来年度以降は多数の園を対象に、幼小連携・幼小接続に向けてどのように対応していくかを考えていきたい。

1 子供との関わりの視点から

(1) 幼児同士のやりとりを見守り、行動の理由をしっかりと聞くことで柔軟に対応する。

〈事例〉

友だちのA君の自転車に自分の自転車をぶつけるB君。A君は「やめてよ。」と言いながら逃げようとするけれどなかなか前に進めない。何度か同じような状態が続き、そのうちA君は腹を立て自転車をやめ、他の遊びに加わった。



その場を見た私は「危ないからやめようね。友だちの嫌がることはやったらだめだよ。」と心の中で思っていたが、見ていた先生は、「どうしたの？A君あっちに行っちゃったよ。何かあったのかな。先生にお話しして。」と声をかけられた。話を聞くと、最初から赤い自転車に乗りたかったB君。乗っている間に何度もA君に代わってと言ったものの聞いてもらえず、自転車をぶつけたとのこと。「ぶつけたのは、本当は、代わってっていうことが伝えなかったんだね。」と先生は確認し、A君のところへB君と一緒にいって話をされた。

一場面を見て、すぐに子どもの行動に対して決めつけるのではなく、その前後の状況をしっかりと聞くことは大切だとわかっているにもかかわらず、時間的なことやこれまでの子供の様子から決めつけた見方や考え方をしてしまうこともある。行動の理由をしっかりと聞き、その時の子供の気持ちに寄り添うことの大切さを改めて感じた。

日々の遊びの中のいざこざや葛藤を通して、子供たちは相手の気持ちを考えることの大切さや自分の気持ちを伝えることの大切さ、人との関わり方を学んでいる。子供たち一人一人とじっくり対話をしながら道徳性を育てていきたい。

(2) 発達段階を理解して、見通しをもって関わる。

〈事例〉

4月当初の砂場の様子。一緒の場所においても、年少組の子供たちはバラバラの遊びをしていた。遊び道具も自分が使いたいものだけを使って、自由遊びの間中、ずっと同じ遊びの繰り返し。先生方もにこにこしながら温かく見守っておら



れ、時には一緒に砂遊びに参加されていた。「この時期の子供は、おもいっきり自分のやってみたい遊びで夢中に遊ぶことが大切で、一人で遊んでいる子供も時期が来たら、友達と遊ぶのが楽しくなる」と先生は言っておられた。その先生の言葉通り、5月頃には砂場でケーキ作り（下）が始まっていた。この時期でもまだ一人遊びが楽しい子供もおり、先生はそっと見守っておられた。「～しましょう。」「～してみたら？」ではなく、見通しをもって関わることで、一人一人の発達に合わせて声かけをしていくことができる。



(3) 内省する体験の大切さ → 自分で考え行動できる高学年を目指して ＜事例＞

小学校でも1日の振り返りや、自分自身の体験を振り返る機会がいろいろな場面で設定されているが、幼稚園でも内省する場が多く取られている。年長組の夏休みのお泊り保育では、できたこと・できなかったこと、活動していた時の気持ちや感想を伝え合うことで自分自身や友だちの成長に目を向けていた。



異年齢の友達との交流・ハロウィンパーティーでは、プレゼントを渡した時の自分の気持ちや、年下の友達をお世話をしてあげた時の相手の様子を振り返ることで、友達と関わることの楽しさや、相手に喜んでもらった達成感を味わっていた。



幼児期から内省する習慣をつけておくことが、相手の立場に立って考えることや自分で考え行動できる高学年の姿につながっていくのではないかと感じた。

2 保護者との関わりの視点から

＜事例＞

運動会が終わって、1週間。「明日は、最後のお遊戯だからみんな楽しみましょうね。」という先生の言葉に子供たちの笑顔が輝いた。

「運動会の日、お休みした友達がいたので、全員そろって踊りたい」という子供たちの思いから、欠席した保護者にも伝え、全員で踊りを発表した。保護者は、「今年は見られないと思っていたから、今日はありがとうございます。運動会までずっと毎日家で練習を頑張っていた



んですよ。」と嬉しそうだった。先生方の細かい配慮と心配りに頭が下がる思いでいっぱいだった。

降園の際も、先生方は一日の様子を具体的に保護者に伝えられている。保護者も、子供の悩みを気軽に相談し、園と一緒に子育てをしているという思いから信頼関係の強さを感じている。先生方の保護者目線の声かけ、丁寧な対応を小学校でも続けていきたいと思う。

3 校種間、地域との連携の視点から

<事例>

幼稚園では、行事や活動を通して、子供たちと地域の人との関わりが多い。もちつきなど、毎年、地域の方と関わる中で、子供たちも地域の方との交流を楽しみにしている。子供たちの成長を温かい目で見守ってもらえることがありがたい。



幼稚園での関わりが小学校・中学校でもつながるとより長いスパンで子供たちの成長が見られ応援団が増えると思う。また、子供たちの笑顔は地域の人を笑顔に元気にしている。子供たちが地域の行事に参加する意義を強く感じ、人づくりは地域づくりであるという実感をもった。今後も地域との連携を通して、自分が好き、友だちが好き、ふるさとが好きな子供の姿を目指して研修を進めていきたい。

1 子供たちの気持ちに寄り添った言葉がけと子どもの見取り方

- 一人一人の特性を全教職員で共通理解する。(朝礼と終礼時での「ほうれんそう(報告, 連絡, 相談)」の徹底)
- 子供の不安や心配を安心に変えていく声かけと雰囲気作りに心がける。

4月当初, 年少児涙なみだの登園

朝の忙しい時間帯だが, 受け入れる側として, 子供たちの心を安心させるため, 教職員一同が「笑顔」で「優しい言葉」を心がけていた。あせらず, ゆったりと話しかけられたり, 泣いている子へは気持ちが切り替えられるように, 話題をその子の興味があることや答えられやすいものにしたりと先生方の気配りが感じられた。

苦手な給食の克服マジック

先生は「残していいよ。」ではなく本人の目の前で少し減らし「ほおら, こんなに減らしたから, もう大丈夫! B君のかわいい所を見せてね。」と, 安心感をもたせて食べられるように促しておられた。また, 頑張っている子へはその意欲をすぐに褒め, 「わあ, B君すごい! かわいいなあ。お家の人も喜ぶよ。」と声をかけておられた。園児にとって, 「苦手な食べ物を食べることができた。」「褒めてもらえた」=「達成感」「自信」につながる一歩になった。この連続で, 子供は, 苦手な食べ物も少しずつ克服していった。

配慮を要する子供への対応

4月から外国籍の幼児が入園し, 日本語も全く分からない状態からのスタートであったが, 徐々に幼稚園生活にも慣れ, 友達との関わりも増えてきた。幼児の成長過程には, 安心して自己を発揮できるような環境設定や指導方法の工夫等, きめ細かな計画・支援がつねに施されていた。



降園前には, 毎日担任と笑顔でタッチ

一日の終わりには先生が一人一人と握手をして声をかける。みんな笑顔で教室を出ていく。



共感的姿勢

子供の心を開くには, まずは共感的理解と対応が大切である。(優しく笑顔で話しかける。)

全教職員で足並みを揃えた指導が, 子供たちの心の安定を生む。

2 子供たちの自主性を育てるために「待つ」姿勢を徹底

- 「できない」と助けを求めてくる子供に対して、すぐに手を貸すのではなくやる気にさせる。
- できたときには、しっかり褒める。(保護者へも伝えることで、信頼関係も構築)

鼓隊のバトンとの出会い

年中から幼稚園に入園し、友達も少なかったT児だが、運動会の鼓隊練習(バトン)を通して、バトンが得意になっていった。練習を重ねるにつれ、技も上達していき、先生にも褒められる機会が増えていった。先生は、降園時に一日のT児の様子を毎日保護者へ伝えておられた。運動会の練習中、T児の中で、「今日も、バトン練習がんばろう。」という前向きな気持ちが芽生え、幼稚園生活の中で自分にとっての楽しみと自信がもてたことが登園渋りがなくなった一つのきっかけとなった。



適切な 支援方法

「手助け」＝「優しさ」ではなく、子供の困り感やつまずきに対して、適切な支援方法を即座に判断し、対応する。すぐに気持ちを切り替えられない場合は、教師側に「待つ」という心の広さ・度量も必要である。時間をかけて、自分なりに自分自身と向き合っている姿を見守る。また、自分なりに克服したときは、しっかり頑張りを賞賛する。

3 同じベクトルで教育することの相乗効果

- 園の重点目標に則って、それぞれの組で発達段階に合わせた系統的な指導・支援の在り方
- 目指すべき姿(目標)が明確に存在するので、教員の一貫した指導で、保護者も安心感をいただく。

週案のチェック

活動計画通りに進んだときは、赤で○のサインをされ、予定通り進まなかった場合は、赤で△印と共に気づきを箇条書きにメモされている。1日の振り返りと反省が翌日に生かされるように工夫されていた。

通信の有効活用方法

クラスだよりで注目したのは、「先月の保育を振り返って」のコーナーである。先月の活動内容から家庭でも心がけて取り組んでみてほしいことが掲載されていた。園児の園での様子や育てていきたい姿が明確に記され、園と家庭とが手を取り合って大切な子供を育てていこうという思いが伝わる内容となっていた。



教職員 一丸体制

一日の活動の振り返りや反省、子供の様子について、メモをし、残しておくことで次時の取組や対応の修正や変更に大いに役立つ。また、各クラスの週案を職員室に掲示することで、全教職員が日々の活動を周知できるよさがある。週案では、活動のねらいをしっかりとつこと、的確な指示や説明ができると共に子供の実態に合わせて、内容の工夫・改善も必要である。

4 季節を楽しむ自然体験活動

- 体験活動から生まれる感動や探究心を自由に表現する場を保障する。(造形活動など)
- 自然体験活動を取り入れることで、自然の変化や恩恵にも気付く力が育まれる。



豊かな体験活動が豊かな表現活動へとつながる

公園でカマキリをつかまえたところ、クラスで飼いはじめ、図鑑で体のつくりや特徴を調べた。次に紙粘土でカマキリを作ったり、絵を描いたりした。教室内でカマキリを放すと、子供たちは高く飛んだカマキリに益々関心をもちはじめた。



興味関心を引く活動内容

マニュアル通りの活動を仕組むのではなく、子供の地域の特性や地域に住む人等との身近なものや人とのかかわりをもつ機会を大切にする。かかわりを通して得た感動体験は、その後の活動の中でも色濃く残り、進んで活動に取り組むことができる。教師自身が、まずは、その土地のことを知り足を運び、情報を収集することが必要である。

5 継続して取り組むことで、力が付き、伸びる

- 基礎から段階的に練習することで、着実に力を付けることができる。

運動会に向けてがんばった鼓隊

最初は、難しかった鼓隊のカラーガード(年中組男子)やバトン(年中組女子)の動きも繰り返し練習を重ねるうちに体得し、上達していった。園児のモチベーションを上げる先生方の指導のすご技が光っていた。



一通り振り付けを覚えたら、次は個別練習の時間で技の完成を目指す、一人一人が自信をもてるような言葉がけをする、大きな模造紙にリズム譜を書き掲示するなど、全員が覚えられるように配慮をされていた。



1学期後半から練習を始め、PDCAサイクルを上手く機能させていた。



スモールステップ化

技能を身に付け、育てるためには、具体的な指導方法を提示し、スモールステップで繰り返し練習をする。最初からハードルを高く設定するのではなく、子供の実態に合わせて、途中修正を加えながら、低いところから徐々に技能をあげていくことで、一人一人が確実な歩みを遂げることができる。

平成29年度幼児教育長期研修派遣

所属校：下関市立生野小学校

1 児童理解（発達段階に合わせた指導・声掛け）

①入学したての子供のかかえる不安感～現在続けていること

同じ園から来た子供を把握するために、要録に記載されていることを簡単にメモした。そうすることで、個々の特性や、園の教育方針を把握することができた。

登下校については、4月の下校指導や家庭訪問を経て、学年間で、通学路が同じ子供がいないか情報交換をした。また、朝、子供が学校に到着する時刻を7時55分と予め定めておき、1年生がだいたい同じ時間に登校するという状況を作るようにした。下校時も、登校班ごとに教室を並んで出るようにし、同時に下校させるようにした。

②『園での経験』とのつながりを意識する

生活科の「球根を植えよう」の学習では、「お店屋さんごっこ」の場を設定し、実際に球根を注文し、支払う経験をさせた。

また、様々な学習において、写真や絵、擬音語等を活用し、子供の語彙力や経験の差などへ配慮するようにした。学校での生活、学習の全てが「スタートカリキュラム」であるという意識をもって、日々子供の指導に当たっている。



2 学習と評価

導入の工夫（具体物の操作、体験的学習等）

①国語科「くじらぐも」の音読発表会→②音楽科「はるなつあきふゆ」の振り付け発表会→③学級集会「ハロウィンパーティー」での劇→④学習発表会「おむすびころりん」または「大きなかぶ」というように、それぞれの活動が、子供の意欲や主体性に基づいた連続した学びになるよう心がけるとともに、子供の興味や関心を高める教具を準備できるように、教材研究にも力を注いでいる。

また、発達の段階を考慮したねらいを設定し、書くことが苦手な子供にも配慮しながら、記述したものの評価以上に、子供のつぶやきや表情、行動を評価するようになった。

ぼくたちの劇、喜んでもらえたね。

今度はもっと大きな舞台上、衣装も着て、たくさんの人に見てもらいたいな。

話し合い

せりふも動作も自分たちで考えたよ。

学習発表会後も、衣装を教室に置いておき、子供たちが自由に使って遊べるようにした。

劇「おおきなかぶ」

3 環境構成

①空間的環境

研修前以上に、安全面への配慮を重視するようになった。また、子供が緊張感を緩和したり、活動に集中したりしやすくなるように、意図的に空間をつくるようにした。

学習面では、班活動を多く取り入れたり、子供を黒板の前に集めたりすることで、子供同士の距離感が近くなるように配慮している。



こ
と
は
何
で
す
か
」
こ
し
は
い
し
ん
ピ
ん
と
ま
だ
ン
ク
の
マ
イ
ー
タイ
る
番
ビ
ク

歌に合わせて歩き回った後、大きな輪になるよ。踊りも自分たちで考えたよ。



②人的環境

園の先生のようにエプロンを身に付けたり、やわらかい表情やスキンシップを重視したりすることで、子供が安心できるようにした。また、他学年の

教職員とのふれあいや他学年の児童との交流等を取り入れ、多くの人との関わりがもてるようにした。

③物的環境

1学期、廊下に「ごじゅうにどうぞ」のコーナーを設けて学習で使った教具を置いておき、単元の終了後も、子供が自由に使えるようにした。2学期は同じ場所に「かん字コーナー」を開設し、子供たちが書いたものを掲示した。子供たちは、廊下で漢字をなぞって、読んで教室に入ってくる。

また、学習したことに関連のある発展的教材を置くようにもしている。国語の「うみのかくれんぼ」の学習では、担任が海の生き物に関連した本を準備しコーナーに並べたが、「じどう車くらべ」の学習では、子供が自分たちで自動車の本を探して並べており、子供の成長を感じることができた。

なぞって、読んで、教室に入るよ。



考察

「生活の変化のつながりを滑らかにする」1学期だったのに対し、「遊び（興味・関心）から学習へ、遊びによって定着を図る」2学期であった。学校生活に慣れてきた子供たちの姿がある。幼児期に培った力を発揮しつつ1年生として更なる成長を促したいと考え、幼児教育の要素（環境を通じた教育、アクティブラーニング、主体的な活動の中に学び等）を取り入れつつ学習指導をしていくことはやはり大変有効であった。このような指導支援を行えるのも、幼児教育の実験を体験し、学んできたからだと自負している。

とはいえ、未だ幼小連携の具体を描けずにおり、幼保・小の交流も納得のいくようには進められずにいる。しかし、まずは教員が研修を重ね、子供の発達段階とその支援の方法を理解し、意識改革をすることが、滑らかな接続・滑らかな子供の育ちを保障することにつながるのではなかと考える。

今後、自身が得たことを他の教員と共有する研修の機会をもち、具体的に幼小連携を進めていくことで、研修の成果を子供たちに還していきたい。

はじめに

幼稚園での長期研修を終えて9か月になる。教育内容や方法及び教育環境など、園との様々な違いを改めて実感する今日である。しかし、子どもの育ちや学びに対する双方の思いや願いは共通している。そこで、幼保・小の連携及びなめらかな接続を目指し、指導の方法や環境の整備等について、これまでの取組を以下に示す。

1 遊びの重視

園では、一日中遊びを通して学ぶスタイルが取られていた。子供たちにとっての遊びの大切さや、自由な時間をもつことの意味深さ、自己選択・自己決定・自己実現ができる喜びなどを間近で感じてきた。

そこで、まず大切にしたいのは、遊びを通して学ぶ機会の充実である。遊びを通して学ぶ時間を細切れに、少しでも確保することだった。これまでのように一日中とはいかないが、できる限り、遊びを通して学ぶスタイルへとつなげたいと考えた。



①生活編

〈遊びの拡張〉

平川小学校は、低学年が遊べる場所・遊具が大変少なく、さらに校庭も広くはない。よって、室内遊びの道具を増やしたり、自然観察や虫捕り等で興味を広げたりした。また、園では身近に絵本があり、隙間時間を見つけては絵本を読みながら待つ、絵本の読み聞かせをしてもらうという機会が日常的に取られていた。そこで、図書室の時間を利用して面白い本を薦めたり、どんぐり読書すごろくやお話カードを用いて、様々な本に触れる機会を増やしたりして図書室に行く楽しみを増やした。



〈手遊び〉

園では、朝や帰りの活動、給食の挨拶、当番活動など、日頃から音楽や手遊びに合わせて活動していた。また、長いお休みに入る前は、安全に気を付けるための約束なども、リズムに合わせて歌で覚えていた。音楽の時間と区切らなくても、身近に音楽があり、音楽によって時間の切り替え、発表への促し、連絡・指導の理解の助けなどがあつた。そこで、小学校でも始まりや片づけのときに、手遊びを取り入れ合図とした。手遊びをしながら、時間の切り替えを行い、持ち物の確認や片付けをした。

〈ものまね〉

園では、運動遊びのときに、動物になったり忍者になったりして、動きを真似ながら活動していく姿があった。そこで、小学校でも、忍者の修行と題して、学校の約束を守っていけるようにした。まっすぐ一列に並びたいときには、「分身の術」と言えば、子供たちが前の人の真後ろに、同じように立とうとする。自然と一列に並べるようになった。このように、並び方、廊下の歩き方、学校での過ごし方なども忍者の修行に見立てて、楽しく行うことにした。



②授業編

〈単元導入の工夫〉

園では、子供たち自身が遊びを選び、探求していく姿があった。また、「〇〇好きな子供」、「〇〇に夢中になっている子供」を育てることに目標が置かれていた園では、まずは子供のやりたい気持ちを大切にされて、その子のしたいことを後押しして応援してあげてを大切にされていた。小学校は、到達目標があり、評価もあるため、「好きなこと中心でいいよ。」とはいかない。それでも、「面白そうかも」「やってみてもいいかな」と思えるところから始められたら…と思った。



そこで、単元の導入では、クイズをして子供たちの興味を引き出したり、映像を見ることで探求心をもたせたり、ゲームを通して考える活動へとつなげたりした。

〈電子機器の活用と動作化〉

本校では、全クラスに電子黒板が入っている。またタブレットも70台あり、子供たちは電子機器に興味津々である。そのような電子機器を使って、字の書き順を確認したり、タブレットを使って発表したり、電子黒板で説明したりすることは、子供たちにとってとても楽しみなこととなっている。電子機器の活用が、子供たちのやる気を引き出すこともある。



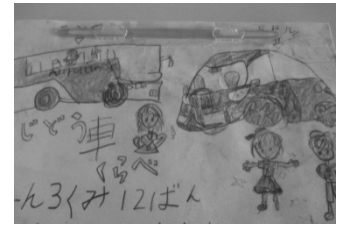
また、動作化したり、役割演技を行ったり、体験してみたりすることによって、園で行っていた劇遊びやごっこ遊びのように、遊びながら感情移入したり、体験することによって新たな発見をしたりすることがある。座学も大切だが、身体を動かしながら学ぶことも大切にしている。



〈まとめの工夫〉

単元の終わりでは、導入で取り入れたことを自分たちで取り組んでみよう、とクイズを作ったり、図鑑を作ったり、ゲームをしたりした。今度は子供自身のアレンジが入ったり、意

味を理解した上でゲームを楽しんだりすることができた。どこまでできたかという到達目標も大切だが、「好きだからやってみたい」「楽しいから続けたい」という気持ちが、集中力を高め、理解も深めるように思った。



2 環境整備

①生活編

園では、教材室には様々な色の画用紙や折り紙が並び、絵の具や紐などがたくさんあった。また、遊び道具も豊富で、その中から子供たちが想像力を膨らませて作品を作ったり、遊んだりすることができていた。一方、学校は予算も限られ、会計も個人換算されることから、それぞれのクラスで自由に物品を購入するというわけにもいかず、限られた道具や材料で作成するしかない。身近にあるものを大切に、遊びや学びへと広げていけるように、できるだけものを側に置くようにした。



②掲示物

園は、優しい色使い、壁紙や木の素材など温かみのある材料が使われた部屋に囲まれていた。また、かわいらしい掲示物に溢れ、季節を感じるオーナメントも多く、見るだけでも学びがある。少しでも真似したいと思い、園からいただいた掲示物や作品を飾ったり、真似して作ったものを誕生日表に貼付したりした。温かい雰囲気でも一日を迎えられるように、見るものにも配慮したい。



3 子供理解

①レディネスの把握

園での学びの様子を知っていたことから、「園ではこれぐらいのことをしていたので、小学校でもこれぐらいのことはできそうかな」逆に「これは経験が少ないので難しいかな」といったことが予測しやすくなった。園での学びを知っておくことで、子供たちに無理な期待をせず、よりスムーズに学びに入っていくための手立てを考えることにつながっている。

②個別理解

子供一人一人についても、園での生活を通してどのような過ごし方をしていたのか、友達との関わりはどうであったかなどを見ることができたので、個別の理解にも役立っている。また、何が得意で何が苦手であったかなど、その子の情報をたくさん得ることができていたので、何を支援したらよいかを考え、事前の対策をとることができる。

③ 一人一人の発達を理解した評価

園では、各児の成長及び成長の方向性を大切にし、一人一人の発達の理解に基づいてよさや可能性を把握する評価を行っている。小学校でも、子供一人一人の学びを大切にして、その子の頑張りや伸びを認めて褒めていくことが必要だと感じた。

4 幼保小連携

いろいろな園を訪問させていただいて、園の先生方を知ることができ、話をすることが気軽にできるようになった。また、より深い話やそれぞれの現状についても話ができるようになった。もちろん、園の先生方からも気さくに声をかけていただき、さらに提案したり声をかけたりしてくださるので、少しずつではあるが連携が進み、園児を知り、学校を知っていただく機会も得ている。

おわりに

小学校に入学してから、子供たちは学校に慣れ、成長していつている。しかしそれが、「適応したということなのだろうか」と問う今の自分がいる。「もっと他にいい方法があったのではないだろうか。」「もっと別の方法があるのではないだろうか。」と問い続ける日々である。子供たちが自分のもてる力を、伸び伸びと発揮できるように、ありのままの姿で認めてもらえる存在であるように、そのような橋渡しをしたいと考えていた。今のベストを探しながら、今できることは何か考えながら、これからも試行錯誤し、模索し続けていきたいと考えている。取組はまだまだ始まったばかりである。

幼保・小連携及び接続に関して実践した取組 ～ 「つながる子どもの育ち大会を通して」～

1. 子供同士のつながりについて

① 安心感から協働性へ

子供同士の関わりが深まるようにと、1年生2名と園児1名の固定で交流活動を進めていた。4回目の交流時（遠足）に山口大学教育学部の川崎准教授が来校されて、子供が二対一で対応することの負担の大きさについて御指導をいただいた。それ以降、それまでのペアは保ちつつ、1年生5名と園児3名のグループをつくって班活動とした。結果、園児だけではなく、1年生にとっても「安心感」がある中での交流活動となった。

長期研修を通して、「環境」の大切さを学んだが、新たに「安心感」も意識するようになった。子供たちは、「ごちそうパーティー」を成功させるために、グループで意見を出したり、準備をしたりした。「安心感」がある中での交流活動だったので、園児と児童が互いに共通の目的の実現に向けて、積極的に活動することができた。



1年生5名、年長児3名でグループの名前を何にするか考える場面。この日は、場所をやよい幼稚園にした。それにより、園児に安心感が生まれ、園児も積極的に意見を言っていた。

② 年上としての存在から自身の成長へ

入学以降、学校の中では一番若い立場の1年生だが、園児との交流活動では、年上の存在として接しないといけなくなる。そのような状況の中、「そういえば、自分が年長組の時は、よく年下の子のお世話をしていたな」と、1年前を思い出して自分の成長に気付く子供がいた。

長期研修中、年長児がまるで6年生のような役割や行動をしていて、大変驚いた。研修後、1年生を担当して、子供たちが年長組でできていたことを深化できるような環境設定をする必要があると感じた。



交流活動後の1年生の感想より

- やよい幼稚園の〇〇さんが緊張して言えない時は、「どれにしますか」って言いました。
- 年長さんのお世話をしたとき、「全部おいしいね」と言ってくれてほっとしました。

2. 教職員同士のつながりについて

「つながる子どもの育ち大会」の会場校に決定以来、長期研修経験者として、また幼保小連携担当者として、様々な面で自分が動かなければならないと思っていた。しかし、市教委の指導主事や校長から、本校の職員全体で動くことの大切さを教えていただいた。その結果、「つながる子どもの育ち大会」の要項は、職員全体で作成し、職員の幼保小連携教育推進への意識を高めることができた。

公開保育・授業の指導案については、やよい幼稚園と浅江東保育園と本校で合同の指導案検討を行った。まず、交流活動の内容が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどの姿に関連があるかを明確にした。

その上で、「活動を通して、何をを目指すのか」を互いに意識して、意見を出し合った。校種によって、活動のねらいが異なるため、互いのねらいを認めながら授業を練った。



合同の指導案検討会

園児と児童の関係と同じく、教職員同士にも「協働性」が育まれた。合同の指導案検討は、時間の調整等大変な面もあるが、行う意義は大きいと思った。

3. 学びのつながりについて

交流活動を仕組む際、交流内容や進行に気を取られた。しかし、交流授業で目指すべき姿を明確にする必要があると思うようになった。そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考にした。「ごちそうパーティー」を成功させたいという共通の目的の実現に向けて、仲間と協力する姿は「協同性」、「人をもてなすとはどういうことだろう」と考える過程では「社会生活との関わり」、身近な人との会話のやりとりを楽しむのは「言葉による伝え合い」が参考になった。

幼保小連携を進める上で、交流授業は今後も積極的に行いたい。その際に、以下のことを大事にして、豊かな心の育成や確かな学びへとつなげていきたい。

交流授業を進める上で、大事にしていきたいこと

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して交流活動を仕組む。
- 幼保・小のそれぞれの目標を明確にして、共通理解する。
- 子供にとって、どんな学びがあるか、どんな姿を目指すか明確にする。
- 年間を見通して、計画・実践・改善していく。

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として、山口県が実施した平成30年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。

山口県教育庁義務教育課

〒753-8501 山口市滝町1番1号

電話 083-933-4600

平成31年3月